



平和・文化・教育運動を推進する創価の理論誌

大白蓮華

8

The Daibyakureng

Aug. 2003 No.641



[巻頭言] 「声」こそ広布の「前進力」——秋谷栄之助

[連載] 「御書の世界」——人間主義の宗教を語る⑩

平成15年度「任用試験のために」

最新刊

地球上から

悲惨の二字をなくしたい

世界平和の大きな流れが

いまここから始まった。

★B6変型判 / 定価800円 [本体価格762円]

商品番号20860

◎単行本「新・人間革命 第1巻」とページ割が同じです。

絶賛発売中！

*収録内容

「旭日」「新世界」

「錦秋」「慈光」「開拓者」の章

聖教ワイド文庫

池田大作 著

第1巻

新・人間革命

新・人間革命

The New Human Revolution

第1巻 池田大作



〒160-8001 東京都新宿区信濃町18 聖教新聞社 TEL03(3253)6111 (大代表)

お近くの書店、出版センター・コーナーでお求めください。

ぎょう がく に どう そうるう 「行学の二道をはげみ候べし」



池田名誉会長は、教学試験に挑む友を激励。「広宣流布のために挑戦したことは、全部、永遠の福運となり、深き思い出になるのです」(2002年9月、創価女子短期大学)

任用試験——新たな人材の育成に全力!

合否を問わず、真剣に御書を学び抜いた人が「勝利者」です。
また「広宣流布の宝」です。

試験に受かろうが受かるまいが、これからが、青年の勝負です。

縦横無尽に、一人でも多くの人に、

大仏法を語り抜いてもらいたい。——『法華經の智慧』

友の笑顔



タイの尊き友よ
合掌する あなたたちよ
なればこそ
私は 祈らずにはいられない
お一人お一人が
人徳の人に——と

SGL Activities and Experiences
from Around the World

タイ・チェンマイ

長編詩「微笑の国 豊饒の大地」から



北タイ総合本部の活動の中心拠点「ランパーン会館」のオープニング式典には約1500人の友が集った（本年3月）



旧市街と新市街を隔てる堀。旧市街は城壁に囲まれている

拡大の最前線——地区座談会

よう こう
陽光のごとく輝く



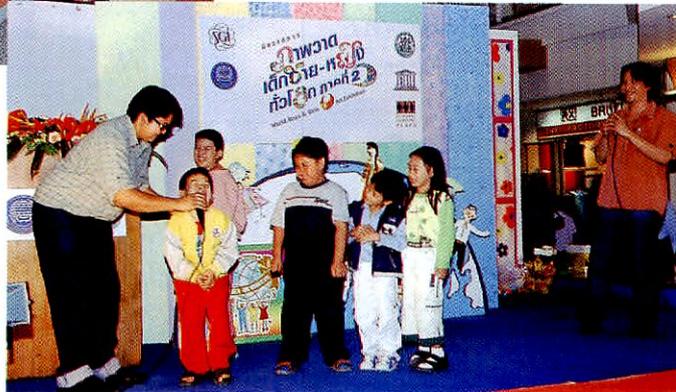
チェンマイに咲く友の微笑みの花々。チェンマイを治めた
3人の王の記念碑がある公園で



市街から約80*の山間の村・サムーンにも、
友の明るい笑い声が響く



子どもたちは未来の宝。市内で開催
された「世界の青少年絵画展」



中国・大連外国語学院 「名誉教授」に就任



「中日両国人民の永遠の友情を心からお祈り申し上げます」。孫学長の
手から「名誉教授」の証書が池田名誉会長に（創価大学本部棟で）

孫学長

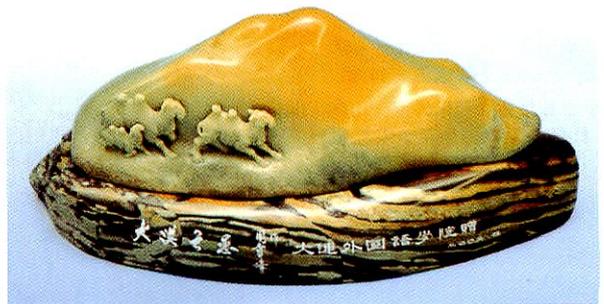
私どもが目指すのは、学生たちが大きな目的や理想を、
たくましく、強く実現していく力の養成です

池田名誉会長

青年が、恐れなく、正義と真実の声をあげてこそ、
世界の人々と連帯し、共生することができるのです

本年4月、中国・大連外国語学院から池田
名誉会長に「名誉教授」の称号が授与された。
創価大学本部棟で行われた授与式には、孫玉
華学長、蔡全勝日本語学院院长、石晓傑国際交
流处处长が出席。席上、孫学長は名誉会長の
世界平和と日中友好への貢献を讃えた。

春の大連を飾る市の花・アカシアの花言葉
は「友情」。大学と大学、人と人との交流に
よって、日本と中国の「友情の花」は永遠に
咲き続けていく。



大連外国語学院一行から贈られた「青田石」の置物



「桐一葉日当りながら落ちにけり」(高浜虚子)

「桐一葉」と言う場合の桐は梧桐を指す

葉が桐に似て樹皮が緑色の梧桐は青桐とも呼ばれる

梧桐は青桐の漢名で、中国の古代の典籍にも多出する

「梧桐一葉落ちて天下 尽く秋を知る」

「一葉落つるを見て歳の将に暮れんとするを知る」等々

梧桐は他の樹木より早く落葉を始める

秋と言うにはまだ早い、という時期に

青さを残した大きな一葉をバサリと落とすのだ

その一葉が秋の訪れの間近きを告げる

些細な現象から大勢を知り本質を洞察せよとの古賢の言

現今の世間の事象からどのような時流を読みとるか

人倫は乱れ、経綸に人なく、不安の声満ちて明るさはない

だが漆黒の闇は暁の近きを告げるものだ

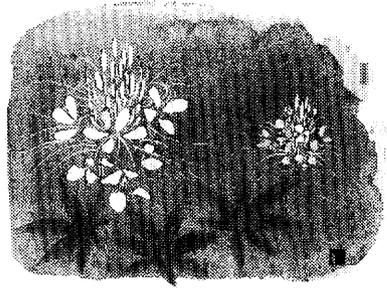
日蓮大聖人は大凶瑞を「大法興廢の大瑞」(508頁)と

なれば今こそ広布大伸展の時と決めて前進あるのみ！(由)



木下

画/鈴木竹柏



フウチョウソウ

画・坂上楠生

巻頭言

「声」こそ広布の「前進力」

秋谷栄之助

御書の世界

人間主義の宗教を語る

池田大作

弟子の法難

不惜身命・死身弘法こそ師弟の真髓

拝読御書の解説

高橋殿御返事 単衣抄

拝読御書の背景と大意

座談会 拝読御書

友人と語る座談会御書

研修会 拝読御書／拝読のために

グループ座談会 拝読御書／拝読のために

各種勤行会 拝読御書



かけがえない未来のために。ニューヨーク文化会館を訪れた池田SGI会長は真っ先に未来部員のもとへ(1996年6月、アメリカ)

[グラビア]

- * 行学の二道を
 - * ワールドスクエア④タイ・チェンマイ
 - * 平和の朝をともに④
- 中国・大連外国語学院「名譽教授」に就任

あしおと 山内薫文／西 裕子／千葉東／梅崎忠一

ワールドステア④ タイ・チエンマイ

サイエンストーク2003 「発明・発見」のドラマ② 高崎智也

39

54

56

平成15年度

任用試験のために

①御書3編

①「十字御書」

②「法華初心成仏抄」

③「四条金吾殿御返事」

78

②教学入門

①日蓮大聖人の御生涯

②十界と一生成仏

③立正安国と広宣流布

④信行学

⑤難を乗り越える信心

84

③世界広布と創価学会

①創価学会の歴史

②口頭宗破折

109

希望の明日へ 21世紀を創る未来部のページ

君よつづけ！——「青春対話」希望対話に学ぶ④

「諸葛孔明のような指導者」に！

* 未来を照らす太陽——21世紀使命会 網岡順子

* 私の未来部時代 池田伸作

後継者育成セミナー⑥

子どもは変わる 自分が変われば 小川千博

仏教ものがたり 心のたからばこ⑥

ベンカが見つけた石 文・森本和子／絵・三河啓子

なぜなの？それはね…

悪には厳しく／ 松村信雄

我が家のドラマ(福島県)

人間関係の悩みを乗り越え 佐藤トキエ／佐藤綾

読者の広場・モニター便り

* 今月の一枚 「ロバート・キヤパ」

* 留学生コーナー 内村琢也

61

65 63

66

68

72

73

74

「声」こそ広布の「前進力」



創価学会会長

秋谷栄之助

「月・日・日につより給へ・すこしもたゆむ心あらば魔たよりをうべし」(1190頁)と。信心は常に挑戦の連続である。いよいよ強く、前進また前進が、魔を打ち破る戦いであり、勝利への直道である。日々、わが使命の舞台で潑刺と戦うなかに、信心の成長と境涯の拡大があり、「一生成仏の実現と広宣流布の実践」がある。そのためにも、まず行動し、人に会い、徹して語り抜くことである。

末法の広宣流布は、人類の無明の闇を照らす聖業である。それは、一人ひとりの無明を破る精神の戦いであり、粘り強い対話で仏縁を結ぶ活動でもある。そして、一人、また一人と目覚めた民衆の善の連帯が時代を大きく変えていくのである。

時代を動かすのは常に民衆の力である。「潮」で連載されている対談「人間主義の大世紀を」のなかで、経済学者のガルブレイス博士は、東西の冷戦構造の崩壊をはじめとする世界平和への前進に対して、池田先生の尽力を高く称賛し、「民衆に力を与えること」——そこに、時代を変革するための大きな鍵がありま

す」と語っている。

「当世は世みだれて民の力よわし」(1595頁)の時代である。正義と真実を伝える一対一の対話こそ、行き詰まった社会を変え、民衆に活力を与え、平和・



画/木村圭吾

文化・人道を創造していく戦であり、民主主義の模範の実践にはかならない。

広宣流布は「声の力」で決まる。日蓮大聖人は、竜の口の法難の際、数百人の武士が草庵を襲撃した時に、大高聲で「あらをもしろや平左衛門尉が・ものにくるうを見よ、とのばら但今日本国の柱をたをす」(912ページ)と、悠然と正義を叫ばれた。塚原問答の時も、興奮する数百人の悪僧の前で、瓜を切る利剣のように悪の本質を鋭く喝破された。

「声」は広宣流布の「前進力」である。勇気の声、確信の声、慈悲の声、智慧の声、真剣の声、情熱の声、破折の声で、人々の無明の闇を払って行ってこそ、師弟不二の師子吼となるのである。

例えば、人権を侵害する捏造雑誌に対して傍観するのは、人々の無明を増長させるだけである。「百千万の人魔縁に蕩かされ」(24ページ)、「円を捨てて偏を好む悪鬼便りを得ざらんや」(同ページ)という状況を見て、放置しておくのは悪である。

「此の一凶を禁ぜん」(同ページ)との決意で、一人立ち、正義を叫ぶ、師子吼の戦いがあってこそ、民衆はその悪辣さを知り、真実に目覚めていく。人々が賢明になり、悪と戦う民衆の力を結集し、さらに拡大することが大事である。

広布の戦いには「時」がある。今は、徹して強気で悪を責め抜き、仏縁を広げ、友情を結ぶ日々の勝利を積み重ねる時である。「耳根得道の国」(415ページ)は、直接会って語ることで相手の生命が触発される。「かしこへ・おしかけ・ここへ・おしよせ」(502ページ)、「声も惜まず」(726ページ)、「日本国を日蓮経行して」(816ページ)とあるごとく、日本中のここかしこに人間主義の対話の花を爛漫と咲かせて、栄光の大勝利を築いていくのではないか。



●創価学会名誉会長

池田 大作

第20回

弟子の法難

不惜身命・死身弘法こそ師弟の真髓

地涌の使命を呼びかける

齊藤教学部長 聖教新聞紙上で「わが忘れ得ぬ 尊
き同志たちよ」の連載が始まりました。

第1回は、「昨年に亡くなられた野間浩さん
(副会長、総中国長) について書いてくださって
います。

その最後に引用されている戸田先生の言葉が心に
深く残りました。

「名誉ある弟子をもつことは、師にとって最大の
幸福だ」

池田名誉会長 命をかけて広宣流布を実現しようと
する師にとって、広布の戦いを真に継承する本格的

「聞き手」

●教学部長

さいとうかつじ
齊藤克司



●副教学部長

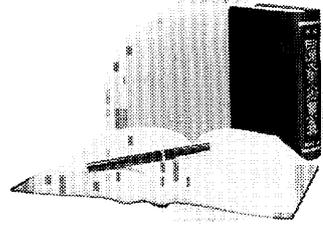
もりなかまさあき
森中理晃



〈注1〉【電の口の法難】
文永8年(1271年)9
月12日、日蓮大聖人が鎌倉
の電の口で、不当に斬首刑
に処せられようとした法難

連載

御書の



人間主義の 宗教を語る 世界

な弟子の出現ほど喜びはない。そのお心を戸田先生は述べられているのです。

「名譽ある弟子」とは、うわべや格好ではありません。信心において、そして精神において、師と同じ心を持つ人です。師と同じく不措の実践を貫く人です。

森中副教学部長 その意味では、戸田先生にとっては、池田先生こそ名譽ある弟子だったのではないのでしょうか。

名譽会長 私も、名譽ある弟子が陸續と出現してくれることを待ち望んでいます。それが私の最大の喜びです。

斎藤 この連載ですでに語っていただきましたが、日蓮大聖人の御化導においても、竜の口の法難へ注1、佐渡流罪へ注2、以降は、大聖人と同じく大難を覚悟し、大難と戦っていける本格派の弟子たちを育成して、和合僧団へ注3を再構築していく過程であると言えます。

この戦いは、大聖人が身延に入山されてから以後も、ますます盛んになっていきます。名譽会長 大聖人も、本門の弟子の登場を待たれているのです。

竜の口の法難における大聖人御自身の発迹顕本

のこと。大聖人はこの法難で頭の座に臨まれた時、凡夫としての迹の姿を開き、久遠元初自受用身の本地を開顕された。

〔注2〕「佐渡流罪」文永8年(1271年)10月10日に依智を出発し、同11年(1274年)3月13日に佐渡・一谷を出発するまで、日蓮大聖人が無実の罪で佐渡に流刑に処せられたこと。過酷な環境にあつて、「開目抄」・「観心本尊抄」などの数多くの重要な御書を著された。

〔注3〕「和合僧団」仏法を正しく受持し、実践する者の集い・組織、すなわち仏教教団のこと。

〔注4〕「発迹顕本」「迹を發いて本を顯す」と読み下す。仮に現れていた姿を開いて、本来の境地を顯すこと。日蓮大聖人は、竜の口の法難を機に、凡夫という仮の姿を開き、凡夫の身のまま、久遠元初自受用身という妙法と一体の本来の境地を顯された。

〔注4〕が、ある意味で、和合僧団全体における発迹頭本にもなっていたともいえるでしょう。

もちろん、それまでも真剣に戦ってきた弟子たちはいたでしょう。しかし、大聖人と同じ心で立ち上がる門下が陸續と出てきたという点では、まさに日蓮門下全体の発迹頭本でもあったのです。

森中 その違いは何でしょうか。

名誉会長 本質的には、地涌〔注5〕の生命の開花です。悪世末法に妙法を弘通する地涌の使命に目覚めた時、人間の持つ力は無限に広がる。

如来の使いとして、如来の事〔注6〕を實踐することができると。

和合僧団の総体に地涌の自覚がみなぎっていくことが、日蓮教団の発迹頭本です。

もちろん、この時代に、一人ひとりが「我、地涌の菩薩なり」と、自分で鮮明に意識していたかどうかは分かりません。

森中 だいたい、当時の五老僧〔注7〕自体が、そうした自覚をもって指導していたとは思えません。

名誉会長 そう。しかし、間違いないといえることは、門下の中核的存在は、皆、「大聖人と同じ心」で戦わなければならないという自覚を持つようになったということだ。

自分が地涌の菩薩という意識はなくても、上首・上行菩薩〔注8〕という外用の振る舞いをされる日蓮大聖人と同じ「不惜身命」「死身弘法」〔注9〕の心で戦う門下は、地涌の使命に立ち上がった生命境涯にあつたと言えます。

佐渡以降に大聖人が門下に強く呼びかけられた「日蓮が如く戦うべし」という仰せが、門下たちに鮮烈な自覚を与えたことは疑う余地がないでしょう。

大聖人は、「日蓮が如く」(989頁)、「予が如く」(1342頁)、「我が如く」(1367頁)と、何度も何度も繰り返して仰せになっています。根本は「如説修行」〔注10〕の實踐です。

齊藤 佐渡で著された「如説修行抄」では、「真実の法華経の如説修行の行者の師弟檀那とならんには三類の敵人決定せり」(501頁)と仰せです。

〔通解〕法華経を如説修行する真実の法華経の行者として、師匠となり、弟子・檀那となるには、三類の強敵〔注11〕が必ず競い起こってくるのである。

「如説修行の法華経の行者には三類の強敵打ち定んで有る可し」と知り給へ、されば釈尊御入滅の後二千余年が間に如説修行の行者は釈尊・天台・伝

〔注5〕【地涌】法華経從地涌出品第15で、釈尊が自らの滅後における妙法弘通を託すべき人として呼び出した久遠の弟子である菩薩たち。大地から涌现したので地涌の菩薩という。その上首(最高リーダー)が上行菩薩である。

〔注6〕【如来の事】仏のなすべき振る舞い、人々に法を説き成仏へと導く行いのこと。

〔注7〕【五老僧】日蓮大聖人が選ばれた6人の高弟のうち、法を付囑された日興上人に背いた5人のこと。

〔注8〕【上行菩薩】地涌の菩薩の上首である菩薩。釈尊から滅後の末法において妙法を闊浮提(全世界)に流布することを託された。

〔注9〕【不惜身命・死身弘法】不惜身命は「身命を惜みず」と読み下す。法華経勸持品第13の文(法華経412頁)。仏法求道のため、また法華経弘通のた

教の三人は・きてをき候ぬ、末法に入つては日蓮並びに弟子檀那等是なり」(504頁)とも仰せられています。

〈通解〉如説修行する法華經の行者には、三類の強敵が必ず起こつてくると知りなさい。したがって、釈尊の御入滅後、2千年余りの間に、如説修行の行者は、釈尊・天台・伝教の3人は別として、末法に入つてからは、日蓮およびその弟子・檀那以外にいないのである。

名誉会長 「日蓮並びに弟子檀那」と示されている。ありがたいことです。

大聖人と同じ戦いを起こす弟子・檀那たちも、皆、如説修行の法華經の行者であると示されている。心ある門下は、自分たちも大聖人と同じ法華弘通の戦いを開始しようと決意新たに前進したことでしよう。

斉藤 同じく佐渡で認められた「諸法実相抄」には、次の有名な一節があります。

「いかにも今度・信心をいたして法華經の行者にとをり、日蓮が一門となりとをし給うべし、日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか、地涌の菩薩にさだまりなば釈尊久遠の弟子たる事あに疑はんや」

(1360頁)

〈通解〉なんとしても、この人生で信心をしたかには、法華經の行者として貫き、日蓮の一門として生きぬいていきなさい。日蓮と同意であれば地涌の菩薩なのであり、地涌の菩薩として定まつたならば、釈尊の久遠以来の弟子であることは間違いないのである。

大聖人と同じ心で戦う日蓮門下は地涌の菩薩である、はつきりと断言されています。

名誉会長 「日蓮がごとく身命を捨てよ」とまで仰せられているのは「閻浮提中御書」だね。

森中 はい。こう仰せです

「願くは我が弟子等は師子王の子となりて群狐に笑わるる事なかれ、過去遠劫より已来日蓮がごとく身命をすてて強敵の科を顕せ・師子は値いがたかるべし」(1589頁)

〈通解〉願わくは日蓮の弟子らは師子王の子となり、群狐に笑われることがあつてはならない。過去遠劫よりこのかた、日蓮のように、身命を捨てて強敵の罪惡を顕せ。そのような真の師子には会い難い。

斉藤 大聖人のそうした呼びかけは、枚挙に暇ありません。

めに身命を惜しまないこと。同じ勸持品の「我不愛身命」(同420頁)、また寿量品の「不自惜身命」(同490頁)と同意。「死身弘法」は「身を死して法を弘む」と読み下す。章安大師の「涅槃經疏」にある。教法流布の精神を示したもので、身を賭して法を弘めることをいう。

〈注10〉【如説修行】「説の如く修行す」と読み下す。仏の教説のごとくに修行すること。法華經如来神力品第21の文(法華經572頁)。

〈注11〉【三類の強敵】法華經勸持品の二十行の偈(法華經417頁)では、滅後惡世で法華經を弘通する人を迫害する者が示されるが、それを妙業大師が「法華文句記」で俗衆増上慢(在家の迫害者)、道門増上慢(出家の迫害者)、僭聖増上慢(聖人がつて人々からの尊敬をうけながら迫害する者)の3種類に分類したものである。

「四菩薩造立抄」では、「日蓮が弟子と云つて法華經を修行せん人人は日蓮が如くにし候へ」(989頁)と仰せです。

「寂日房御書」には、「かかる者の弟子檀那とならん人人は宿縁ふかしと思つて日蓮と同じく法華經を弘むべきなり」(903頁)とあります。

この両抄とも弘安2年の御述作とされていますから、身延期でも終始一貫して大聖人が「日蓮がごとく」「日蓮と同じく」と強調されていたことがうかがえます。

名譽会長 今の「寂日房御書」の一節の前では、大

聖人が上行菩薩であることを示されているね。

齊藤 はい。「日蓮は此の上行菩薩の御使として日本国の一切衆生に法華經をうけたもてと勧めしは是なり」(同頁)と仰せです。

「御使」とありますが、「日蓮となれる事自解仏乗とも云いつべし」(同頁)等の仰せから、御自身が上行菩薩であるとの御確信があつての表現であることは間違いないと思います。

名譽会長 ここで明確になったことは、「日蓮と同じ」とは、大聖人と同じく、強敵の科を顕し、三類の強敵と戦う覚悟の信心を貫くということです。



信仰とは無限の希望 / 不惜身命の「戦いの日々」の池田名譽会長夫妻——「追撃の手をゆるめるな / 」(本年6月、東京)

大聖人と同じ法華經の行者の実践を貫くことと言
い換えてもいいでしょう。

仏が求めるのは、真実の弟子です。

いわば、「偉大な仏に守られる」ことをこいねが
うような弟子ではなく、「仏とともに戦い抜く」弟
子の出現を仏は待ち望んでいる。

師匠に守ってもらおうというのでは、まだまだ本
当の境地には至っていない。師匠と同じく民衆を
守ってこそ、真実の師子の弟子です。

法華經という經典自体が、仏が真実の弟子を待望
し、期待している「師の呼びかけの經典」である
もいえるでしょう。それではなくては、末法の民衆の
救済などできないからです。

齊藤 無明に覆われた末法の時代の民衆を救うこ
は、それだけ難事中的の難事だということですね。

名誉会長 法華經で釈尊は、末法の弘教は迹化の大
菩薩でも困難なゆえに、本化地涌の菩薩を呼びだ
した。

森中 迹化の菩薩は文字通り迹門の仏(迹仏)に化
導された弟子。本化地涌の菩薩は、久遠以来、本門
の仏(本仏)に化導され、鍛え抜かれて、涌出品で
大地を割って出現してきた無数の弟子ですね。

名誉会長 法華經でも、発迹顕本した「本門の仏」

のもとに、末法の弘教を担う「本門の弟子」すなわ
ち地涌の菩薩が出現した。

師も弟子も一体となって本門の戦いを起こしてこ
そ、悪世末法の社会を変革していくことができるの
です。

日蓮大聖人の御化導においても同じです。

大聖人が、ただ御一人、立宗宣言の日から妙法弘
通を開始されて、竜の口の法難・佐渡流罪を頂点と
する大難との連続闘争を繰り広げられた。

これは、大聖人の胸中における仏界の涌現が全
宇宙の諸天善神を動かし、民衆の生命の奥底に変革
の楔を打ち込む戦いです。

竜の口の法難で発迹顕本された日蓮大聖人の御一
身は、宇宙の根源の法と一体であられ、その「事の
振る舞い」のなかに大宇宙の仏界が脈動している。

大聖人は、その胸中の仏界の生命を一幅の曼荼
羅に認められ、万人が仏界を顕現していく明鏡とさ
れたのです。

齊藤 師である大聖人が、不惜身命・死身弘法の実
践で成就された仏界の生命を顕された御本尊です。
弟子も、不惜身命の信心で題目を唱え、死身弘法の
実践をしてこそ、この御本尊に適用といえます。

名誉会長 そうです。その本格的な弟子の育成が、

次の大聖人の闘争の核心です。そして、本格的な弟子の出現を待って、全人類の成仏を願われた大御本尊建立へと続いていく。

日蓮大聖人の御一代の戦いは、同時代の民衆救済のために、国主を諫暁して、謗法に覆われた当時の日本国を、法華経根本の世として立て直そうとされた。

とともに、大聖人の御本意は末法の時代そのものを救うことであり、末法万年にわたる民衆救済のための「大法」を確立されることであった。

これが「法体の広宣流布」です。

この「法体の広宣流布」という観点から大聖人の御化導を精細に拝察すると、大聖人御一人の闘争としての御本尊御図頭までと、大聖人と同じ志で戦う民衆の出現を待っての大御本尊御建立という段階があることが押せます。

齊藤 本門の戦う弟子が出現してこそ、日蓮大聖人の三大秘法の弘法が確立するということですね。

名誉会長 大聖人の「法体の広宣流布」という源流があつてこそ、末法万年にわたる「化儀の広宣流布」という大河があるのです。そのどちらにあつても師弟不二の実践が不可欠なのです。

森中 不惜身命・死身弘法こそ「不二」の内容です

ね。

名誉会長 そうです。大聖人は、佐渡から鎌倉に戻り、平左衛門尉頼綱（注12）ら幕府重臣を相手に第3回の国主諫暁を行つてから、鎌倉を退出され、身延に入山されました。この身延入山は単なる隠棲ではなく、本門の弟子の育成と法体の広宣流布の戦いの本格的な開始であられたのです。

鎌倉退出、身延入山

森中 3回目の国主諫暁の模様については、既に語つていただいた通りです（連載第16回）。

これが文永11年（1274年）の4月8日のこと、約1カ月後の5月12日には鎌倉を退出し、17日に身延に到着されています。この間の大聖人の御心情はどのようなものだったでしょうか。

名誉会長 大聖人は、3回目の諫暁の前後の御心情を「高橋入道殿御返事」で綴られているね。

森中 はい。拝読します。

「たすけんがために申すを此程あだまる事なれば・ゆりて候いし時さどの国より・いかなる山中海辺にもまぎれ入るべかりしかども・此の事をいまい度平左衛門に申しきかせて日本国にせめのこされん

〔注12〕平左衛門尉頼綱？1293年。鎌倉時代の武将。北条時宗、貞時の2代の執権に仕え、侍所の所司（次官）として軍事、警察を統括するなど、鎌倉幕府の政治上の実力者として権勢をふるった。真言律宗の極楽寺良観らと結託して日蓮大聖人を迫害し、門下を弾圧した。

衆生をたすけんがためにのほりて候いき、又申し
 ませ候いし後は・かまくらに有るべきならねば足
 任にまかせていしほどに便宜にて候いしかば設い各
 各は・いとせ給うとも今一度はみたてまつらんと
 千度をもひしかども・心に心をたたかいてすぎ候い
 き」(1461ページ)

〈通解〉日本の国を助けるために諫暁してきたの
 であるが、これほど憎まれることになってしまっ
 たのであるから、(佐渡流罪を)赦免になった時
 に、佐渡の国から、どこかの山中か海辺にまぎれ
 込んでしまふべきであったけれども、このこと
 (真言による祈禱は亡国をもたらすこと)を、も
 う一度、平左衛門尉に言い聞かせて、蒙古の攻め
 に生き残るであろう日本国の人々を救うために、
 鎌倉に上ってきたのである。また、平左衛門尉ら
 を諫暁したあととは、もはや鎌倉にいるべきではな
 いから、足に任せて鎌倉を出たのであるが、(身
 延へ向かう)ついでであるから、たとえあなた方
 (駿河の人々)が嫌がったとしても、もう一度、
 お会いしていこうと1000回も思ったが、心と
 心を戦わせて、会わずに通る過ぎたのである。
 名誉会長 苦悩する日本国の人々をなんとしても救
 いたいとの大聖人の御心を拝することができま

「日本の柱とならむ」と誓われた立宗時の誓願その
 ままの御心です。

しかし、深く謗法の酒に酔っている日本の指導者
 たちは、大聖人の諫暁の御心がわからなかった。

真言による祈禱は亡国の因であるというのが、大
 聖人のこのときの諫暁の内容の一つであるにもかか
 わらず、幕府は、わずか2日後の4月10日に、真
 言宗の僧・加賀法印に命じて祈雨の修法を行わせ
 ています。

森中 はい。当時は旱魃だったようで、阿弥陀堂の
 加賀法印が修法を行うと、翌日、一日一夜、雨が降
 りました。執権・時宗は大いに喜び、引き出物を贈
 って称賛したようです(921ページ)。

しかし、雨が降ったことは降ったのですが、その
 翌日には大風が吹き、大変な被害を出したようです。
 当時の記録には、「四月十二日大風。草木枯」と
 されています(注13)。草木が枯れるような風とは、
 尋常ではありません。

奇藤 大聖人も「大小の舍宅・堂塔・古木・御所等
 を或は天に吹き飛ばせ或は地に吹き入れ、それには
 大なる光り物とび地には棟梁みだれたり、人人を
 も・吹きころし牛馬ををくたふれぬ」(922ページ)
 と記されています。

〔注13〕「関東評定衆伝」

名譽会長 この幕府の態度から、大聖人は鎌倉幕府を相手にするのをやめられたようです。そこで、1カ月後に鎌倉を退出されるのです。

森中 その間に書かれたと思われる御書には、「事三ヶ度に及ぶ。今諫暁を止むべし。後悔を致す勿れ」〔注14〕と仰せです。

名譽会長 蒙古襲来の危機がもはや目前に迫っている。大聖人の命懸けの諫暁に対しても、傲慢な権力者たちは、この期に及んでも聞く耳を持たない。そこで『礼記』や『史記』などに書かれている「三度いさめても聞かなければ去れ」という言葉〔注15〕にならって鎌倉を去られたのです。

しかし、それは、幕府相手の諫暁という方法を止めたということであって、当然、当時の民衆の救済を断念したということではありません。

大聖人は佐渡期以後、民衆救済・広宣流布の道として「地涌の義」を明示されていきます。つまり、大聖人が一人立ち上がられ、二人、三人と、地涌の菩薩の自覚を持った人を増やしていかれたのです。

例えば「諸法実相抄」に、「日蓮一人はじめは無妙法蓮華経と唱へしが、二人・三人・百人と次第に唱へつたふるなり、未来も又しかるべし、是あに

地涌の義に非ずや」(1360頁)とあります。

同様の内容は身延期の「撰時抄」にも示されています〔注16〕。

いよいよ本格的な弟子を育成し、末法万年にわたる本格的な広宣流布の流れを築くために身延に入られたのです。

森中 その意味では、大聖人の身延入山は、決して、世間的な隠棲や遁世ではありませんね。

名譽会長 そうです。身延入山には明確な目的があられたと拝察できます。

それは、一つには、末法万年の広宣流布のための法門の確立です。

もう一つは、大聖人と同じ誓願と行動を貫く広宣流布の本格的な弟子の養成にあつたといえるでしょう。

佐渡流罪までは、大聖人御一人が広布の戦端を、文字通り命懸けで切り開いてこられた。

その同じ闘争を弟子に勧め、広宣流布の流れをより大きく確実なものにし、末法万年の広宣流布の基盤を築かんとおの思いであられたと拝される。

すべては、弟子の戦いで決まる。宗祖がいかに立派であつても、弟子がその魂を受け継ぎ、発展させていかなければ、宗祖の魂は死んだに等しい。

〔注14〕「末驚天聴御書」〔昭和定本8008頁〕

〔注15〕「三たび諫めて聴かれずんば即ちこれを逃れ」〔礼記〕曲礼

〔注16〕「衆流あつまりて大海となる徹塵つもりて須弥山となれり、日蓮が法華経を信じ始めしは日本国には一滯・一微塵のごとし、法華経を二人・三人・十人・百千万億人・唱え伝えるほどならば妙覺の須弥山ともなり大涅槃の大海ともなるべし仏になる道は此れよりほかに又もとむる事なかれ」(288頁)

弟子が師匠の真価を決することを、ゆめゆめ忘れ
てはならない。

大聖人は、山林に身を隠して世俗の権力と一定の
距離を置かれても、御胸中に燃える広宣布への闘
争の魂は、消えるどころか、いや増して燃えさか
っていた。

あえて御自身が山林に身を隠されたことは、門下
こそ広宣布の闘争の主役たれとの御指導であつた
と拝したい。

齊藤 とはいえ、多くの門下にとっては、大聖人の
御振る舞いを目にしてきただけに、自分たちが主役
となって広宣布を切り開いていくことに、大いな
るとまどいがあつたのではないでしようか。そのた
め、大聖人にさまざまな御指導を求めたと思いま
す。その御指導のままに、具体的な広宣布の闘争を展
開していったであろうことは、身延期の数々の御消
息からもうかがえると幸いです。

名誉会長 大聖人は初めから計画的に身延を目指し
たわけではなく、「足にまかせて」鎌倉を出たと言
われている(注17)。おそらくは身延の地頭・波木井
実長を入信させた日興上人の勧めもあつて、身延に
向かつたのでしよう。しかし、結果的には、身延の
地理的状况は絶妙なものがあつたといえるでしよ

う。

森中 大聖人は、身延には長く住む気持ちはない
が、当面の意には、おおよそ適っていると書かれて
います(注18)。

名誉会長 そう。意に適っていると書かれているこ
との内容を拝察すると、一つには、政治の中心地で
あり、弘教・拡大の本拠地である鎌倉から、さほど
離れていない距離にあつた。

また、有縁の門下の根拠地にも近い。さらに、幕
府に対する「山林に身を隠さん」(358頁)との
御心に適う地でもありました。

一方、故郷・安房(現・千葉県南部) 方面には、
大檀那も存在せず、いざという時に迅速な動きが取
りにくい。また、大檀那・富木常忍たちがいた下総
(現・千葉県北部) は遠い。さらに駿河(現・静岡県
中央部) 以西に大聖人門下の拠点があつたわけでも
ない。

そうしたなかで、波木井郷は、身延という山間地
帯にあり、世間に対して「隠棲」のイメージを与え
ることができると言える。また、鎌倉にも、馬を飛ばせば一
昼夜という距離にあり、さらに南に下れば駿河に、
東に向かえば武蔵、北には信越方面への道が開けて
います。

〈注17〉「又申しきかせ候
いし後は・かまくらに有る
べきならねば足にまかせて
いでしほどに便宜にて候い
しかば」(1461頁)

〈注18〉「いまださだまら
ずといえども、たいしはこ
の山中・心中に叶いて候へ
ば・しばらくは候はんずら
む」(964頁)

蒙古襲来による動揺

斎藤 身延入山後、初冬の10月（新暦では11月）に蒙古が襲来しました。大聖人の御予言通り、年内の来襲でした。

名誉会長 蒙古との合戦は、日本人がはじめて経験する異文化との真つ向からの衝突でした。これによって、社会が大きく変動していきます。大聖人と門下を取り巻く状況もまた、それにつれて変化していきます。

森中 戦闘そのものにおいても、統制のとれた集団攻撃、毒矢や火薬を用いた兵器の使用、捕虜の扱いなど、日本の武士の常識を超えることが続きました。

名誉会長 どれも、当時の武士たちにとって、大きな衝撃だったでしょう。特に、対馬・豊岐での戦闘は大激戦で、守護代が戦死するという大変な事態であった。

斎藤 また、日本と大陸との貿易拠点であった博多の街が焼け落ちたのは、経済的にも大きな痛手となりました。

さらに、武門の神である八幡を祀った宮崎宮（注19）

も焼失しましたが、これは武士たちにとって、精神的衝撃が大きかったと思われれます。

森中 九州本土での戦闘は、10月19日、20日のわずか2日間で、21日朝には船影が1艘を残してすっかり消えていきました。

なぜいなくなったかは諸説あるようですが、いわゆる神風が吹いて博多湾に沈んだのではなく、混成軍であったためまともならず、撤退した、と推定されています。

名誉会長 とはいえ、蒙古軍の力は強大であった。武士はそれなりに奮闘したものの、蒙古襲来は、日本人々に、ぬぐいがたい恐怖を植え付け、とめどない不安を残した。

大聖人は、当時の人々の心情を「又今度よせくるならば、いかに此の国よはよほと見ゆるなり」（923頁）と記されている。

この前代未聞の一大事によって、世の中がより一層、大きく動いていった。

森中 翌年、文永12年の4月15日、長門国室津（現・山口県豊浦町）に元の使い・杜世忠らが到着します。杜世忠らは、鎌倉に送られ、9月7日に、竜の口で頸を刎ねられました。

名誉会長 幕府の態度は一層、硬化し、正常な判断

〔注19〕「宮崎宮」福岡市東区箱崎にある神社。創建は延長元年（923年）とされる。蒙古襲来の危機に際し、異国調伏の祈禱を行った。

〔注20〕「又蒙古の人の頭を刎られ候事承り候日本国の敵にて候念仏真言禪律等の法師は切られずして科なき蒙古の使の頭を刎られ候ける事こそ不便に候へ」（1472頁）

〔注21〕「永く和親を絶たんがため通問せざるの策」（関東評定衆伝）

〔注22〕建治元年（1275年）11月には、時宗が守護として統治する得宗分国として播磨・備中を加える。西国各地の守護は、筑後は北条義政となり、肥後は安達泰盛で名代として息子・盛宗が赴任、豊前は北条実時で息子・実政が赴任、長門は時宗の弟・北条宗頼となる。

〔注23〕建治元年末ごろ、伯耆国守護として赴任した三浦（署名）次郎左衛門の

ができなくなっていた。

大聖人は、蒙古の使者について、鎌倉から駿河國の地元へ戻ったばかりの西山入道から報告を受けられた。その御返事が「蒙古使御書」です。

同抄には、幕府の非人道的な暴挙を嘆き憤られ、むしろ頸を切るべきなのは、誤った教えで人々を迷わし苦しめている諸宗の僧である、と仰せです（注20）。

齊藤 以前は、元や高麗から使いが来たときは、大宰府にしばらく止め、返答しないと決まれば追いついていました。

この時の性急な対応は、幕府の姿勢が一層、強硬になったものといえます。

処刑理由も、永久に和親を断ち通交しないため、という頑ななものでした（注21）。

名誉会長 幕府の要人たちは、不安が募る一方なのに、なす術がなく、追い詰められ、閉塞していったからではないだろうか。

狭量で臆病な者ほど、権力を振りかざして残酷な行為を平気でやってしまう。本心に勇敢な者は、粘り腰で対峙し、真に雌雄を決すべき時に大胆かつ俊敏に動くものです。

森中 幕府の中樞は、未曾有の危機に直面して激し

く動揺し、次第に軍事重視に傾斜し、管理統制を一段と強めていきます。

九州・中国地方の日本海側諸国の警護を強化し、しかも、その守護職を幕府要人で固めていきます（注22）。

また、驚いたことに、このころ、「異国征伐」「高麗征伐」の準備をしていたようです（注23）。これも正常な判断力を失っていたことを示しています。

齊藤 幕府は、蒙古との戦いに、武士だけを動員したわけではありませんでした。宗教界をも大きく巻き込んでいきました。

当時の人々は、神仏への祈禱も戦いの重要な要素と考え、「神戦」等と呼んでいました。

軍事的な統制と並行して、幕府は異国降伏祈禱をも体制化していきます。

名誉会長 日本各地の寺社に祈禱を依頼し、祈禱の実績報告を受け、その褒賞として所領を与える仕組みを整えたようだね（注24）。

森中 幕府が恩賞を与える時、武士たちより寺社を優先する傾向があったという指摘が研究者からあります（注25）。

宗教の側もこれを契機に所領の獲得を図ってい

赴任理由が「異国制覇」である。また12月8日には、幕府は、安芸国守護・武田信時に対して、翌建治2年3月に「異国征伐」に向かうので水夫等を招集、動員するように、と命じている。

（注24）例えば、建治元年9月14日、近江守護・佐々木泰綱に国中の寺社に異国降伏を祈禱させ、さらに祈禱した巻数を実績として報告するよう、求めている。

（注25）佐伯弘次『日本の中世9 モンゴル襲来の衝撃』中央公論新社刊

きました。

当時、蒙古軍が撤退したのは、神仏のはたらきで起こった神風のおかげだとして、その褒賞を求める者がいたのです（注26）。

齊藤 この異国調伏を率先して行い、最も熱心だったのが、真言律宗（注27）です。西大寺の思円（觀尊）、極楽寺良觀（忍性）の師弟の宗です。

思円は文永5年の国書到来から調伏を祈り、文永10年には伊勢神宮に参詣し經典を納めています。

弘安の役の時には、良觀は鎌倉の稲村ガ崎で仁王經を講じています。博多にも異国調伏の拠点となる末寺をつくったりもします。

幕府の政策推進にあたり、精神面でのプロパガンダ（宣伝）を担っていたようです。

名誉会長 幕府は、国を挙げて外敵排除を目指す体制を整えていったが、その体制に宗教も、私利私欲に目がくらんで、自ら進んで組み込まれていった。

そのなかにあって、大聖人は一人、その誤りを訴え、異を唱えられた。

それゆえ、幕府にとって、また幕府と結託する七聖職者にとって、大聖人は目の上のたんこぶであったのは疑いないだろう。

齊藤 エセ聖職者らが、またもや策謀をしかけてきます。

建治元年（1275年）12月26日、強仁房からの書状が、大聖人のもとに届きます。その書状は、不思議なことに、10月25日付のものでした。幕府が挙国体制をどんどん進めているころの日付です。そのなかで、策謀が進められていたことがうかがえます。大聖人は、即座に返書を書き、強仁房の難癖を打ち破るとともに、公場対決を促されます（184頁）。

森中 ほどなく年が明けて、建治2年となります。大聖人は、1月11日に清澄寺に手紙（「清澄寺大衆中」）を送られました。真言宗との法論の準備のため、関連する書籍の借用を願われています。名誉会長 同抄には、「今年に殊に弘法の邪正たさるべき年か」（893頁）と記されている。

弘法の正邪の決着をつけて、なんとしても立正安国の道を確認しよう、との固い御決意を拝すことができません。

齊藤 しかし、大聖人の返答が、あまりにも鋭い破折であったので、強仁房はうやむやにして逃げてしまったのです。自分から訴えておきながら、不利と感じるや逃亡してしまふ。まったくもって卑怯です。

〔注26〕薩摩国分寺文書のうち建治元年12月3日の宣旨案には、天満宮・国分寺の所司の書状が引用され、蒙古軍が九州に来て合戦が行われたが、神風が荒れ吹き、異賊は命を失い、乗っていた船は海底に沈んだり、浦に打ち寄せられたりした。これは、靈神の征伐であり、観音の加護である」と主張されている。

〔注27〕「真言律宗」思円（觀尊）、1201年〜1290年）が真言による祈禱に戒律遵守などを取り入れ興した宗。弟子の良觀（忍性）、1217年〜1303年）が、鎌倉へ進出し、幕府の権力と密接な関係をきずき、土木・建築、貿易などの事業を掌握し、権勢を誇った。

名譽会長 しかも、良観らの策謀は、どうも、それだけではないようだね。

3月ごろから、大聖人が蒙古襲来を喜んでいこうデマが流れている。また、一方的な大聖人への悪口や噂が広がっていた(注28)。

さらに、このころ、鎌倉で退転者たちの蠢動が始まった。

森中 はい。4月上旬、四条金吾が、極楽寺と鎌倉御所の焼亡を詳しく報告するとともに、「名越の事」を報告しています(1137頁)。(注29)。これは名越の尼が策動したことを指しているのではないかと推定されています。

それにしても、どうして良観らはこのころ、種々の手立てを使って大聖人の門下を陥れようとしていたのでしょうか。

名譽会長 考えられることは、「法論」が実現しそのうであつたからではないか。

このころ、大聖人は、弟子たちをあらゆるところに派遣して、法論のために必要な経論を収集されています(330頁)。法論が接近していたことが窺えます。

森中 とすると、良観は、負けが見えているので、法論をやらずにうまく逃げ切ろうという魂胆だった



弟子の戦いが問われている——「師子とは師は師匠子は弟子なり」(771頁)。弟子が「最も厳しい所」で戦い抜いてこそ勝利(本年6月、東京)

のかもしれないね。また、大聖人門下を分断して、事を有利に運ぼうと画策していたのかもしれない。

いずれにしても悪辣なやりかたです。

名譽会長 鎌倉も大変だったが、当時、駿河でも、熱原に弾圧の手が伸びてきていた。

挙国一致・政教一体で蒙古戦争へ向かう幕府権力と、その根底の誤りを糾弾する大聖人とは、どういう場面でも衝突する。その逆境のなかでどう戦うか——それがこの当時、弟子たちに問われたことだ

〈注28〉「又むくりのおこれるよし・これにはいまだうけ給わらず、これを申せば日蓮房はむくり国のわたるといへば・よろこぶと申すこれゆわれなき事なり」(1534頁)

「日本国の人人は法華経は尊とけれども日蓮房が悪ければ南無妙法蓮華経とは唱えまじと・ことはり給ふとも」(1241頁)

〈注29〉「王舎城事」の記述。同抄は建治元年の述作とされてきたが、極楽寺と鎌倉御所の焼亡などの内容から建治2年の執筆と考えられる。

ったのではないか。
森中 大聖人が身延に入られてから、弟子たちに難が次々と起こってきたのは、幕府が進める戦時体制の強化という背景があったのですね。

弟子たちの闘争

齊藤 一方、打ち続く大難のなかでも、信心を貫いてきた勇敢な人々は、大聖人の予言的中という実証に一段と勇気を得て、果敢に正義の主張を展開していったようです。

建治元年（1275年）7月22日の「四条金吾殿御返事」（1139頁）には、金吾が16日に他宗の僧に会って「諸法実相」の法門について議論したと大聖人に報告したことが記されています。

11月23日の「観心本尊得意抄」（972頁）には、富木常忍（注30）が、曾谷教信（注31）に悪影響を与えていた「北方の能化」なる天台僧とおぼしき人物と論議したことがうかがえます。

名誉会長 また、日興上人が中心となって展開されていた、駿河地方の弘教も大きく進展していった。駿河国の守護は時宗であり、御書にも仰せのように、得宗領（注32）が多くあり、時頼の妻、時宗の

母で極楽寺入道重時の娘である後家尼御前の所領もあつた。

領内の人々は、時頼・重時が謗法のゆえに地獄に堕ちたと言つたと伝えられる大聖人のことを敵のように思つていたことでしょう（注33）。

いわば幕府中枢の懐深く入つた場所ともいえます。その大変な地で、若き日興上人は、地元の人であった高橋入道らと力を合わせ、猛然と弘教拡大を行われたのです。

しかし、そのような大聖人門下の勢いを苦々しく思う勢力も当然あつただろう。

大聖人の流罪赦免で面子がつかぬ、引き籠もつていた良観、自らの手で大聖人を捕縛しながら赦免後は掌を返したように慇懃な応対をした平左衛門尉。その他、幕府の中枢にも、大聖人を快く思つていない人間はまだいたことだろう。

森中 ちなみに、良観といえば、大聖人の鎌倉御帰還時には仮病をつかつて引き籠もつていたのですが、翌建治元年の3月に自身が住んでいた極楽寺が炎上し、鎌倉市中も被害にあつています。

大聖人も、一谷入道に渡すために書写された法華経を焼失した、と入道の女房への御手紙に記されています（1329頁）。

〔注30〕「富木常忍」(？) 1299年。下総国葛飾郡八幡荘若宮(現・千葉県市川市)に住し、千葉氏に仕えていた武士。日蓮大聖人が立宗宣言をされて間もない建長6年(1254年)ごろに入信したとされ、よく外護の任に励み、門下の中核として活躍した。

〔注31〕「曾谷教信」(1224年~1291年)。曾谷二郎兵衛尉教信。曾谷入道、教信御房とも呼ばれる。下総国葛飾郡曾谷に住した。文応元年(1260年)ごろ、大田氏、秋元氏らと相前後して入信したとされる。迹門不誦の僻見を起こして、大聖人から訓戒を蒙つたこともある。

〔注32〕「得宗領」得宗とは北条氏の家督のこと。得宗領には、防衛・交通などの要所が多く含まれていた。

〔注33〕「するかの国は守護の御領」(？) するかの国は守護の御領にふじじなど

また翌建治2年（1276年）1月20日に鎌倉御所が焼亡した時の火事も極楽寺がかかわっていたようで、大聖人は、良観房ではなく両火（二度の火災）房だ、と糾弾されています（1137頁等）
〈注34〉。

名誉会長 身延におられた大聖人のもとには、各地の弟子たちの闘争の状況が逐一報告されていた。大聖人は、それを受けて、指示を与え、激励の言葉を送られていた。大聖人のおられるところは、鎌倉であろうと、佐渡であろうと、身延であろうと、戦いの本陣だった。とても静かな隠棲などではなかった。身延においても「日蓮一度もしりぞく心なし」（1224頁）です。常在戦場であられた。
森中 これに対して、迫害の魔手も門下一人ひとりをも襲ってきます。

このころ、特に矢面に立って攻撃を受けたのは、池上宗仲・宗長の兄弟であり、四条金吾でした。いずれもその黒幕には、良観がいました。

名誉会長 弟子たちを苦しめたのは、封建的な人間関係のなかでの迫害です。恩義を受けた主君や親から、信仰を捨てるよう強要された。

社会的な地位や財産を取るのか、それとも信仰を取るのか——弟子たちは二者択一を鋭く迫られた。

森中 池上宗仲は、建治年間に2度にわたって父親から勘当されています。

池上兄弟が、いつ大聖人の仏法に帰依したか確かな史料はありませんが、建長8年（1256年）ごろ、工藤吉隆、四条金吾らと同時期に入信したと伝えられています。大聖人の佐渡流罪中も、四条金吾や富木常忍らとともに門下の中心として戦ったことでしょう。

齊藤 池上家は、有力な工匠として幕府に仕えていました。幕府の土木・建築事業は、良観ら真言律宗が掌握していました。大聖人が「良観等の天魔の法師らが親父左衛門の大夫殿をすかし」（1095頁）と述べておられるように、父の康光は、良観の信奉者であって、何らかの圧力を受けていたと思われまます。当然、親子の確執は激しくなったに違いありません。

森中 兄・宗仲が1回目の勘当にあったのは、建治2年（1276年）の春と推測されます。大聖人が「兄弟抄」を送られて激励されたのが、この年の4月です（注35）。建長8年に入信していたとすれば、入信からちょうど20年後ということになります。

当時の武家社会で、勘当というのは大変なことです。

は後家尼ごぜんの内の人人多し、故最明寺殿・極楽寺殿のかたきといきごとをらせ給うなればききつけられは各々の御なげきなるべしとおもひし心計りなり」（1461頁）

〈注34〉「其の上名と申す事は体を顕し候に両火房と申す謗法の聖人・鎌倉中の上下の師なり、一火は身に留りて極楽寺焼て地獄寺となりぬ、又一火は鎌倉にはなちて御所やけ候ぬ」（1137頁）

〈注35〉「兄弟抄」の御執筆年は建治元年とされてきたが、前年を「文永十一年」として「去年」といわれていない点などから、建治2年と考えられる。

勘当を受けた子は、所領も没収され、家督相続権や遺産相続権も、さらに惣領を継ぐ地位も失ってしまふ。経済的な基盤も、社会的な身分も奪われてしまふのです。

齊藤 1 回目の勘当については、なぜ起きたのかについて、確かな史料は何も残っていません。

宗仲が入信してから20年もたっています。それまでも、対立があったこととは思いますが、なぜ、父・康光は、この期に及んで、勘当という強引なやり方を取ったのか……。

名誉会長 やはり良観の策動があったにちがいない。良観は、攻撃の矛先を弟子に向け、大聖人一門の切り崩しを図った。大聖人門下には、弟子が自ら立とうという機運が盛り上がっていた。だからこそ、各所で良観一派と火花を散らすことになったのでしよう。

齊藤 池上兄弟は、大聖人から「兄弟抄」という長文の御手紙を頂き、信心を奮い立たせて、父・康光の圧迫をはねのけることができた。その結果、父は、宗仲の勘当をいったんは解くに至ります。

名誉会長 なぜ勘当が許されたのか。それは何より、大聖人の仰せのままに、兄弟が異体同心の団結で、心一つに戦ったからでしょう。何よりも弟の

宗長が大聖人の仰せのままに兄と結束したことが大きな力となった。

特に大聖人は、弟・宗長の信心を案じられていた。

兄が勘当されれば、自分が惣領になれる。地位も財産も継ぐことができる。弟にとっては、大いな心が揺さぶられたことだろう。

人間同士を、分断の方向に、不信と憎悪の方向に向かわせていくのが、「魔」の働きの本質です。これに対して、人間同士を、結合の方向に、信頼と共感の方向に向かわせていくのが、「仏」です。

齊藤 大聖人は、「兄弟抄」で「難を乗り越える信心」の姿勢を徹底して教えられています。なかでもその核心が、この御文です。

「その上摩訶止観の第五の巻の一念三千は今一重立ち入たる法門ぞかし、此の法門を申すには必ず魔出来すべし魔競はずは正法と知るべからず、第五の巻に云く『行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る乃至随う可らず長る可らず之に随えば將に人をして悪道に向わしむ之を畏れば正法を修することを妨ぐ』等云云、此の釈は日蓮が身に当るのみならず門家の明鏡なり謹んで習い伝えて未来の資糧とせよ」(1087頁)

〈通解〉そのうえ摩訶止観第5の巻(注36)に説かれる一念三千は、今一重立ち入った法門である。この法門を説くならば、必ず魔が現れるのである。魔が競い起ころないならば、その法が正法であるとは分らない。止観の第5の巻には「仏法を持ち、修行と理解が進んできたときには、三障四魔(注37)が紛然として競い起ころ。だが三障四魔に従ってはならない。畏れてはならない。これに従うならば、まさに人を悪道に向かわせる。これを畏れるならば、正法を修行すること妨げる」と書かれている。止観のこの釈は、日蓮の身に当てはまるばかりでなく、門下一同の明鏡である。謹んで習い伝えて、未来の信心修行の糧とすべきである。

名誉会長 心すべき御文です。大聖人が仰せのように、未来永劫にわたって信心の根本としなければならぬ教えです。

仏法は、仏と魔との闘争です。三障四魔を現実に駆り出し、戦い、打ち破ってこそ、自分自身の生命も仏になることができるのです。

斎藤 「摩訶止観」の引用は、第7章「正修止観」の初めに出てきます。三障とは、煩惱障、業障、報障であり、四魔とは、煩惱魔、陰魔、死魔、他

化自在天子魔です。

天台大師にとつて、「行解」とは「止観」の修行であり、「三障四魔」は、その修行を邪魔する働きとして捉えられています。

名誉会長 大聖人は、天台の所説を踏まえられながら、大きく展開されています。大聖人にとつて「行解」の中心は、折伏です。「三障四魔」は、法華經の行者を迫害する人間の姿として具体的に現れてくる。

森中 「兄弟抄」では、「三障四魔」と合わせて、悪鬼が身に入つて迫害者となるという法華經勸持品第13の「悪鬼入其身」(法華經419頁)の原理を法難の説明として用いられています。

「第六天の魔王が智者の身に入つて善人をたばらかすなり、法華經第五の巻に『悪鬼其の身に入る』と説かれて候は是なり」(1082頁)

〈通解〉第六天の魔王がこれらの智者の身に入つて、善人をだますのである。法華經の第5の巻に「悪鬼が其の身に入る」と説かれているのはこのことである。

法華經を誹謗する諸宗の教えは、「悪鬼入其身」の僧によつて説かれたものであるということですね。

〔注36〕『摩訶止観』第5の巻「摩訶止観」は中国・隋代の天台大師智顛が講述したものを弟子の章安大師灌頂が記したもので、法華經の根本義である一心三觀・一念三千の法門を開き顯して、それを己心に証得する修行の方軌を示した書。第5巻は、正しく止観修行を明かす第7章が含まれている。

〔注37〕『三障四魔』仏道修行を妨げる三つの障害と四つの魔のこと。三障とは煩惱障・業障・報障をいい、四魔とは煩惱魔・陰魔・死魔・天子魔をいう。

またこうも仰せです。

「第六天の魔王或は妻子の身に入つて親や夫をたばらかし或は国王の身に入つて法華經の行者をぞとし或は父母の身に入つて孝養の子をせむる事あり」

(同ジ)

〈通解〉第六天の魔王があるいは妻子の身に入つて親や夫をたばらかし、あるいは国王の身に入つて法華經の行者を脅し、あるいは父母の身に入つて孝養の子を責めたりする。

悪鬼は、修行者 妻子、父母、主君、国王など、どのような人間の身にも入り込み、「三障四魔」として現れ出るのですね。

名誉会長 仏と魔の闘争といっても、天台大師においては、自分の心のなかに閉ざされている。しかし、大聖人は、この宇宙全体を、仏と魔の熾烈な戦場と見ておられるのです。

「此の世界は第六天の魔王の所領なり一切衆生は無始已来彼の魔王の眷属なり」(1081頁)と仰せの通り、この世界は魔王の所領となっている。

大聖人は、それに対して、一人敢然と戦いを起こされた。

「第六天の魔王・十軍のいくさを・をこして・法華經の行者と生死海の海中にして同居穢土を・とら

れじ・うばはんと・あらそう、日蓮其の身にあひあたりて大兵を・をこして二十余年なり、日蓮一度もしりぞく心なし」(1224頁)と仰せの通りです。斎藤 また、大聖人は、難を受ける原因を、転重軽受(注38)という別の面からも教えておられますが、すでに考察していただいているので、ここでは略します。

名誉会長 一言だけいえば、過去から現在へと延々と続く、不幸から不幸への連鎖を、今世で断ち切るのです。難こそ成仏への絶好のチャンスです。境涯を大きく開くための飛躍台なのです。だからこそ「賢者はよろこび愚者は退く」(1091頁)のです。

森中 そこで池上兄弟ですが、勘当という、大きな試験を乗り越えたのも束の間、建治3年の11月に、兄の宗仲は再び、父から勘当されます。

弟の宗長の動搖を鋭く見抜かれた大聖人は、「兄はこのたび法華經の行者となるが、弟は法華經の敵となるに違いない」と、宗長をあえて厳しく指導しておられます。

その一方で、「良觀らが、親をそそのかして悪道に墮とそうとしている」と、勘当の黒幕が良觀だったことを鋭く指摘しておられます。

〔注38〕「転重軽受」重きを転じて軽く受く」と読み下す。涅槃經卷31の語。正法を護持する功德によって、過去世の重罪を転じて、現世で軽くその報いを受けるとの意。

齊藤 この時与えられた「兵衛志殿御返事」〔注39〕でも、大聖人は、三障四魔に打ち勝っていきなさいと教えられています。

「しをのひると・みつと月の出づると・いと・夏と秋と冬と春とのさかひには必ず相違する事あり凡夫の仏になる又かくのごとし、必ず三障四魔と申す障いできたれば賢者はよろこび愚者は退くこれなり」(1091頁)

〔通解〕潮が干る時と満ちる時と、月の出る時と入る時と、また夏と秋と冬と春の変わり目には、必ず、それまでとは異なることがあります。凡夫が仏になる時もまた同じことです。必ず三障四魔という障害が出てくれば、賢者は喜び、愚者は退くのです。

宗長も覚悟を決めたのでしよう。大聖人の仰せ通り、父・康光に自身の決意を述べ、兄の勘当を解くよう、必死に諫めたものと考えられます。建治4年(1278年)の1月前後に勘当が許されたようです。

森中 そして、兄・宗仲の2度にわたる勘当という大難の後にやってきたものは、兄弟の宿願だった父の入信でした。

同年の弘安元年9月の御述作とされる「兵衛志

殿御返事(親父入信事)」では、兄弟が団結して父を入信させることができたが、その功績は「偏に貴辺の御身にあり」(1095頁)と宗長の戦いを称えておられます。

父・康光は翌年、死去しますが、兄弟の父親に対する真実の孝行をたたえられながら、正法に帰依して逝った父の成仏は間違いないと激励されています。

名譽会長 大聖人は「兄弟抄」で、二人が同心で戦っているのが、「未来までの・ものがたり」(1086頁)として、これ以上に素晴らしいものはないであろうと仰せです。まさに、その通りになった。森中 こうして、700年以上経っても語り継がれています。

名譽会長 「障魔と戦って信心を貫き、勝利していく」ことこそ仏法の真髄です。障魔の究極的な正体は元品の無明です。万人の生命に具わっている不幸の根源です。万人が元品の無明に打ち勝ち、元品の法性を現して成仏を遂げていくことこそ、仏が法を説く根本の目的です。池上兄弟の戦いは、その仏法の真髄を実践しぬいた最高の「物語」なのです。

齊藤 現代においては、学会員によって障魔に勝ち抜いていく無数の「物語」が編まれています。

〔注39〕北条業時が越後守となり、彼を除く極楽寺重時の一族が減っていることなどに言及されていることなどから、御執筆年を従来の建治元年を改め建治3年と確定する。

名誉会長 門下が、弘法の真髓と言うべき生命勝利の「物語」の主役として活躍してほしい。これが大聖人の御心です。

その「物語」を大聖人がまず万人の手本として戦われた。それが4度の大難です。そして、勝利の証明として御本尊を顕してください。元品の無明を打ち下して、元品の法性と一体になった大聖人の仏界の御生命を顕してくださいなのです。

そして、今度は、大聖人の門下が、一人ひとりの戦いとして生命勝利の「物語」を演じ抜き、大聖人の弘法を証明していく番です。その証明が未来の万人の勝利の鏡になるのです。

池上兄弟とはほぼ同じ時期に障魔と戦って見事な実証を示したのが四条金吾だね。

齊藤 はい。その物語はすでに語っていただきましたので（連載第18回）、ここでは略したいと思えます。

名誉会長 そうだね。ただ、四条金吾の最大の苦境のときに、大聖人が金吾に代わって自ら筆を執られ、金吾の主君に対して金吾の冤罪を徹底して訴えられた「頼基陳状」（建治3年6月25日、1153頁）を書いてくださったことに触れておきたい。

大聖人が我がことのように門下の勝利のために戦

ってくださいました一つの象徴です。

同じ月に、門下になって間もない因幡房日永のために、「下山御消息」（343頁）を代筆されています。

因幡房は、念仏を信じていた下山兵庫光基によって寺を追い出されようとしていた。「下山御消息」は、因幡房の立場に立って下山兵庫を諫める一種の諫暁の書です。下山兵庫は、この御手紙によって、入信することになります。

同じような例をもう一つ挙げると、大聖人は、弘安2年10月にも、熱原の法難の張本人である滝泉寺の院主代・行智の不法を訴えた「滝泉寺申状」（849頁）の草案を、門下の日弁・日秀の名で認められています。

師匠というのは、本当にありがたいものです。弟子の勝利のために全力を尽くしておられたのです。

人生は熾烈な戦場です。

そして、弘法は勝負です。

人生の戦場でいかに勝利していくか。その究極の方途を教えているのが、この弘法です。

戸田先生は、よく言われていた。

「信心は、人間の、また人類の行き詰まりとの戦いだ。魔と仏との闘争が信心だ。それが弘法は勝

負ということだ」と。

前進していれば、行き詰まる場合もある。そんな
つたら、さらなる勢いで祈り、行動することです。
必ず考えられないような大境涯が開けてくる。そ
して、また前進していくことができる。

この限りなき連続闘争が信心です。行き詰まりと
の不断の闘争に勝つか負けるか、それが勝負なので
す。

その戦いを万人が勝っていけるために、いわば勝
利の証として、そして究極の希望として、大聖人
は御本尊を顕してくださいと拝したい。

斉藤 「法華経の兵法」(1193頁)と言われた
ゆえんですね。大聖人と同じ心で戦わなければ、御
本尊の意義がわからないといえます。

名誉会長 仏とは、人間としての究極の勝利者の
ことです。仏の別号である「世雄」とは、人間の世
(世間)にあつて、最強の英雄ということす。

また「勝者」「最勝者」という別号もある。障魔
に勝った人という意味の尊称です。

大聖人は、現実の社会の真っ直中に生きる弟子た
ちに対して、あらゆる迫害を勝ち越えて、人間とし
ての最高の勝利者になるよう教えられたのです。

民衆が大聖人と同じ心で迫害に耐え、信心の勝利

を勝ち取っていけることを示した「弟子の闘争」の
究極が、熱原の法難です。これについては、後に
詳しく考察していこう。

仏法は「師弟の大道」のなかに

森中 末法の民衆が大聖人と同じ心で戦い、人生の
究極の勝利を勝ち取っていく——仏法は、どこま
でも「師弟の法」ですね。

名誉会長 妙法蓮華経自体が、「師弟の法」です。
「妙」は師匠、「法」は弟子です。また「蓮華」は因
果俱時です。因は九界で弟子、果は仏界で師。妙
法も蓮華も師弟不二です。師弟一体で妙法蓮華の花
が咲いていく。

法華経は、師(仏)と弟子(衆生)の「不二」を
一貫して説いた経典です。

そして、御本尊自体が、一人ひとりの胸中の仏
界を開いて、日蓮大聖人と等しい仏界の生命を涌现
するために御函顕してくださいましたものです。

元来、仏(ブツ)とは、生命の真実に目覚めた
人です。生命の真実とは、自分も人も、本来、妙法
の当体である、ということす。

一切の生きとし生けるものが、自他ともに宇宙大

の可能性を秘めた存在であり、自他とも幸福を満喫するために生き生きと輝いていくべき存在である、ということなのです。

この真実に目覚めることが、私たちの人生の目的であり、幸福への直道です。

また、妙法の信心とは、「我が身が仏である」という真の目覚めと、「皆を仏にする」という真の実践のなかに脈打っています。

まず、仏が民衆を目覚めさせる。そして、目覚めた一人が、自分を目覚めさせてくれた仏と同じように、他の人を目覚めさせていく、ということです。

齊藤 その意味で、最初に目覚めた人も、次々に目覚めた人たちも、最終的には同じ実践をしていくわけですね。

名誉会長 元品の無明と元品の法性の戦いです。師も弟子も同じ戦いをしていかなければ、仏法は広まりません。ゆえに師弟不二です。

齊藤 よく、弟子が師匠と同じだと思うのは、かえって不遜ではないか、という問いかけがあります。名誉会長 むしろ、師匠と弟子の間に断絶を設ける

ことは、弟子にとって自分中心の増上慢の心に陥る危険が多いのです。結果的に、如説修行にはならない。

森中 如説修行どころか、『自説修行』になることが多いですね。我執は慢心と一体です。

名誉会長 戸田先生は、「弟子の道」と題する講演で明確に語っています（昭和16年11月2日）。

「日興上人は、日蓮大聖人様をしのごうなどのお考えは、毫もあらせられぬ。

われわれも、ただ牧口先生の教えをすなおに守り、すなおに実践し、われわれの生活のなかに顕現しなければならぬ」（『戸田城聖全集』）

師匠の教えは、民衆救済です。その教えを素直に守り、素直に実践する弟子もまた、民衆救済に徹していかなければならない。

師匠が、不惜身命・死身弘法ならば、弟子もまた、不惜身命・死身弘法でなければならぬ。

不遜どころか、師匠の振る舞いと一致しなければ「弟子の道」は存在しない。

大前提は、仏の生命は「戦う心」のなかに顕現するということです。戦い続ける人は、常に「まだまだ」「いよいよ」と、ますます師匠と同じ戦いを繰り広げようとする。

齊藤 創価学会も同じです。池田先生が「一人の人を大切にす」実践と同じように、私たち弟子が周囲の人を大切にしていいたら、創価学会は今の10

倍、20倍発展すると思います。

名誉会長 戸田先生は、講演をこう結ばれている。

「弟子は弟子の道を守らねばならぬ。ことばも、実行も、先生の教えを、身に顕現しなければならぬ。」

私も、同じ覚悟で戦ってきました。

創価学会は、「日蓮大聖人が如く」そして「牧口先生が如く」「戸田先生が如く」の精神で進み、発展してきた。師弟不二を目指す実践があったからこそ、広宣流布が進んできたのです。

「弟子の道」という観点から言えば、一切の諸仏もまた、根源の「法」を師匠として仏となったのですから、「法」の前では「弟子」です。

釈尊も、絶えず自身の胸中の「法」に基づいて行動した。日蓮大聖人も外用の振る舞いとしては、久遠の釈尊の弟子である地涌の菩薩の実践を貫かれたといえます。

ありがたいことですが、大聖人御自身が、法華經の經文通りの如説修行の在り方を、身をもって門下に教えてくださった。

弟子の道とは、如説修行の道です。

師の教えのままに行動し抜くことです。

森中 その意味でも、日顕宗には完全に「師弟」が

欠落していますね。

大聖人の御内証が代々の法主のみに流れ伝わるなどという誤った血脈信仰をもち、反対に、大聖人と同じ広宣流布の実践などまったく行わない。



一人が大事である。人に会う際、池田名誉会長はどうするか。「その方々の状況を聞き、ご家族は元気か、お子さんはおられるか、どうすればカづけられるか——一人ひとりのことを心に浮かべて祈って臨む」と(本年6月、東京)

加えて日頭は、先師違背です。先師の事績をことごとく破壊した。先師否定こそ無相承の証です。

齊藤 「弟子の道」こそが、生死一大事血脈が流れ通う道だともいえるのではないでしょうか。

名譽会長 いずれにしても、「化儀の広宣流布」もまた、師弟不二の実践があつてこそ成就していくということは間違いない。

「化儀の広宣流布」を進める唯一の仏意仏勅の団体が創価学会です。

その「化儀の広宣流布」にあつて、「師弟の意義」を再度、確認しておきたい。

まず、言うまでもなく、私たちにとって日蓮大聖人は末法の御本仏であり、根源の師匠であられる。

森中 この根幹が理解できなかったのが五老僧ですね。末法の御本仏に迷つたがゆえに御本尊の本義にも迷つたといえます。

齊藤 また、仏宝と法宝を正しく示されたがゆえに、日興上人が僧宝となるわけですね。正しい日蓮

仏法の信仰は、六老僧のなかでは日興上人のみが継承しました。

名譽会長 その日興上人も、仏道修行していくうえで師弟が必要であることを強調されている。

「この法門は、師弟の道を正して仏になる。師弟

の道を誤つてしまえば、同じく法華経を持ちまいらせていても、無間地獄に墮ちてしまうのである」(注40)と仰せです。

森中 まさに、この原理に照らせば、日頭一派は無間地獄ということになります。

齊藤 日興上人自身、立場によつて尊貴があるというのでなく、行動のいかんによつて尊貴が決まるという考え方もつておられました。

「たとえ貫首(法主)であつても仏法に相違すれば用いてはいけない」(注41)と明確に示されています。

名譽会長 反対に、日興上人は、戦っている人を仏の如く敬え、と仰せです。

この原理に照らせば、広宣流布に戦っている学会員を仏の如く敬つてこそ、大聖人の弟子であり、真

の日興門流です。

日興上人ご自身が、「先師の如く」「先師の如く」と明確に言われています。

森中 「先師の如く予が化儀も聖僧為る可し」「巧於難問答の行者に於ては先師の如く賞翫す可き事」

(1619頁)等と仰せです。

名譽会長 師弟不二とは、究極的には、「法」を同じくすることであり、大聖人と「精神」「誓願」を

〔注40〕「このほうもんは、師弟をただして、ほとけになり候、しでしたにも、ちがい候へば、おなじほくえを、たもち、まいらせ、候へども、むけんちくにおち候なり」(佐渡國法華講衆御返事)
〔注41〕「時の貫首為りと雖も仏法に相違して己義を構へば之を用う可からざる事」(日興遺誠置文、1618頁)

同じくすることです。

そして、大聖人が根源の師匠であることは大前提として、「化儀の広宣流布」にもまた、妙法弘通の師弟が不可欠です。

創価学会は、日蓮大聖人の御遺命である広宣流布を実現するために地涌の菩薩が集った和合僧団です。

斉藤 その地涌の菩薩の指導者が、三代の会長です。

名誉会長 牧口先生は、法華経の行者としての信心を貫き、獄中までの実践のなかで日蓮仏法を色読された。仏の使いとして、現代に日蓮大聖人の仏法を蘇らせた。

まさに大聖人と師弟不二です。

戸田先生は、獄中で、久遠以来日蓮大聖人の弟子であることを覚知された。

お二人の実践は、日蓮大聖人の仏法の実践を寸分もたがわず現代に移されたものです。その意味で、日蓮仏法の体現者です。

「命限り有り惜む可からず遂に願う可きは仏国也」(955頁)とは、御本仏・日蓮大聖人の御遺命です。

「未だ広宣流布せざる間は身命を捨て随力弘通を

致す可き事」(1618頁)とは、日興上人の御遺誠です。

この「不惜身命」「死身弘法」の大誓願に立ち、忍難弘通によって、仏法史上に未曾有の壮大なる地涌の陣列を築かれたのが牧口先生であり、戸田先生です。

斉藤 そして、今、池田先生の死身弘法の実践によって、世界中に地涌の陣列が築されました。750年の間、否、3000年の仏教史に燦然と輝く不滅の世界広布の陣列です。

また、大聖人滅後、創価学会の三代にわたる広布の指導者ほど難を受けた存在はありません。これは厳然たる歴史の証明です。

この三代の広宣流布の指導者が、現代における仏法弘通の師匠となることはあまりにも自明のことではないでしょうか。

名誉会長 たとえ、周囲が見ていようと見ていまいと、また、だれがどう言おうと言うまいと、自分は「弟子の道」を貫く。

それが「師弟」です。

戸田先生ほど、牧口先生を師と仰いで「弟子の道」を貫いた方はいません。

「我が人生の誉れは、牧口先生の四度の難にお供

したことである」と戸田先生は語っていました。

西町小学校からの左遷。

三笠小学校からの排斥。

白金小学校からの左遷。

どんな時も、若き戸田先生は、牧口先生に従い、支え守り抜きました。

斉藤 この過程で、あの『創価教育学体系』が編まれ、創価教育学会が創立されたことは有名です。

そして、4度目は、軍部権力の弾圧ですね。戸田先生は、牢獄までもに行動されます。

名誉会長 この時に、臆病の弟子たちが豹変し、牧口先生の名を呼び捨てにして罵り去っていった。

それに対して戸田先生は、高齢の師匠の身を案じ、「罪は我が身一身に集まり、一日も早く師を出獄させ給え！」と祈り続けられた。

これが弟子の道です。

斉藤 池田先生もまた、戸田先生に徹して仕えられ、「弟子の道」を教えてくださいました。そして、戸田先生との約束はすべて実現され、今も師弟の大道を歩まれています。

名誉会長 私のことはともかく、弘法とは「師弟の大道」に生き抜くなかにある。

ともあれ、日蓮大聖人の身延期の闘争は、門下に

師弟の大道を教え、確立させていく一代の御化導の総仕上げの時期であったともいえるでしょう。

妙法弘通のゆえの大難は、弘法者にとって最高の誉れです。その大難を、ともに乗り越えていく真の弟子の出現を待たれていた。

そして真実の弟子が活躍した分だけ広宣流布は大きく前進する。その広宣流布の方程式を確立しようとされたと拝したい。

「我並びに我が弟子・諸難ありとも疑う心なくば自然に仏界にいたるべし」(234頁)です。

どんな大難にも莞爾として、師とともに戦いゆく真実の弟子を育てていく。

まさに、私の最後の仏事は教育です。

我が、この弟子を見よ
若き人材が陸続と出現し、きら星のごとく輝く姿を見る以上の師匠の喜びはありません。

大聖人の御化導で言えば、いよいよ民衆次元で真の仏弟子が躍り出ることを待望されていた。その仏弟子の出現が熱原の民衆です。

そして、人間主義の弘法の確立が、いよいよ熱原を舞台に繰り広げられていく。

次は、権力に屈しなかった民衆の勝利を語っていきましょう。
(つづく)



大きな看板

福井・池田町/地区部長
山内篤文



4年前、地区部長になりました。以来、聖教啓蒙の目標を「世帯の200%」と決め、以来、毎月、達成し続けてきました。今では、わが町の聖教部数は、全国大手数紙を抜いて第2位になりました。

これは、信心で実証を示してきた賜です。昭和41年に入会。50年、父と共にそば処「一福」を開店。そば好きが高じての開業でした。

麺、つゆに徹底してこだわり、行き着いたのは「塩味」のおろしそば。評判は、口コミで広がり、新聞・テレビ各社がほとんど取り上げる大人気。お客さんは関西、関東をはじめ町外から、はるばる来てくださいます。これを見て、町長は、「外貨(?)を稼げるのは「一福」さんだけ」と公言しています。

ここまで実証を広げることができたのは、「広布に励む時間を最も大事にしてきた」からです。店の終了時間は、初めから「5時半」と決めました。シャワーを浴びて、毎

晩、活動にすつ飛んでいきます。「学会活動せずに、わが家だけの幸せはない」。これが私の確信です。

9年前、父が眼底出血で入院。一家あげての真剣な唱題で、「失明の覚悟を」との医師の宣告を覆しての回復。その姿に地域の人もびつくり。

一昨年初、今度は母がガンに。「転移も認められる」との診断。

入院中、母から「電話帳持ってきて」との連絡。持っていくと、それを手に聖教啓蒙の電話をするではありませんか。その広布へのひたむきな母の姿に感動し、家族中で必死の唱題。その結果、あるはずの転移がなく、術後も順調に回復。「もう大丈夫」との太鼓判を押されました。

何があろうと、信心で乗り越えていけば必ず、「こんなに幸せになれる」。こう伝えたくて、大きな、大きな「幸福宣言」の看板を掲げました！

私

の経営するそば屋には、屋号の「一福」という、「町一番の大きな看板」が掲げてあります。これは、「信心して、こんなに幸せになった!」との町中への宣言です。

岐阜県との県境にある山深い町。冬は積雪が1メートル以上。過疎化も進み、現在は、町は1000世帯。人口の6割が65歳以上の高齢者——この池田町が、わが広布の舞台「池田地区」です。



比白が待っていた

岡山市／女子部本部長
西裕子



鼓 笛隊に入隊して今年で18年目になりま
す。池田先生につくっていただいた鼓
笛隊での経験を、後輩たちにも伝えたいとの
思いで、後輩の育成に全力を注いでいます。

私の体験は1995年に遡ります。それ
は、10月に岡山で開催されたマーチングフェ
スティバルの2カ月前の出来事でした。

鼓笛隊の友人の付き添いで眼科を訪れ、
「ついでに診てもらったら？」との友人の言
葉に、しぶしぶ検査を受けました。その時、
偶然にも「網膜剝離」であることが分かった
のです。網膜があと0・4ミリ剝がれば失明
するという状態でした。

即刻、入院。退院まで最低1カ月はかかる
と言われました。

病室に戻り、ベットを囲むカーテンを急い
で閉めました。泣き顔を誰にも見られたくな
かったのです。鼓笛隊のフラッグ（旗）演技
などの激しい運動は厳禁。『うなずく』ほど
の小さな振動も要注意という状態でした。

「大好きな鼓笛隊を続けたい。フラッグが
見えなくなったら、どうしよう……」

手術の2日前。鼓笛隊の友が色紙を携えて
病室に。「頑張れ」「祈っています」「待つて
いるよ」。色紙に書かれた一人ひとりのメッ
セージはすぐに涙でかすんでしまいました。

それからは、決して弱音をはくことはありません
でした。皆が祈り、待っていてくれる
ことが、私に勇気を与えてくれました。実
際、一人でも欠ければ、カラ

ーガード（旗の演技）の隊形
は崩れてしまいます。私は毎
日、数時間、心のなかで題目
を唱え続けました。すると、
池田先生がかつて言われてい
た、苦難には必ず意味があ
る。戦っているからこそ難
が起る。との言葉を思い出
しました。

今こそ学会の正義を証明し

再び全国大会へ――後輩の指導に励む西さん（写真左）



たいと、病院の方々に学会や池田先生につい
て、また、鼓笛隊で全国大会を目指している
ことなどを語りました。最初は、「数カ月か
かる」と言われていた状況でしたが、手術
の際に医師から、「西さんは、我慢強い。分
かった、西さんが運動できるように、先生も
頑張るよ」と言っていたきました。

手術は成功し、12日で病院を後にしまし
た。1週間の自宅療養を終え、鼓笛隊のメン
バーと再会。「待つとったよ！」と歓声。

フェスティバル当日、フラッグを手に、会
場を駆けめぐりました。フラッグがこんな
に鮮やかに見えるなんて。私たちはこの
年、全国大会の舞台に立つことができました。





素直

岩手・一戸町／副本部長
千葉 東



キキョウ

は猛反対。それが2年ほど続きました。そのうち、わが家の状況を見ていた妻が、幸せになりたいたいで58年に入会しました。でも、御本尊はまだ御安置できません。

翌年、娘から粘り強く説得され、しぶしぶ御本尊を受け取るだけでも受けようかと腹を決めた時のことです。突然、親族から電話が入り、長年悩んでいた土地の権利問題が解決に向かったのです。「初信の功德」と言われましたが、なかなか信じられませんでした。

学会の会合に参加してみると、明るい雰囲気驚きました。幹部の指導を聞いていくうちに、信心の大事さに気づき、朝は勤行から出発する生活に変わっていききました。功德は厳然と現れました。当時はシイタケ栽培を手がけていましたが、何と通常の3倍の収穫をあげることができたのです。

この信心は、すごい——。確信を得た私は1日1万遍の唱題を続けました。やがて、土地を担保に融資を受け、養鶏の規模を

拡大していくことになりました。

養鶏は鶏舎の温度管理が難しく、一つ間違うと鶏が死んでしまいます。もちろん幾つもの失敗はありましたが、それもすべて乗り越え、今では、ほとんど事故もなく完璧な出荷を維持しています。

現在、約10万平方尺の敷地で10万羽の養鶏を行い、町一番の規模になりました。平成3年には会場用の30畳の部屋を備えた自宅も新築できました。3人の子どもも皆、信心に励んでおり、孫も9人になりました。昨年は家族で7世帯の弘教もできました。

入信以来、ともかく学会の指導通り、何でも素直に実践してきたことが、わが家を変えた要因だったと思います。今では信心していない友人が「千葉さんは学会に入ってよかったね」と言ってくれます。本当に学会に巡りあったことがわが家の宿命を変えたのです。これからも感謝の心を忘れず、前進してまいります。

わ

家が養鶏業を営んでいる場所は、戦後、入植した開拓地です。16歳の時から、木を切り倒して農地を開いてきました。しかし、家のなかでもめ事が絶えず、どんなに頑張ってもなかなか生活はよくなりません。

転機は、養鶏を初めて10余年経った昭和56年でした。看護師になって上京した二女が学会に入会したのです。

しかし、私も同居していた両親も、信心に

毎日が勝負

佐賀・川副町／男子部副部長
梅崎忠一



スイカ

わが家の入会は、昭和35年。祖父父母の時代だから、私は学会3世になる。家業の漁業も私で3代目。海とともに育った私は、「漁に連れていって欲しくないなら学校に行かない」と親を困らせたほどの海好き人間だ。中学卒業後、ほとんどの友人が高校に進学したが、私はためらうことなく海を選んだ。家計が大変だったこともあるが、何より海が好きだった。

わが家は、40年前から海苔の養殖を始めたが、仕事に精を出す両親の姿に、私もこの仕事が好きになった。海苔の仕事は4月、幅1・5尺、長さ18尺の600枚の網洗ひから始まる。9月初旬に網を張るための1980本の竹立て。10月中旬にまず300枚を張り、12月初旬に次の300枚と張り替える。収穫は11月から翌年3月まで毎日。正月の休みもない。厳寒の夜明け前に収穫し、機械にかけて製品化する。最も多いときは1日10万枚。不眠不休の作業が続く。

10月から3月までは毎日が勝負。海苔の胞子を網に付ける種付け、収穫時の気象条件、それらすべてが海苔の出来不出来を左右する。一瞬も気を緩めることはできず、胸中で題目を唱えながらの仕事だが、幸い順調な収穫を重ねている。

わが家の転機になったのは平成3年7月20日。夏季は魚を捕るために船を出すのが、この日は翌日が日曜日で市場がないため、他に出漁した船はなかった。夜11時、スクリーンに網が絡んだ。異状に気が付いた時には船底が破損し大量に浸水。あつという間に船尾が沈み、4・5トンの船は船先を2尺ほど海面に出し直立して浮いた。両親と私の3人は、船先にしがみついて、ひたすら題目を唱えた。船は辛うじて浮いていたが、昼間の太陽に照らされることになれば脱水症状に。また有明海は潮流が速い。流れに巻き込まれたら海の男でも助からない。絶体絶命だった。朝6時半。来るはずのない船が来た。助かつ



出漁前の「父子船」忠宝丸の甲板上。左は父・国夫さん

た。船先での唱題は7時間半に及んでいた。「信心していたから」。近所の人さえそう言った。「普通なら死んでいる」。御本尊に命を助けられた。報恩の行動しかないと思った。海の仕事で活動のリズムに乗れないのが悩みだが、地域に友人の多い父は、いざという時には誰も真似できない活躍をする。私は先月、副部長の任命を受けた。黙々と地道に、対話を武器に、地域広布へ報恩の戦いを誓っている。広布の戦いも毎日が勝負だ。

高橋殿御返事

御書全集 1467頁
編年体御書 1427頁

単衣抄

御書全集 1514頁
編年体御書 799頁

高橋殿御返事

本抄は、いつ、だれに宛てられた御書であるか明らかではありませんが、内容から、富士方面の中心的な信徒であった高橋六郎兵衛入道に宛てられたものと推定されています（この点については異説もあります）。別名を「米穀御書」といいます。

高橋入道は、夫人が日興上人の叔母である縁から、日興上人の折伏によって入信しました。日興上人を外護して活躍し、その屋敷は門下の拠点になっていました。

本抄では、米を供養する場合でも誘

法の者に供養してはならないと戒められ、法華經の行者へ供養する米は慈悲のなかの大慈悲の米となると述べられています。また「其の国の仏法は貴辺にまかせたてまつり候ぞ」と、地域の仏法流布を門下に託されています。

単衣抄

建治元年（1275年）8月、身延で認められたお手紙です。だれに宛てられたものか不明ですが、鎌倉に住んでいた女性信徒に与えられた御抄と考えられます。

初めに単衣1領の御供養を受けたこ

とを述べられた後、立宗官言から建治元年のこの年まで、20余年にわたって日蓮大聖人が命にも及ぶ多くの迫害、大難を受けてこられたことを述べられています。

次いで「如来の現在にすら猶怨嫉多し」などの経文を引いて、それらの経文を身で読んだのは日蓮大聖人お一人であり、大聖人が出現しなければ仏の金言も虚妄となったのであると仰せです。その大聖人への御供養は、今世だけでなく、臨終の際に自身が守られる功德になつていくことを教えられています。



ブルーベリー
画・谷井俊英

高橋殿御返事

御書全集 1467頁5行目
編年体御書 1427頁5行目

其の国の仏法は貴辺にまかせたてまつり

その国の仏法流布はあなたにお任せする。仏種は縁によって起こる。それ故に仏は一乗の法を説くのである。

候ぞ、仏種は縁に従つて起る是の故に一

乗を説くなるべし

各人が地域広布の主役

本抄を頂いたときされている高橋六郎兵衛入道は、富士方面の信徒の中心的存在で、日興上人を守って活躍した人です。

「其の国の仏法は貴辺にまかせたてまつり候ぞ」と仰せのように、大聖人は各地の門下を深く信頼され、各自の主体性と自覚のもとで広布を推進していくよう指導されています。

それぞれの地域の広宣流布は、そこに住む人の責任で進めていく以外にありません。他のところにいる人が広布を進めてくれるものではないのです。

「依正不二」の法理に照らして、私たちの生命が変われば、環境・国土も変わっていきます。「私たちの信心で、我が地域を変えていくんだ」との強い信念と粘り強い行動があれば、どのような地域であれ、変わっていかないわけがありません。

どのような人にも成仏の因である仏性があります。その仏性は、仏縁に触れることによって刺激され、仏界の境涯として花開き、実を結んでいきます。

それ故、仏性は仏種とも呼ばれます。大聖人は、人々の仏種を起こすために一乗の法、すなわち妙法を語っていくのであると言われています。

私たちが仏法を語っていくことは、相手の人の仏性を開いていく下種の実践にほかなりません。たとえ、その時はすぐに仏法の実践に入ることができなくても、触発された仏性は、やがて必ず顕れることとなります。それ故、相手の対応がどうであろうと、真心込めて仏法を語っていくことが大切なのです。

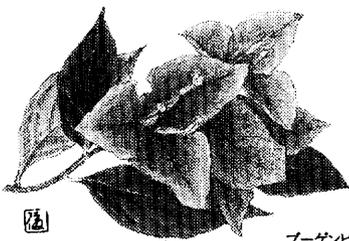
何事も、人に会い、言葉を交わしていくことから始まります。自分一人で納得していても、言葉に出さなければ何も変わりません。まさに言葉こそ力なのです。

池田名誉会長は次のように述べています。「人間だけが社会、世界にかぎりなく『対話』を広げられる。『対話』は、金銭や立場によることなく、大きな価値を生む力がある」「たとえ短い一言でも、人々の心を開き、一変させていくことができる」。

真心と誠実の対話で、時代を動かす実践を開始していきましょう。

仏種は縁に従って……

法華経方便品（法華経138頁）の言葉。すべての人々の仏性（仏種）は縁によって顕れるから、仏は成仏の法である一乗の教えを説くということ。仏種とは、すべての人に具わる仏界の生命。一乗とは、人々を仏の境涯に運ぶただ一つの乗り物という意味で、法華経（文底の意では南無妙法蓮華経）のこと。



仏

プーゲンピレア

「その国の仏法は、あなたにお任せします」ということだが、相手を信頼していなければ、とても言えない言葉だね。

そうだ。日蓮大聖人は、各地で活躍している在家の信徒を深く信頼され、あなた方一人ひとりこそが仏法流布の主体者であると激励されている。

例えば、佐渡の中心的な信徒である阿仏房には「阿仏房しかしながら北国の導師とも申しつべし」(1304頁)と言われている。

「あなたこそ、その国の仏法の指導者です」と激励し、自覚を促されているんだ。

阿仏房も高橋六郎入道も、ともに在家だね。地域に根を張っている在家の人の力を大聖人は高く評価されているんだね。

仏性を触発する 対話の実践

青年と大教学運動

座談会の御講義をめぐっての青年部員とその友人との語り合いをまとめてみました。

は、そこに住んでいる人の手で進める以外にない」との御指導が、この言葉には含まれていると思う。

「自分たちがやるしかない」と、ハラを決めることが大事、ということか。それは、何事につけても言えることだ。

今、日本でも世界でも、広布の使命に立ち上がっている人がたくさんいる。その真剣な一念の力が広布を進めているんだ。大聖人の時代も今も、その原理は同じだよ。

一人ひとりが「主役」ということだね。

そのうえで大聖人は、仏種は縁によって起こるものであるから妙法を語るのである、と言われている。

人間に限らず、生命は外からの触

大聖人のお振る舞いに明らかかなように、大聖人の仏法においては本来、僧俗の差別など全くない。僧侶が上で在家が下”などと、愚かな差別を主張している日蓮宗が、どれほど大聖人の御心に背いているか、誰の目にも明らかだ。

いずれにしても、その地域の広布

発によって変化していくものだ。悪縁に接すれば悪の方向に向かっていきがちだし、逆に善縁に触れば善い方向に向かっていく。だから「何に縁するか」が大事なんだ。

僕らの「対話」も一つの縁、ということか。

そうだ。誰でも、何かを人に言われて初めて、そのことが分かるということが多い。自分一人で見つけて、新しい道を見つけていくことは難しい。自分の世界に閉じこもっていたのでは何も変わらない。

でも今は、人と関わることを避けるような風潮があるね。

だから、自分一人で悩んで、行き詰まってしまうことが多いのではないかな。悩んでいる時に、誰か一人でも声を掛けてくれる人がいれば、随分違ってくると思う。

誰でも内心は、自分のことを理解し、受け止めてほしいという心をもつ

ているはずだ。心を開ける友人がいるということが人生の財産だと思う。

だから声を掛けることが大事なんだ。言葉を交わせれば心が通う。人も自分も生命が動く。勇気をもって踏み出していこうよ。



イラスト／安ヶ平正哉

研修会

ひとえしやう
単衣抄

御書全集 1514^号 2行目～10行目
編年体御書 799^号 2行目～10行目

棄老国 經典に説かれる、
 老人を捨てての国のこと。
 天神七代 日本神話で、地
 神五代の前に日本を治めた
 とされる7代の天の神のこ
 と。
 地神五代 日本神話で、神
 武天皇の建国以前に天神七
 代に次いで日本を治めた
 とされる5代の地の神のこ
 と。
 人王百代 人王は人間の王

棄老国には老者を捨て、日本国には今法
 華經の行者をすつ、抑此の国開闢より天
 神七代・地神五代・人王百代あり、神武
 より已後九十代欽明より仏法始まりて六十
 代・七百余年に及べり、其の中に父母を殺
 す者・朝敵となる者・山賊・海賊・数を
 知らざれども・いまだきかず法華經の故に
 日蓮程・人に悪まれたる者はなし、或は王
 に悪まれたれども民には悪まれず、或は僧
 は悪めば俗はもれ、男は悪めば女はもれ、
 或は愚人は悪めば智人はもれたり、此れは
 王よりは民・男女よりは僧尼・愚人よりは

棄老国では老人を捨て、日本
 国では今、法華經の行者を捨て
 た。

そもそもこの国は天地が始ま
 ってから、天の神7代、地の神
 5代に続いて人の王の世が百代
 続くとされている。神武天皇か
 ら以後90代、欽明天皇（の時
 代）から仏法が始まって60代、
 700余年におよんでいる。

その間に父母を殺した者、
 朝廷の敵となった者、山賊、
 海賊、数知れないが、未だに、
 法華經のために日蓮ほど憎まれ
 た者がいたとは聞いたことがな
 い。あるいは国王には憎まれた
 けれども民衆には憎まれない。
 あるいは僧侶が憎めば在俗（の
 者）は憎まない。男が憎めば女
 は憎まない。あるいは愚人が憎
 めば智人は憎まなかったもので
 ある。

（しかし）日蓮は、国王より
 も民衆が、在家の男女よりも憎

のこと。神武天皇以後の多くの天皇のこと。「百代」とは、百代まで守護するとの八幡大菩薩の約束を踏まえたもの。

神武 神武天皇のこと。第1代の天皇で天皇家の始祖とされる。

欽明 欽明天皇のこと。この天皇の時代に韓・朝鮮半島から仏教が伝わったとされる。

頼朝 源頼朝のこと。鎌倉幕府の初代将軍。平氏を滅ぼし、全国統制を成し遂げ、1192年、征夷大将軍となつて鎌倉幕府を開いた。

頼義 源頼義のこと。平安時代中期(11世紀)の武将。東北で反乱を起こした一族と12年の長きにわたつて戦い、苦戦の末に鎮定した。

智人悪む・悪人よりは善人悪む、前代未聞の身なり後代にも有るべしともおぼえず、

故に生年三十二より今年五十四に至るまで

二十余年の間・或は寺を追い出され・或

は処をおわれ・或は親類を煩はされ・或は

夜打ちにあひ・或は合戦にあひ・或は悪口

数をしらず・或は打たれ或は手を負う・或

は弟子を殺され或は頸を切られんとし・或

は流罪両度に及べり、二十余年が間・一

時片時も心安き事なし、頼朝の七年の合

戦もひまやありけん、頼義が十二年の闘

争も争か是にはすぐべき

尼が、悪人よりも善人が憎んで
いる。悪人よりも善人が憎んで
いる。前代未聞の身である。後
代にもあるとは思えない。

それゆえ、32歳の年から今年
54歳になるまでの20余年の間、
あるいは寺を追い出され、ある
いは住んでいるところを追わ
れ、あるいは親類を苦しめら
れ、あるいは夜討ちに遭い、あ
るいは合戦に遭い、あるいは悪
口は数知れない。あるいは打た
れ、あるいは傷をおう。あるい
は弟子を殺され、あるいは頸を
切られようとし、あるいは流罪
が2度におよんだ。この20余年
の間は一時、片時も、心安らか
なことはなかった。源頼朝の
(平氏との)7年の合戦にも暇
はあったであろう。源頼義の
12年間に及ぶ闘争も、どうして
この日蓮の戦いに過ぎることが
あるつか。



ブラックベリー

棄老国には老者をすて・日本国には今法華経の行者をすつ……前代未聞の身なり後代にも有るべしとおぼえす

ここで日蓮大聖人は、日本の社会の全体から迫害を加えられた

ことを述べています。その迫害は地頭や幕府要人などの権力者だけではなく、一般民衆からも加えられたのです。

それは大聖人が諸宗の謗法を厳しく破折されたからです。一

切の不幸の根源は、邪宗・邪義に人々が誑かされていることにある。日蓮大聖人は、そのことを指摘し、大難を覚悟されて諸宗を破折されました。

その結果、人々から大聖人に加えられた迫害の激しきは前代未聞のものであったと仰せられています。

実際に日本の歴史上、仏法の故に、日蓮大聖人ほど大きな難に遭った人はありません。

日寛上人が「外に大難を忍ぶは、内に慈悲の勝れたる故なり」と述べているように、末法万年の衆生を救おうとする大慈悲の故に、大聖人は多くの大難を耐え忍ばれたのです。

故に生年三十二より今年五十四に至るまで二十余年の間……頼義が十二年の闘争も争か是にはすぐべき

立

「立宗宣言」から本抄が書かれた建治元年まで、大聖人が受けられた難について具体的に述べられています。

すなわち、立宗宣言の直後には地頭・東条景信の圧迫によって清澄寺から退出を余儀なくされ、また「松葉ヶ谷の法難」では夜間の襲撃（夜打ち）に遭われました。さらに「小松原の法難」では御自身も傷を受けられただけでなく、門下二人が命を落としています。

さらに「竜の口の法難」では頸の座に臨まれ、伊豆と佐渡への二回にわたる流罪にも遭われました。

まさに日蓮大聖人の戦いは、「二十余年の間・一時片時も心安き事なし」と仰せのように、少しの心休まる時もない壮絶な連続闘争でした。大聖人のその戦いの厳しさに比べれば、源頼

朝や源頼義の戦いも及ぶものではないと述べられています。

仏法の実践は、本来、安全で静寂な所に身を置いて、心の安定を目指すなどというものではありません。釈尊も日蓮大聖人も、その生涯は、民衆のなかに入って悪口罵詈雑言を浴びせられ、多くの迫害と戦いながら、法を説き続けた大闘争の生涯だったので。

池田名誉会長は次のように述べています。

「いかなる難があろうとも、大聖人ほどの大難を受けるわけではない。比べるのもつたないほどの小さい難である。しかも、仏道修行の途上における苦難は、すべて自身の宿命転換につながり、いつき自分が自分のためである」

苦難は、すべて宿命転換に通じていることを確信して、前進していきましよう。

G(グループ)座談会

ひとえしょう 単衣抄

御書全集 1514号 13行目～15行目
編年体御書 799号 13行目～15行目

多宝 多宝如来のこと。多宝の塔の中にあつて、法華經の虚空会に出現し、法華經が真実であることを証明した仏。

十方の諸仏 十方に住する諸仏のこと。総じて無量の諸仏をさすこともある。
一切世間多怨難信 「一切世間に怨多くして信じ難し」と読む。法華經安樂行品第14の文。仏が正法を説く時は、仏法を知らない世間のあらゆる人々が、仏を怨み迫害して信じようとしないこと。

日蓮・日本国に出現せずば如来の金言も

虚くなり・多宝の証明も・なにかせん・十

方の諸仏の御語も妄語となりなん、仏滅後

二千二百二十余年・月氏・漢土・日本に一

切世間多怨難信の人なし、日蓮なくば仏語

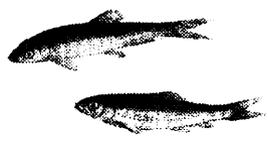
既に絶えなん

日蓮が日本国に出現しなかつたならば、仏の金言も虚言となり、多宝如来の証明も何の役にも立たなかつたであろう。十方の諸仏の御言葉もいつわりの言葉となつたであろう。仏滅後二千二百二十余年の間、インド、中国、日本に「一切世間には怨嫉が多くて信じ難い」の経文を身で読んだ人はいない。日蓮が出現しなかつたならば、仏の言葉もすでに絶えてしまつたであろう。



ハイガイ

法 華経では、例えば「如来が現におられる時ですら迫害が多



ハイ

います。しかし、釈尊滅後に法華経を宣揚した天台大師や伝教大師でさえも、大難を予言した法華経の文を身で読むことはありませんでした。日蓮大聖人だけが2度の流罪や竜の口の頸の座など、命に及ぶ多くの大難を受けられ、法華経の言葉が真実であることを証明されたのです。まさに大聖人が出現されなければ、釈尊の金言も、それを証明した多宝如来や十方諸仏の言葉も、虚妄とな

るところでした。大聖人のお振る舞いを通し、事実をもって証明することの大切さを学ぶことができます。単なる言葉だけでは人を納得させることはできません。その言葉通り、事実のうえに証拠を示すことによって、初めて人々を動かすことができるのです。大聖人が「道理証文よりも現証にはすぎず」(1468頁)と、現証をもっとも重視された理由もそこにあります。客観

的な事実こそ、誰もが認めざるを得ない最大の証拠だからです。池田名誉会長は次のように述べています。「信心の誉れとは、それぞれの立場で、正法の実証を示し、周囲に揺るぎない共感の輪を広げきっていくことにほかならない。(中略)。さすが信仰者は、本当にすばらしい。と、人々にいわれることである」。

各人が信心根本に勝利し、実証を示していきましよう。

同

じ物を供養しても、供養する相手によって正反対の結果をもたらすことを教えられています。

例えば、同じ米でも、謗法の者に食べられた場合は、その謗法という悪の働きを助けることになりす。ゆえに、謗法の者

への供養は、正法の破壊につながり、悪となってしまうのです。ただし、将来、正法に帰依させるために命を永らえさせることもあるとの考え方も示されています。

これに対して、法華経の行者に供養された米は、一切衆生を利益し、その成仏を助け

る力となるので、「慈悲のなかの大慈悲」になると仰せです。日蓮宗をはじめ、謗法の者に供養すれば、そのことが悪となり、不幸の因となってしまう。

供養の対象の正邪を判別する賢明さと、悪を破折していく勇氣が必要なのです。

各種勤行会

たか はしどの こへんじ
高橋殿御返事

御書全集 1467頁 1行目～3行目
編年体御書 1427頁 1行目～3行目

同じ米穀なれども謗法の者をやしなうは

仏種をたつ命をついで弥弥強盛の敵人とな

る、又命をたすけて終に法華経を引き入る

べき故か、又法華の行者をやしなうは慈悲

の中の大慈悲の米穀なるべし、一切衆生を

利益するなればなり

仏種 仏になるための種子。生命に具わっている成仏の因である仏性を、草木の種子に譬えたもの。

同じ米であっても謗法の者を

養うのは、成仏の種子を断つ

働きをする謗法の者の命を永ら

えさせて、さらに強盛な敵人と

することになる。あるいは、

最終的には法華経に引き入れ

るために、命を永らえさせるこ

ともあるであろう。また法華経

の行者を養うのは、慈悲のなか

の大慈悲の米である。一切衆

生を利益することになるから

である。

ประเทศไทย เชียงใหม่

タイ[チェンマイ]



首都バンコクに次ぐタイ王国の第2の都市。13世紀にマンラーイ王朝のメンラーイ王によって建国され、波乱に富んだ歴史をたどる。元来の美しい自然に、700年の歴史が育てた文化を加え、訪れる人々を魅了する土地となっている。

着実に理解の輪を広げております。

こうして、私たち北タイ総合本部は昨年の1年間に、世帯数に等しい弘教を達成して、世帯数を2倍に拡大することができました。

この未曾有の拡大に花を添えたのが、今年3月、北タイ総合本部の活動の拠点となる待望のランパーン会館のオープンでした。会館のオープニング式典には、ランパーン県の知事をはじめ、地元の友人など約1500人が集いました。

現在、この会館を守る牙城会がスタート。男子部は牙城会の任務を通して、さらに一人ひとりが成長を期しています。

唱題を根本に団結して戦っていくとき、すべての活動が、成長の因になっていることを深く感じます。

この美しきチェンマイを、人材の花々で飾っていくことが私たちの使命です。

この街この人



未来部(19歳)

ルジロート・ジットパナー

唱題が勇気のもと!

両親から信心の大切さを教わって、未来部員として学会活動にも楽しく参加してきました。また、いろいろなチャンスに恵まれました。

その一つが北タイのテレビ局で、環境保護を促進する番組の出演者に選ばれたことです。会合等で自分の意見を話したり、お友達の話の聞いたりした経験を生かすことができました。

また今年の1月には、チェンマイ県の「子どもの日」行事の司会に選ばれ、テレビで全国放映されました。

お題目を唱えて挑戦すると、大きな勇気と力が湧くことを実感しています。

ワールドスクエア

World Square

99

SGI Activities and Experiences
from Around the World

うるわ

麗しき団結で 友好の輪を拡大



男子部部长
スリヤン・タナシー

700年以上の歴史を持つ街チェンマイは「タイ北方のバラ」と呼ばれています。この美しい古都を擁する北タイ総合本部では、新世紀の幕開けとともに、「創価家族、が一体となって友好拡大の戦いに奔走しています。

1994年にタイを訪問された際、池田先生は次のように語られました。

「私どもは「家族、である。常に励まし合い、支え合い、思いやうっていく麗しい「成長家族、である」

私たちは最初に、本部中に唱題の波をおこしていきました。同じ目的に向かって祈ることによって「家族、は崩れざる団結を築きました。

そして、戦いにさらに拍車を掛けているのは、教学の研鑽です。毎月の座談会拝読御書をタイ語に翻訳し、学びあいました。御書には「何のために折伏するのか」「ど

う友好拡大するのか」という戦いのヒントが
ちりばめられています。

また、青年部は、社会への友好拡大・
貢献活動を通して、大きく成長しました。
その一つが、2001年11月にチェンマイで開
催した「世界の少年少女絵画展」で
す。

会場の設営、オープニング式典の役員、
そして毎日の鑑賞者に対する説明の役員
等に、青年部が率先して取り組みまし
た。

子どもたちの作品を通して、鑑賞者に希
望を与えたい、そしてSGIの文化活動、池
田先生の偉大さを知っていただきたい、と
の心意気で陰の努力に徹しました。その結
果、合計8万人を超える方々に展示を見
ていただくことができました。

北部のピサヌローク市でも、道路の清掃
や植樹など、社会貢献の活動を通して、

Q

これまでの科学・技術の「発
明・発見」の歴史を振り返ってみ
ると、一人の人間が独創的な成果
をあげていることもあれば、ほぼ
同じ時期に、同じような研究が行
われているというケースもよく見
られますね。

A

そうですね。科学・技術におけ
る「同時性」という現象ですね。

過去も、現在も、そうしたケー
スは少なくないようです。特に、
技術発明の場合は、そのほんのわ
ずかな差が、大きくその後の勝
敗を分けてしまうこともあります。

アメリカで電話を発明したベル
が、その特許を申請したのは18
76年2月14日のことです。同じ
ころ、エライシャ・グレイもベル
とほとんど同じ研究をしており、
ベルと同じ日に特許を申請しまし
たが、ベルよりも約2時間遅れ
で、電話の特許はベルに認められ
ることになりました。

その後、グレイを後押しする会

社（ウエスタン・ユニオン社）と
ベル電話会社との間に激しい訴訟
問題が起こりました。3年後、
両者の間で和解が成立。ウエス
タン・ユニオン社は電話事業から
完全撤退する一方、ベルの会社は
アメリカを代表する電話会社とな
り、ベルの電話研究所は現在も世
界最大の研究所として多くのノー
ベル賞受賞者を輩出しています。

Q

たった2時間の差で、「先駆者」
と「追随者」に分かれてしまうの
ですか。創造性の世界の厳しさを
感じさせるエピソードです。

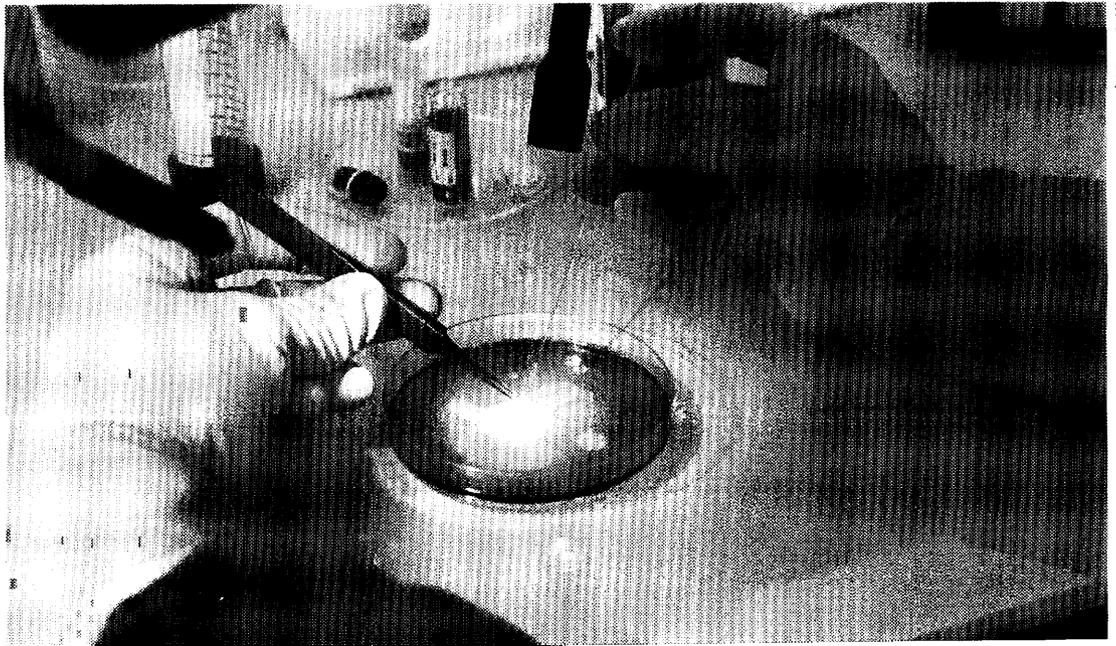
科学・技術の研究・開発で、な
ぜ、このような「同時性」が起き
るのでしょうか。

A

それは、現在の科学的な手法が
そうさせているのです。現在の科
学の進歩は、過去の研究の積み重
ねを基に次の目標がほとんど決ま
っている、いわばレールの上を走

TALK 2003

科学が描く自然・宇宙・生命マップ



(写真)IPS

る競争に近いものがあるのです。

Q ですから、同じ目標に、ほぼ同時に到達することは、科学の性質上珍しくはないのです。

A すると、今の科学の手法では、歴史的な発見、発明は少なくなってしまうのではないのですか。

A これについて、次のエピソードを紹介したいと思います。

多くの電磁気学の諸法則を発見したイギリスの物理学者ファラデーの研究室を訪ねた当時の首相は開発中の発電機を見て、「いったいこれが何の役に立つのか」と質問しました。ファラデーは「生まれたばかりの赤ん坊は何もできないですよ。しかし、そのうちにある方はこれに税金をかけるようになるでしょう」と答えたそうです。

Q 今の私たちの生活に欠かせない発電機も、ファラデーが基礎研究をしている段階では正当な評価は

得られていなかったのですね。

A 確かに、産業革命以降、近代科学は飛躍的に発展を遂げ、私たちの身近な生活を支える多くの科学上の諸法則は、すでに発見、発明し尽くされているという感覚になるかもしれません。

しかし、火力発電にしろ、車をはじめとする動力にしろ、現代の文明社会は「石油」を中心とした有限の資源を使うことで成り立っています。それによる生態系への影響もはかりられません。

Q 21世紀に入り、地球と共生するという視点、そのうえでの「歴史的な発明」というのも、これからますます求められてくるのではないのでしょうか。

A なるほど。偉大な発明、発見は、思想や哲学の枠組みの根本的な転換が大切ということですか。

もともと、科学と哲学は切っ

SCIENCE

サイエンス
トーク
2003

「発明・発見」のドラマ ——創造性とは何か②

科学・技術の発明、発見は
ほぼ同じ時になされることが多い。
それは現在の科学・技術の手法のなかに秘密がある。
また、かつてあったような歴史的な発明、発見は
もう生まれることは本当はないのか。
知のドラマは続く。

高崎智也 | 工学博士

も切れない関係にあります。ところが、日本では、明治維新以降、西洋の科学技術のレベルに急いで追いつこうとして、科学と哲学が全く別個のものとして導入されてきたという背景があります。

これに対して、欧米では哲学への関心が高く、独自の科学を生み出すうえで、哲学的思考が重要な意味を持つと認識されてきました。フランスのデカルト（解析幾何学を生み出した数学者、近世哲学の父）、パスカル（物理学者として流体の圧力についての「パスカルの原理」を発見する一方で、宗教哲学者として不朽の名を残す）、ドイツのライプニッツ（微積分学の創設者、ドイツ啓蒙哲学の開拓者）などはいずれも、科学と哲学の両分野で偉大な業績を残したことで知られています。

17、18世紀の時代では、一人の人間が哲学者であり、同時に科学者である場合がむしろ一般的だった

たようですね。

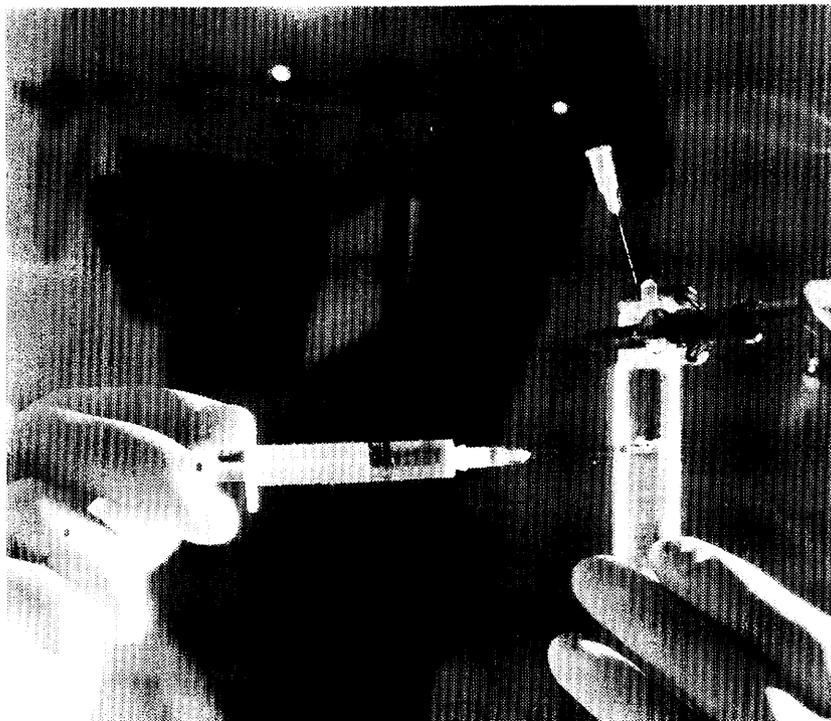
また、現代の量子力学も、その構築の過程では、科学者同士、あるいは科学者と哲学者との間で哲学的な議論が活発に行われていたようです。

ただし、西洋科学文明を支えてきたこれらの哲学的思考も、さまざまな局面で行き詰まりを示しており、新たな思考体系が求められているのが現実です。

Q 現在は、知的所有権が尊重されていく時代になって、巨大企業や大企業が、発明、発見による利益を独占し過ぎるといふ弊害も指摘されていますが。

A こういうエピソードがあります。まだ「ノーベル賞」の制度もなかった時代、フランスのナポレオンが、電池の発明の話聞き、イタリアのボルタをパリに招いたそうです。ボルタはナポレオンの前で、水の電気分解の実験をしま

TALK 2003



した。科学好きのナポレオンは大いに喜び、ポルタに金メダルと勲章を与えました。

また、電気分解の研究の成果に対して、イギリスの化学者デイビーにフランスから賞金が与えられることになりました。当時フランスとイギリスは戦争中。デイビーに対して、敵国のナポレオンからの賞を受け取るべきでないと忠告する人もいました。しかし、デイビーは「政府が戦争をしていても、科学者はそうはしないだろう。科学者は国家間の激しい敵意を和らげることにその力を尽くすべきである」と言って、この忠告を退けました。そして、戦時にもかかわらずデイビーはフランスへ渡り、フランスの科学者たちは彼を快く迎えたのです。

Q まさに「科学に国境はない」時代だったのですか。

A また、特許による収入を潔し

としなかった科学者もいます。

アメリカの物理学者ジョセフ・ヘンリーは電信機の実質の発明者でしたが、その特許は取っていません。「科学の発明とその恩恵は全人類の財産であるべきである。一人の個人の利益のために、それらを使ってはいけない」と考えていました。

また、X線の発見で有名なドイツの物理学者レントゲンは貴族の称号も断り、X線に対するどんな特許も取ろうとしませんでした。「科学にとっても、医学にとっても、また産業界にとっても、全く貴重だったこの発見から、彼は何らの金銭的な利益を得ていない」と発明王エジソンは、感心して述べたと言われています。

このほかにも、先に紹介したデイビー等、自身の発明を特許にしなかった人たちがいます。発明がより広く社会に役立つようになることを何より望んでいたのです。(おわり)

科学は人類共有の財産 国や企業の枠を乗り越えて



たかさき ともや

1995年、創価大学工学部情報システム学科卒業後、奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科に進学。LSI(大規模集積回路)のテスト設計に関する研究に取り組む。

2000年、同大学で博士(工学)の学位を取得。以後、大手家電メーカーでIC(集積回路)チップの開発に従事。

希望の明日へ 21世紀を創る未来部のページ

子どもは一個の立派な人格者である。偉大な未来からの使者である。大人は、子どもの人格を大きく信頼し、尊敬していかねばならない。真剣で誠実な心をもって接していくべきだ。

——各部代表協議会での池田名譽会長のスピーチ（本年7月）

君よつづけ！ ——「青春対話」「希望対話」に学ぶ

第24回「諸葛孔明のような指導者」に！

コラム 未来を照らす太陽 —— 21世紀使命会 網岡順子さん

コラム 私の未来部時代 池田伸作

■後継者育成セミナー —— 仏教ものがたり心のたからばこ

子どもは変わる 自分が変われば ベンカが見つけた石

■なぜなの？それはね…… ■我が家のドラマ

悪には厳しく！ 人間関係の悩みを乗り越え

アメリカ・ニューヨーク文化会館を訪問した池田SGI会長を未来部員が歓迎（1996年6月）



君よつづけ！

「青春対話」

「希望対話」に学ぶ

第24回 「諸葛孔明のような指導者」に！

『三国志』に登場する諸葛孔明とは、どのような人物だったのだろうか。それは、戦って、戦って、断固、戦い抜いた人だった。

6月度の本部幹部会で池田名誉会長は青年に訴えた。

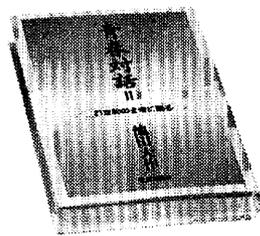
「リーダーはしっかりと勉強し、呼吸を合わせて団結し、諸葛孔明のような指導者となってもらいたい」

みなさんもご存じのとおり、諸葛孔明は中国の史書『三国志』に登場する英雄の一人である。では、諸葛孔明とは、どのような人だったのだろうか。

諸葛孔明は
どんな人？

ここで諸葛孔明の生きた時代を簡単に紹介してみよう。

時は2世紀末。広大な中国はかつてない動乱期に入っていた。英雄たちが中国統一を目指して争っていた。その一人、劉備は、関羽、張飛などの豪傑を配下に抱えていたが、負け戦が続いていた。軍師（作戦をめぐらす人）がいなかったからだった。劉備は人材を求めた。彼は諸葛孔明の噂を聞き、会いに出かけるが不在で、3度目にしてようやく会うことができた。劉備は47歳、孔明は27歳だった。



「青春対話」は各国語に翻訳され、年齢を超えて読まれている

3度の訪問（三顧の礼）に感激した孔明は、劉備のもとで戦うことを決意する。弱小集団であった劉備の軍に初めて一本のスジが通ったのである。間もなく、大きな勢力をもった魏という国（後に、日本史で有名な卑弥呼が魏から金印をもらっている）239年）の大軍が南下し、魏に敵対する勢力であった呉という国をも征服する勢いを示した。だが、呉と劉備の連合軍がこれを大破し（赤壁の戦い）、中国は魏、呉、蜀（劉備の国）の3国が、相争う時代へと進んだ。

真剣に尽力し 死ぬまで戦いを やめない

こうした孔明の生涯を表すとすれば、次の言葉であろう。

「鞠躬して尽力し、死して後、已む」
(身をかがめて敬い、真剣に尽力し、死ぬまで戦いをやめない)

孔明が自ら語ったとされる言葉である。「鞠躬」とは、頭を下げ、礼をもつて接するという意味である。

偉くなればなるほど、身をかがめて、相手を敬い、そして、力の限り尽くしていく。これが真実の指導者の姿ではないだろうか。反対に、すぐに威張って、傲慢になり、人を見下すようでは、指導者として失格である。

**闘争意欲を失えば
たちまち守りに転じる**

中国京劇団の日本公演、「三国志演義」の一場面。「赤壁の戦い」での諸葛孔明



孔明の本領は、主君である劉備を失った後に発揮される。

国内の経済的な安定を図る一方で、孔明は、戦い続けた。

この時代は「三国鼎立(三つの国の勢力が互に向き合って対立すること)」と呼ばれるが、実際の国力は2強1弱である。

強国であった魏と呉に対して、弱

小な蜀が生き残る道はただ一つ。それは戦い続けることだった。

隣国である強国・魏と戦い、さらには遠く南方の地域(東南アジアと思われる)にも遠征を重ねた。蜀の国力を考えると無謀ともいえる政策である。

この点に関して名誉会長は、このように述べている。

「これこそ彼の苦心の智略であった

少年少女部

元気な笑顔で皆に会いたい

「お姉ちゃんと一緒にいると元気になるね」。一軒また一軒、日々、家庭訪問に歩く網岡順子さん（広島世界県少女部長）。会合では、皆が「お姉ちゃん、の笑顔を待っていた。しかし、その笑顔が見られない時期があった。

平成9年の夏、網岡さんは重度のアトピー性皮膚炎に悩まされた。顔は腫れ上がり、硬くなった皮膚は動かすと痛みが走った。「こんな姿では、外には出られない」と思った。

必死の題目。しかし、一向に回復する気配はない。未来部員に会えないことが辛かった。

ある日、聖教新聞で読んだ体験談が網岡さんの祈りを変えた。病を克服した体験だった。

「ただ自分の病気がよくなることしか考えていませんでしたが、体験談を読んで、人の役に立ちたい、そのために治したいと祈るようになりました」

元気な姿で未来部のメンバーに会おう——祈りが前向きになると、症状は日に日に快方へ。

迎えた未来部の会合。会場への階段を上る途中で、踊り場の鏡に映った自分の顔を見た。まだ、顔の赤みは引いていなかった。「子どもたちは、どんな反応をするだろう。一瞬、立ち止まったが、すぐに階段を上りきった。

「お姉ちゃん、久しぶりだね!」。少女部員たち

が走りよってきた。「アトピーじゃったけん、来られなかったんよ」。すると、小さな手が網岡さんの顔に優しく触れた。「痛い?」。その瞬間、不安は吹き飛んだ。「待たせてごめんね。絶対に治すからね」と、心で叫んだ。「大丈夫。次も来るし、みんなの家にも行くけん!」。

その言葉通り、その日を境に、網岡さんの笑顔が部員会に戻った。

「自分の経験すべてを、皆のために生かしたい。未来部の皆のために、役立つことがあれば何でもしたいと思っています」

悩んだ分、会合に参加できない部員の気持ちなど、未来部員の心に敏感になったという。網岡さんの笑顔が皆の希望となっている。



「楽しかったよ!」と未来部員の笑顔。どうすれば皆に喜んでもらえるか——会合の前には担当者の唱題会や、打ち合わせの時間を設けている

「戦い続ける」人生は「負けない」人生

と私は見る。(中略) 強大な魏と呉を前に、激しい闘争意欲を失えば、蜀はたちまち守勢(攻撃を防ぎ守る態勢)に転じる——内政の充実に腐心(心をいため悩ますこと)しながら、孔明は外に戦う以外になかったのである」
(『新・私の人物観』)

8月には孔明が亡くなった月である(234年8月23日、54歳)。強國・魏との戦闘の陣中、「五丈原」という名の土地で、志半ばにして没した。

孔明を失った蜀は、30年後(263年)に魏に滅ぼされていく。

孔明亡き後、つかの間の安定に安んじて、重臣(責任ある立場についている家来)たちは保守化していったといわれている。つまり後継者たちが、戦いに疲れ、戦うことをやめたのだ。ゆえに蜀は滅んだ。

名誉会長は記している。「草創期を

希望の明日へ

21世紀を創る未来部のページ

戦つて、戦つて、戦い抜いて 断固と勝つてきた

支えた闘争の魂を、いかに後世に伝えゆくか。万般に通じる興亡の一方程式がここにあろう」(同)。

また、蜀の滅亡に因んで、名誉会長はこう語っている。「人生は勝負です。『戦い続ける』しかない。『戦い続ける』人生は、『負けない』人生です。『負けない』ことが勝利です」。

自ら勉強して 偉大になった

では、どうすれば諸葛孔明のような人になることができるのか。かつて名誉会長は四川大学の方々と語り合っている。

四川の地は、孔明たちが打ち建てたかつての「蜀」の国である。名誉会長は質問した。

「孔明が、あれほど素晴らしい智慧と才能を発揮できたのは、なぜでしょうか？」

答えはこうだった。
「孔明も、自ら勉強して偉大になったのです。——明快である。」

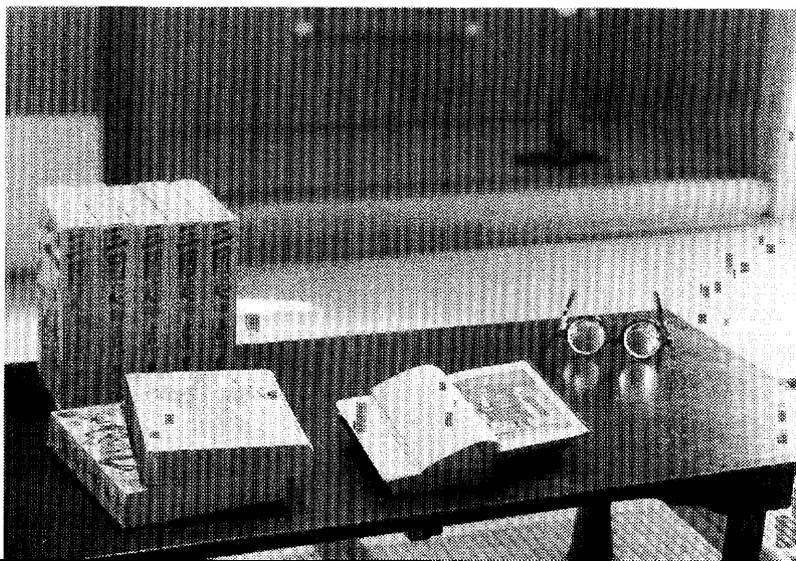
諸葛孔明自身が青年に、このような言葉を残している。

「学ばなければ、才知を広げることができない。志がなければ、学問を成し遂げることはできない」

もう一度！ もう一度！

ちょうど50年前(1953年)の1月、青年部の会合で戸田第2代会長から若き名誉会長に部隊旗(男子部の組

池田大作名誉会長に戸田城聖第2代会長から贈られた「三国志」と「九十三年」



織の旗)が手渡された。

戸田会長は、名誉会長に言った。「この旗を、最後の戦いまで、高く振りかざしながら、奮闘せよ！ 頼むぞ、大作！」

名誉会長はこの折、「星落秋風五丈原」(土井晩翠作詞)を歌った。孔明が志半ばで逝ったあの五丈原を詠んだ歌である。



題目をあげると勇気が湧いてくる!

私は、学会員の両親の間に生まれた学会2世です。しかし、ずっと、信心の確信をつかめないまま過ごしていました。

中学2年生の時、自分の周りから、どんどん友人が離れていき、友人から無視されていることに気づきました。ショックでした。私がいじめのターゲット(標的)になっていたのです。

とても寂しく、苦しい日々が続きました。心配をかけたくないとの思いから、家族にも打ち明けられず、ずっと一人で悩み続けていました。

ある時は、学校で数十人から暴力を振るわれ、泣きながら家に帰って来る日もありました。誰にも相談できなかった私は、どんどん気持ちが落ち込んでいき、「学校に行くのイヤだな」「転校してしまおうか」などと考え、拳げ句の果てに「死んでしまおうか」という気持ちにもなりました。

そんな時、ふと頭をよぎったのが、小さいころからずっと両親から言われていた「この信心をして、御本尊に祈れば、願いは何でも叶う」という確信の言葉でした。私はこの言葉を信じるしかありませんでした。

この時、初めて自分から御本尊の前に座り、題目をあげ始めました。題目をあげていくうちに、「絶対に負けたくない」という勇気が湧いてきまし

た。「負けたくない」ということは学校に行き続けることだと決意し、毎日学校に通いました。

しかし、状況はなかなか変わらず、泣きながら家に帰って来ては、題目をあげて勇気を出して、また学校に行くという挑戦を続けました。

そんな時、自分を守ってくれる2人の親友に出会いました。「伸作、ここにいればいいよ。僕たちはいじめたりしないから」と。私は涙が出るほど嬉しく、今でもこの時のことは忘れることができません。

最終的には、いじめグループ全員が私に謝ってきました。その時、私は「どんなことがあっても、いじめられている人を守れる自分になる」と固く決意しました。そして、題目のすごさを感じ、信心の確信をつかむことができました。

その後、創価高校・創価大学に進学。徹底して一人、生徒・学生に励ましを送り続ける池田先生の慈愛の振る舞いを間近で見る機会に恵まれました。感動に震え、「自分も人に勇気と希望を送ることのできる存在になろう」と誓いました。

一人でも多くの高等部員に、御本尊の偉大さ、信心の確信、そして池田先生の正義を語りながら、次の学会と広宣流布を担い立つ後継の人材にとともに成長していく決意です。

「祈山悲秋の風更けて／陣雲暗し五文原……丞相病あつかりき……」
歌い終わると、「もう一度!」、そしてまた「もう一度歌ってくれ!」——戸田会長は何度も求めた。その頬に涙がたつた。

名誉会長は当時をこう語っている。
「(戸田)先生は、軍部権力の弾圧で、獄中におられた時から、『旗持つ若人』を魂の底から探しておられたに違いない。——あれから、私は、いかなる悪戦苦闘にも、一歩も退くことなく、戦って、戦って、戦い抜いて、断固と勝ってきた」

世界が、全人類が、妙法という大哲学をもった諸君を待っていることを忘れないでいただきたい。世界の諸君、二十一世紀を万幸よくしく!

——『青春対話Ⅱ』

今は学ぼう、鍛えよう。そして人生を戦い続ける人に。「諸葛孔明のような指導者」に。君よつづけ!



子どもは変わる 自分が変われば

「学会活動をしているから子どもは分かってくれるはず」。この甘えを排し、子どもの側に立った対話を。

「知る」「感じる」「感じる」

幼児教育に携わったお陰で、教育の在り方を学ぶことができました。

ある会合でのことです。子どもが会場に飾られていた花に何度も触ろうとしました。そのつど、母親から「ダメー」という声飛びました。私はその子のそばに寄り、「一緒に触ってみましょう」と、その小さな手に私の手を添えて、ゆっくりと触りました。

触ったあと、その子は満足そうでした。それから、その子は花に触ろうとしませんでした。「花には優しく接する」ということを覚えたのでした。

教育は「知る」という知識の吸収も重要ですが、それ以上に「感じる」という行為が大切なのです。それは、「子どもの側に立つ」行動です。子どもの側に立ったとき初めて子どもの心が分かります。

札幌創価幼稚園でのことです。皆、公園で遊んでいました。そのなかに一人ぼつんと、タンポポを摘んでいる子がいました。心配になり、声をかけました。

「たんぽぽを摘んで、どうするの」。すると、「ちようちよさんにあげるの」というではありませんか。思ってもみない答えに驚きました。モンシロ蝶が



おがわちひろ
小川千博

札幌創価幼稚園園長

1935年生まれ。北海道教育大学卒。元公立小学校校長。北海道教育部主事。教育部・旭川教育相談室長を10年務めた。札幌市在住。

飛んできたので、その蝶にあげるのだというのです。私は、その豊かな感受性に感動しました。

私たちは「大人の見方」で判断し、注意してしまいがちですが、そうであってはいけません。「子どもの見方」が大切なのです。それでこそ子どもの可能性を引き出せるのです。

私は教育相談のなかで、多くの親御さんに接してきました。その経験から言えることは、「子どもを変えようと思ったら失敗する」ということです。子どもを変えようとして変わった子は一人もいません。親自身が変わらないと子どもは変わらないのです。



イラスト/西田ヒロコ

過日、ある母親の相談を受けました。大学受験で不合格となった息子さんから「落ちたのはお母さんのせいだ」と責められ、悶々としていました。小さい時はいい子だったそうです。

私は率直に話しました。学会活動などで多忙な母親は、子どもが自分で答えを出す前に、「それは、こうよ、こうするのよ」と、つい指示をしてしまいがちです。すると、自主性が育ちにくくなります。その結果、子どもは母親に好かれようとして、「いい子」になろうと頑張ってしまうのです。

「お母さんが変わることです。お母さんへの悪口に、真剣に辛抱強く耳を傾けてください。お子さんは、今まで言えなかった、たまりにたまった不満をぶつけているんです」とアドバイスさせていただきました。

聞いてあげるとは、相手を受け止めることです。容認すれば子どもに安心感がわくものです。それを繰り返していくなかで、子どもは変わっていきます。

ます。しばらくして、その母親から、「子どもが心を開いてくれるようになった」との報告を頂きました。

子どもは一個の立派な人格者

池田名誉会長は教育の在り方について何度も指導されています。それは教える側の「大人が変わること」が大事だということです。

先日、先生は、童話画家・ワイルドスミス氏の「子どもの魂は、そこに何でも書き込める白紙の本のようなもの」との話を引かれ、「子どもは一個の立派な人格者である」「大人は、子どもの人格を信頼し、尊敬していかねばならない」と指導されました。

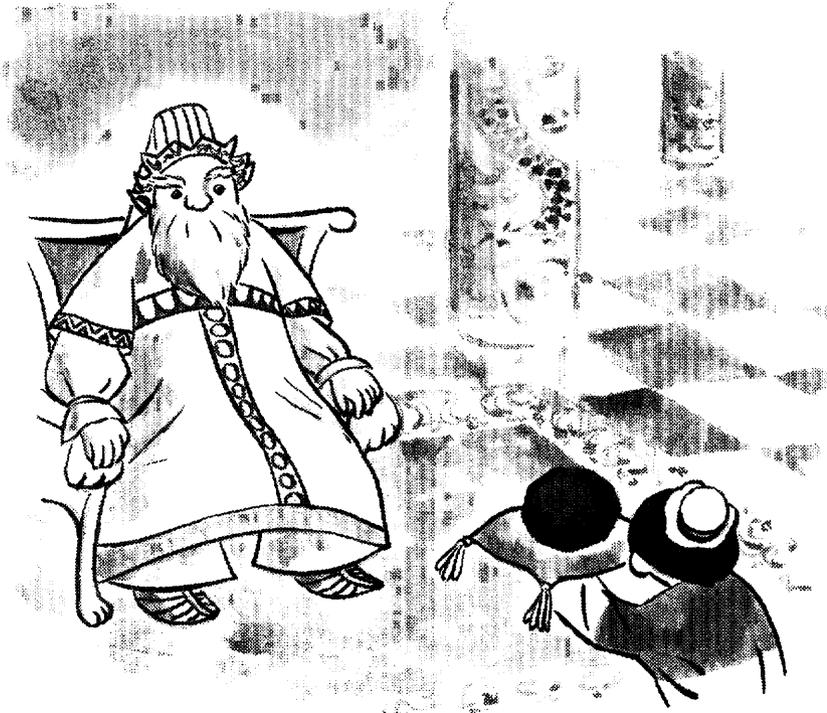
信心に無理解なお子さんの場合も、その子に責任があるわけではありません。「活動に頑張っているから、理解するのが当たり前」と思っている親の側に責任があります。

私たち親自身が「変わろう！」と決め、子どもが変わるまで辛抱強い対話を心がけていきましょう。

文 森本和子
絵 三河啓子

ベンカが 見つけた石





むかし、むかし、中国に楚という国がありました。その国にベンカという人がいました。

ある日のこと、ベンカが楚山という山の中をあるいていると、何か

きらりとひかるのを感じました。ベンカがその場所に行ってみると、黒い石がありました。その石を手にとってよく見ました。おひさまにもかざしてみました。

「これを磨いたら、すばらしい宝石になるぞ。王様にさしあげよう」

ベンカはその石を大切にかけえて、うたを口ずさみながらお城にむかいました。

ベンカは王様にうやうやしく石をささげました。

「王様、これは、磨けばすばらしい宝石になる石です」

王様は、ベンカがもってきた石をよく見ました。

「ふうむ、わたしはただの石しか見えんがのう」

そこで王様は宝石磨きの職人をお呼びしました。

職人は、よく調べもしないで、



「これはただの石でございませう」といいました。

「おのれ、ベンカめ。わしをだましおったな」

王様はベンカが自分をだましたと



怒り、ベンカを罰するように命じました。

「これはすばらしい宝石になる石なのに、どうして信じてもらえないんだらう」

ベンカは、くやしくて涙を流しま

した。石を大切にふところにだき、トボトボと家に帰っていきました。

やがて王様が亡くなり、新しい王様の世になりました。

「王様にこの石をさしあげよう。こんどこそきつとわかってくれるにちがいない」

ベンカは喜びいさんでお城にむかい、王様に石をさしました。

「王様、これは楚山で見つけた、すばらしい宝石になる石でございませす」

王様は職人に調べさせましたが、またもや答えは、「ただの石でございませす」でした。

「わたしをあざむいたな。この大うそつきめ」

王様は怒り、ベンカはこんども罰せられてしまいました。

その王様が亡くなり、文王があたらしい王様になりました。



ベンカは石をふところにだいて、楚山のふもとで大声で泣きました。

あまりの大声なので、道ゆく人々が足を止めてしまうほどです。ベンカは泣き続けました。しまいには涙もかれはて、かわりに目から血



を流して泣いていました。

楚山のふもとで泣いているベンカ
のことは、うわきになり、お城にい
る王様のもとまでとどきました。

文王はベンカのうわきを聞いて、
ベンカのもとに使いをだしてわけを
たずねました。

「この世には、罰せられた人はお
おい。それなのに、おまえだけほど
うして、そんなにまで嘆き悲しみ泣
くのか」
ベンカはいいました。

「わたしは罰せられたことを悲し
んでいるではありません。これは
すばらしい宝石なのに、ただの石だ
といわれ、正直者のわたしがうそつ
きだといわれたことが悲しいので
す」

そこで文王は、宝石みがきの職
人にあらためて石をみがかせまし

た。すると、どうでしょう。ぴかぴ
か光りかがやき、みごとな宝石とな
ったのです。

「おお、こんなすばらしい宝石は
いままで見たこともない」

文王は大喜びしました。これを
「ベンカの玉」と名づけ、王様は宝
物としていつまでも大切にしまし
た。

おわり

下和が璞

このお話は、中国に古くから伝えられ、御
書のなかでも引用されているお話です。

最初の王たちは石のうわべしか見ずに、た
だの石と決めつけました。しかし、下和が「こ
れは宝石になる石だ」と言い続け、最後には
皆からみとめられました。

池田先生は、牧口先生や戸田先生の正義を
語り抜かれています。正しいことを「正しい」
と言い切るのは勇気がいります。しかし、声
を出して語り続けていけば、最後には必ず皆
の心を変えていくことができるのです。



東京男子部教学部長

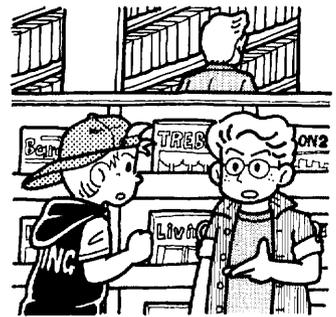
まつむらのぶお
松村信雄

なぜなの？ それはね…



悪を強く責める理由を

教えてください。



イラスト・TAKA

悪（あく）人を責める戦いは、あえて相手の矢を放つのです。相手に届かなければ何を言っても意味がない。当然、痛烈になることもある。強い言葉にもなるでしょう。それが、極悪の本質をえぐり出すのです。

釈尊も、悪人に対しては容赦がなかった。教団を大混乱させた裏切り者（提婆達多）を「お前は人の唾を食らう愚か者だ！」と大衆の面前で痛烈に罵倒したのは有名です。大事なのは、「悪の根を断ち切る」という精神なのです。もう一面を言えば、悪を断ち切る

言葉は「慈悲」に通じるのです。

例えば——小さな子が、お店のお菓子をこっそり自分のポケットに入れてようとしたりとしましょう。それを見つけた大人は厳しく叱るでしょう。「だめだよ！ そんなことしちゃ！」と。そして、なぜいけないのか、ちゃんと説明する。子どもは同じことはしないものです。次元は違いますが、日蓮大聖人は「たとえ、強く荒々しい言葉であっても、人を救えば真実の言葉であり、やわらかい言葉である。たとえ、やわらかい言葉であっても、人を害すれば偽りの言葉であり、荒々

しい言葉である」（890頁、趣意）と仰せです。結果として「人を救う言葉」かどうか——。悪を強く破折してこそ、善の言葉となり、人々を救っていただけるのです。

学会は、極悪を強く責めているからこそ、多くの人が守られ、今日の大発展があるのです。大聖人は仰せです。「いよいよ、はりあげてせむべし」（1090頁）。悪を断固、叩き破る精神があつてこそ、幸福は築かれるのです。この正義の精神を受け継ぐ人こそ、みなさんです。未来部のメンバーなのです。

我が家の ドラマ



女子部 部長
佐藤 綾



総福島婦人部長
佐藤トキエ

昭和23年生まれ。33年入会。
福島市在住。

人間関係の悩みを乗り越え

わが家は2男1女の5人家族。子どもだと思っていた子どもたちも、今では社会人となっています。

わが家は、父母の代から学会家族で、そういう家庭環境に育った子どもたちは、平穩に成長しました。そうした子らに信仰体験をつかませるかが大きな課題でした。

娘が高校生のころでした。通学用の自転車が盗難にあい、しばらくの間、私が自転車を送り迎えをした時がありました。車中の会話で、クラブ活動の人間関係に悩み、毎日が

母のノートを見て決意

母は活動で家を空けることが多く、幼い時から「今日も母はいないんだ」と寂しく思うこともありましたが、母の思いの重さを感じたことがありました。

ある時、勤行をしていて、経机の中

辛い、と娘が言うのです。そこまで深刻なのかと驚きました。

活動が多忙で、娘と一対一で話し合うこともあまりなかった私は、これは大切な機会だと思い、語り合いました。

友人が許せない気持ちも分かる。でも、それでは解決できない。御本尊に祈り、その人のことを思いやれる自分に成長することだ」と。

娘と一緒に唱題しました。また娘も、これまでなかったほど題目を唱え、人間関係も改善していきまし

にある大学ノートに気づきました。開いてみると、母のご祈念項目がいっぱい記されていました。そのなかに、私たち子ども一人ひとりに対しての祈りが、何度も何度も出てきました。広布後継の人材に育ちますよ

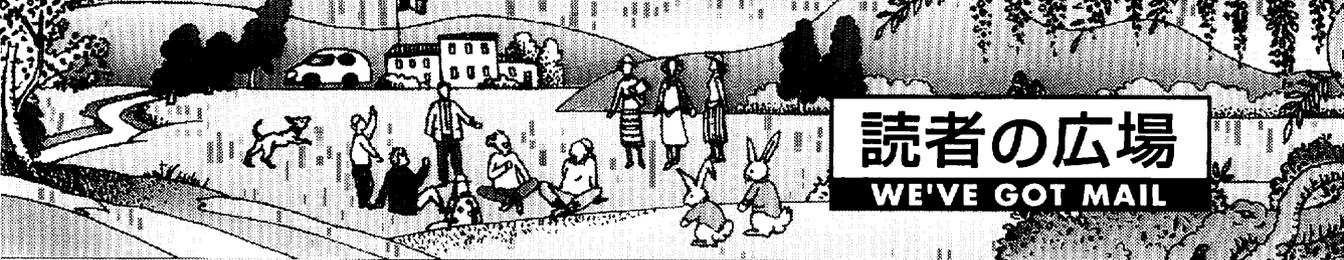
た。自分を無視していた友人も、快く声をかけてくるようになったというのです。本人も、信仰の力に驚いていました。今は女子部の部長ですが、あの時の経験が本当に生きていると言っています。

また、長男は、私が活動に出かけている間も、弟や妹の面倒をよくみてくれていました。そして、長男が5歳の時に、家族の祈りで病気を乗り越えることができたことを自分の信仰体験として自覚しています。今後も、親子ともども、さらなる信仰で自身を磨き、成長していきたいと決意しています。

うに「福運ある女性に……」。

これほど祈ってくれている母の気持ちに涙しました。必ず、広布のお役に立てる人材に成長していこうと、この時初めて決意しました。

(さとう あや)



読者の広場

WE'VE GOT MAIL

老練さらす日頭と山崎正友

北林芳典氏著の『暁闇』（平安出版）を読んだ。読後、しみじみと思ったのは、日頭と山崎正友のバカさ加減だ。

この二人、当初は、日頭が「あなたは太ウソつきだ」と山崎をコキ下ろし、山崎も「あの野郎が尻下なものか」と日頭を罵倒していた。

ところが、日頭は「C作戦」で学会を切り崩すために、山崎に擦り寄った。「あの時はウソつきと言って悪かった。かんべんして下さい」と平謝り。「一方、恐喝事件で懲役3年の実刑が確定した直後だった山崎も、これ幸いと、日頭への態度を豹変させ、10年以上も徹底的に否定していた日頭の「血脈相承」とやらをあっさり認めただのである。

本書には、その経緯が関係者の貴重な証言をもとに、克明に記されている。なかでも興味深いのが、平成7年の正月、日頭の側に食いつくにあたっての山

崎の発言である。

山崎は「俺は、阿部（日頭）から『嘘つきだ』って言われたことを忘れたわけじゃないよ。誰が忘れるもんか！」「あん畜生、必ず仕返ししてやるよ」とぶちまけていたというのだ。こんな男に、日頭がいいように操られていた事実を、日頭宗の信徒は知っているのだろうか。

「利害で結託した人間は、利害のために別れる」という。山崎が最近、自ら10数件の裁判を起こして騒ぎ回っているのはまさに断末魔の姿だ。前にも後ろにも進めなくなった二セ法主・日頭と同じく、愚劣な老練である。（東京都・池内礼市）

反人権の捏造雑誌を許すな！

去る7月、『週刊新潮』を出している新潮社の社長らが、警視庁から書類送検された。

熊本県の医療法人を中傷したデマ記事事件で、警視庁牛込署が、新潮社の佐藤隆信社長と記事を掲載した『フォーカス』の山本伊吾編集長（当時）ら8人

●●今月の1枚●●

ロバート・キャパ 戦争と子供たち——そして9・11

東京富士美術館で8月1日から10月19日まで開催

戦争写真家として知られるロバート・キャパは、40年の生涯で5つの戦争取材しました。しかし、キャパは「戦争」は撮っていません。戦争に苦しむ人々——女性や子どもたちに焦点をあてて戦場を駆け回っていたのです。本展覧会は「戦争と子供たち」

をテーマに、キャパとキャパの志を継承する著名な写真家による作品150点を展覧するものです。また、特別出品として、キャパの実弟であるコーネル・キャパ氏から池田SGI会長に贈られたロバート・キャパの名作「数々の母」のオリジナル作品が公開されます。



「数々の母」イタリヤ 1943年10月

うなデマ記事を掲載した。いっものながら、証拠や証人や裏付けが何一つないのに、勝手に「人殺し」呼ばわりする悪辣記事であった。

昨年から今年にかけて新潮社は各地の裁判所で、1000万円前後の損害賠償命令を受けている。加えて今回の書類送検。これで有罪になれば、『週刊新



原稿募集

字数は500字前後。文字数の調整上、趣旨を変えずに直させていただきます場合もあります。郵便番号、住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記。送り先は「読者の広場」係。採用の方には図書券をお送りします。

伝言板

◆今号には、平成15年度「任用試験」の研鑽のために、試験範囲の全教材を掲載しました。読みやすく、学びやすいようにレイアウトも工夫。受験される方も、教えられる方も、大いに活用ください。◆本誌での引用は「日蓮大聖人御書全集」は（XX頁）、「妙法蓮華経並開結」は（法華経XX頁）、「日寛上人文段集」は（文段XX頁）、「富士宗学要集」は（重要XX巻XX頁）と表記しています。ご了承ください。

留学生コーナー

ちか 未来部時代の誓いが出発点

イギリス うちむらたくや ロンドン大学 内村琢也

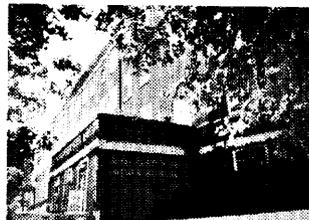


高校時代に小説『新・人間革命』を読み、「二十一世紀は、アフリカの世紀」との言葉に深く感動。この時、「アフリカ広宣流布のお手伝いをさせていただきたい」と決意したことがアフリカ研究の出発点です。

最初は、何から始めればよいのかわかりませんでした。経済学を学んだ南九州大学在学時に、指導教授に恵まれ、専門知識と英語力を磨くことの重要性を実感。卒業後にロンドンに渡りました。

現在は、アフリカ研究に関しては世界屈指のロンドン大学の SOAS（アジア・アフリカ学部）で学んでいます。

留学の厳しさはありますが、そ



れでも学び続けることができるのは、SGIの先輩方の、信心から生活面までの事細かな指導、そして池田先生の激励のおかげです。「教主釈尊の出世の本懐は人の振舞にて候けるぞ」(1174年)との御文を心に刻み、今いる場所で、すべての人々に先生の正義を宣揚し、また博士号取得を自指して挑戦していきます。

潮」は「捏造」「デマ」を超えた「犯罪雑誌」になる。周知の通り、「週刊新潮」は創価学会に対する「3大デマ事件」で断罪・糾弾され、「北新宿デマ事件」では昨年、公式に学会に謝罪している。人権を踏みじり、捏造を売り物にする反人権雑誌は、社会

の害毒である。読者に謝罪して廃刊すべきである。 (兵庫県・大野木正廣) 東京在住の中学時代の教え子から電話があり、「東京富士美術館でのワイルドスミス展を家族で見で、とても素晴らしいから電話があり、」東京富士美術館でのワイルドスミス展を家族で見で、とても素晴らしいから電話があり、

たので、是非、泊まりがけで見に来てください」との嬉しい誘いがありました。早速、仙台在住の友人も誘って行きました。彼女とは仏法対話を重ね、6月から聖教新聞を購読してくれています。30代の彼女は絵に対する造詣が深いので、東京富士美術館での鑑賞では驚嘆の連続でした。

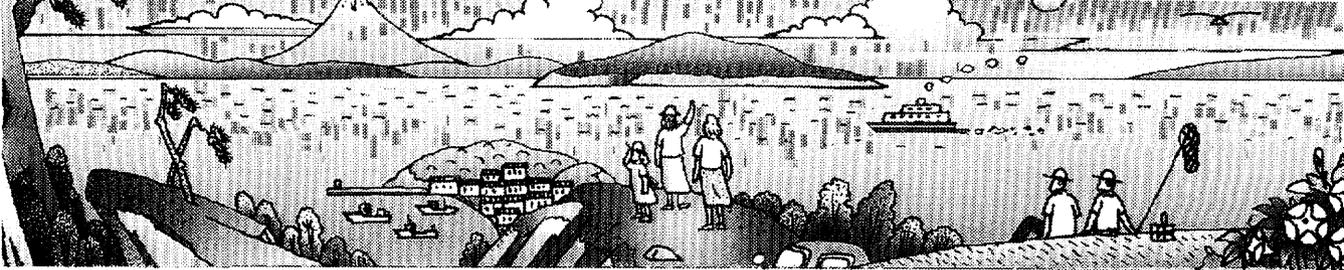
ワイルドスミス氏の作品の前にはあふれんばかりの人……。氏の紹介ビデオをじっくり見ながら、ファンタジックな幻想の世界を大いに堪能しました。さすが、色彩のマジシャンと言われるだけあって、「すごい」「きれい！」を連発。二人で感嘆しながら、何回も絵の前を行ったり来たり。館内で5時間も、ゆっくり過ごしました。

た。忘れ得ぬ創立者の激励 大白蓮華7月号の企画を感慨深く読みました。私は創価高校1期生です。1年生の12月下旬のある日、30人ほどの成績不振者が集められました。そして、創立者がそのメンバーと会ってくださいると伺い、驚きました。緊張のなか、一人ひとりやり取りがありました。 「しっかりと勉強するんだよ。成績が1番の人であれば、最後の人もいる。成績とは、そうい

た。忘れ得ぬ創立者の激励 大白蓮華7月号の企画を感慨深く読みました。私は創価高校1期生です。1年生の12月下旬のある日、30人ほどの成績不振者が集められました。そして、創立者がそのメンバーと会ってくださいると伺い、驚きました。緊張のなか、一人ひとりやり取りがありました。 「しっかりと勉強するんだよ。成績が1番の人であれば、最後の人もいる。成績とは、そうい

た。忘れ得ぬ創立者の激励 大白蓮華7月号の企画を感慨深く読みました。私は創価高校1期生です。1年生の12月下旬のある日、30人ほどの成績不振者が集められました。そして、創立者がそのメンバーと会ってくださいると伺い、驚きました。緊張のなか、一人ひとりやり取りがありました。 「しっかりと勉強するんだよ。成績が1番の人であれば、最後の人もいる。成績とは、そうい

うなぎのり 『気温の上昇じゃなく ママの友好拡大ですよ』 マジメな冗談 (宮城県・喜世孝子)



うものだよ」
池田先生自ら、教育の範を示され、温かい声を掛けてくださったことに、メンバーは発奮しました。

モニター便り



◆自分自身が太陽と輝いていくことに「太陽の仏法」の意義があることが「御書の世界」を読んて分かりました。折伏・弘教の戦いは、社会の闇を照らす戦いだと思えました。さらなる実践で「御書の世界」に迫っていきます。

◆創価学会は大聖人と同じ精神で戦っている、と「立正安国論と創価の精神」を読んで実感しました。7月は安国論が提出された月。「早く天下の静謐を思わば、須く国中の謗法を断つべし」(30ページの)の御文通り、悪の元凶・日顕宗の打倒を祈り抜きます。北海道・前田かおる

その後、創価大学に1期生として入学。大学卒業後、大手銀行に就職しました。後日、学園出身者として都銀の支店長第1号になった時、創立者に「報

告した際、「1期生 万歳」との揮毫をいただきました。あの日の誓いを思い出し、さらに社会で実証を示していく決意です。(千葉県・上森信範)

不合格になった経験があります。「創価教育の大河」にあった、受験した人にも「創価教育の第1段階は収まっている」との言葉に、胸を打たれました。

◆先月、住み慣れた東京を離れて埼玉の地に。地域性の違いに驚く毎日でしたが、やはり変わらず温かく迎えてくださったのは、創価の友でした。一家和楽の信心、地域の広布を願い、新天地で前進を誓いました。

◆毎回の教学試験で大白蓮華を学んでいます。今回の任用試験に地区で4人が挑戦。受験者と共に学んでいきたいと思います。高知・川辺めぐみ

◆体験談のなかでも、私が一番知りたいのは、発心のきっかけとなった池田先生の指導や、御書の一節です。「あしおと」は自分に当てはめて読むことができ、大変、感謝しています。

◆「後継者育成セミナー」の実践例を読むと、希望がわきます。母親の「真剣な関わり」「生きる姿勢」が重要とのお話通り、私自身が強い心で、子ども

◆編集部では、信仰の実証とともに、どう乗り越えられたかに焦点を当てて編集作業にあたっています。

編集後記



■本は剣よりも強し。破邪顕正の言論を高らかに。宗祖の如く、三代会長の如く。(由)

■札幌創価幼稚園——登園時、園長が園児の頬を両手で包み出迎え。人間教育ここに！(広)

■「あしおと」の千葉さん。功德の源泉は「素直な信心」と。斜に構える姿勢では駄目。(晴)

■友との対話で、昔、学園を受験した、富士美を見た等と。増える縁を生かす戦いを。(啓)

■共産党のNo.4がセクハラで辞職。煩惱に負けた唯物論者。やっぱ心が大切だね。(真)

■「読者の広場」に、極悪に対する怒りの声が続々。日顕、山友、新潮等々、断固鉄槌を！(健)

■「用紙が滑らかになった」と読者から。古紙配合率の変化を手触りで感じてください。(康)

裏表紙「世界文化フォトデザイン」/オフィス・ドウィング&カズクリエーティブ
AIデザイン
クリエイティブメックセンジャー
トランスデザインワークス

平成15年度

任用試験のために

任用試験出題範囲

①御書3編(5、6、7年度の座談会拝読御書)

①「十字御書」(1492※8行目～10行目、5月度)

②「法華初心成仏抄」(557※6行目～10行目、6月度)

③「四条金吾殿御返事」(1181※17行目～1182※1行目、7月度)

②教学入門

①日蓮大聖人の御生涯

②十界と一生成仏

③立正安国と広宣流布

④信行学

⑤難を乗り越える信心

③世界広布と創価学会

①創価学会の歴史

②日蓮宗破折

十字御書

法華初心成仏抄

四葉書
御返事

日蓮大聖人の
御生涯

十界と
一生成仏

立正安国と
広宣流布

信行学

難を乗り越える
信心

創価学会の歴史

日蓮宗破折

十字御書

御書全集 1492頁、8行目〜10行目
編年体御書 1478頁、10行目〜12行目

いままたほけきょうしんひと
今又法華經を信ずる人は・さいわいを

ばんりそと
万里の外よりあつむべし、影は体より

しょう
生ずるもの・法華經をかたきとする人ひと

くにたい
の国は体に・かげのそうがごとく・わざ

きた
わい来るべし、法華經を信ずる人は・せ

んだんに・かをばしさのそなえたるがご

とし

いままた、法華經を信ずる人は、幸いを万里の外から集めるであろう。影は体から生ずるものである。法華經を敵とする人の国は、体に影が付き添うように災いが来るであろう。法華經を信ずる人は、栴檀によい香りが具わっているようなものである。

本抄は、駿河国富士郡重須の地頭・石川新兵衛(重須殿)の妻(重須殿女房)が、日蓮大聖人に蒸し餅(十字)と果物を御供養したことに對するお手紙です。御述作の年は明らかではありません。

重須殿女房は、南条時光の姉に当たる人で、日興上人の折伏で正法に帰依したと伝えられています。

本抄で大聖人は、妙法への御供養に励んだ門下の純真な信心を称賛され、法華經(御本尊)を信じていく人は幸福を万里の外から集めることができること仰せです。その人の生命に築かれた善根は、その人の生活に必ず現れてくるのです。

人生を決定づけるものは、生命に刻まれた宿業や福運です。

御本尊を受持して広布の実践に励む人には功德・善根が刻まれ、それは必ず幸福な人生となって現れてくるのです。

逆に正法に敵対し、広布を妨げたならば福運を失い、さまざまな災いを招くことになってしまいます。

この道理を大聖人は、本抄で影と体の關係に譬えられて、「法華經をかたきと

する人の国は体に・かげのそうがごとく・わざわい来るべし」と仰せられています。

仏法は、決して観念論ではありません。法の正邪の違いは、必ず幸・不幸の現証として人生のうえに現れてきます。

大聖人は、御本尊を信ずる人は香木の栴檀が芳香を具えているようなものだといわれています。栴檀が芳香を具えるとは、生命に仏性が具わっていることを示す譬えです。純真に御本尊を信受し、法のために尽くした人は、香木から素晴らしい香りが漂ってくるように、清らかなで力強い仏の生命が自身の生命に現れてくることを教えられているのです。

池田名誉会長は述べています。「学会員は広布のために『行動』、法のため、悩める友のために『行動』している。それらの『行動』『働き』は、すべて宿命転換に通じ、功德となって自分自身に還ってくることを確信していきたい。」

広布の実践がすべて福運となっていることを確信し、朗らかに前進していきましよう。

十字
小麦などの粉を練って餅状にし、蒸した食べもの。十字の裂け目を入れて食べやすいようにしたもので、「十字」と書いて「むしもち」と読むようになったものと思われる。

せんだん
仏典に出てくる栴檀は白檀のこと。インド原産の香木で、芳香があり、香料、薬料として珍重された。



イワチドリ

法華初心成仏抄

御書全集 557ページ目〜10行目
編年体御書 1069ページ目〜10行目

我が己心の妙法蓮華經を本尊とあがめ奉

りて我が己心中の仏性・南無妙法蓮華經と

よびよばれて顕れ給う処を仏とは云うなり、

譬えば籠の中の鳥なけば空とぶ鳥のよばれて

集まるが如し、空とぶ鳥の集まれば籠の中の

鳥も出でんとするが如し口に妙法をよび奉

れば我が身の仏性もよばれて必ず顕れ給ふ、

梵王・帝釈の仏性はよばれて我等を守り給

ふ、仏菩薩の仏性はよばれて悦び給ふ

わが己心の妙法蓮華經を本尊と崇め奉って、わが己心のなかの鳥が鳴けば、空を飛ぶ鳥が呼ばれて集まるようなものである。空飛ぶ鳥が集まれば、籠のなかの鳥も出ようとするようなものである。口に妙法を呼び奉れば、わが身の仏性も呼ばれて必ず顕れる。梵王や帝釈の仏性は呼ばれて、われらを守る。仏や菩薩の仏性は呼ばれてお喜びになるのである。

本抄は、建治3年（1277年）3月、駿河岡宮（現在の静岡県沼津市）に住む妙法尼に与えられた書です。

「法華初心成仏抄」の「法華」とは、一往は文上の法華經の意ですが、再往は法華經文底の南無妙法蓮華經を指しています。

各人の生命には仏性（妙法蓮華經）が具わっています。その仏性を各人が現していくために、日蓮大聖人は御自身の生命に内在する仏の生命を御本尊として御図顕してくださいましたのです。

私たちはその御本尊を信受し、自行化他にわたって南無妙法蓮華經の題目を唱えていくところに、自身の内にある仏性（己心の御本尊）が現れます。南無妙法蓮華經は本尊であり、また唱える題目でもあるのです。

「よびよばれて」と言われているように、呼び顯すのも自分であり、また呼び顯されるのも自分自身の仏性です。

そのことを日蓮大聖人は空飛ぶ鳥と籠のなかの鳥が呼び合い、呼応することに譬えられています。

空飛ぶ鳥と籠のなかの鳥が呼び合い、集まり合うように、唱題の実践によって自身の仏性も顯れてくるのです。

それだけでなく、梵天・帝釈などの諸天神や仏菩薩の仏性も顯れると仰せです。

それは、その人を取り巻くすべてから仏性が顯れて、妙法を行ずる人を守る方向に働くことを意味しているといえるでしょう。

「依正不二」の法理に照らして、正報である生命主体が自身の仏性を呼び顯せば、それに呼応して依報である環境世界の仏性も顯れるのです。

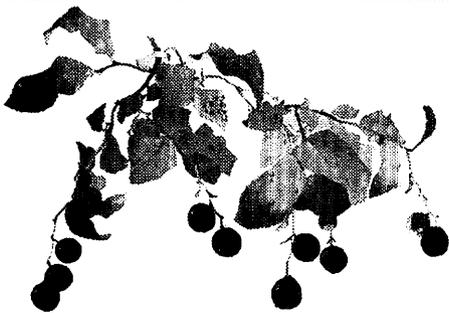
池田名誉会長は次のように述べています。

「題目の力は無限である。妙法は宇宙の根本の法であり、題目は生命の根源のリズムである。広布をめざし、題目を朗々と唱えゆくところ、生命の威光勢力は無量に高まり、無辺に広がっていく」。題目に勝る力はありません。題目を唱えに唱え、各自が人生の勝利を勝ち取っていきましょう。

仏性
一切衆生の生命に、本然的に具わっている仏の性分、性質のこと。

梵王
大梵天王の略称。帝釈天とともに仏法を守護する諸天神。

帝釈
帝釈天のこと。仏法を守護する諸天神。インド神話では強力な雷神で、現世世界を統括する中心的な神とされた。



ナツハゼ

四糸金吾殿御返事

御書全集 1181頁17行目〜1182頁1行目
編年体御書 1145頁17行目〜1146頁1行目

末代の法華經の聖人をば何を用つて

かするべき、經に云く「能説此經・能持

此經の人・則如来の使なり」八卷・一

卷・一品・一偈の人乃至題目を唱うる

人・如来の使なり、始中終すてずして

大難を・とをす人・如来の使なり

末法の法華經の聖人であることとを、何をもって知ることができるのであるうか。法華經には「能く此の經を説き、能く此の經を受持する人、その人が仏の使である」と説かれている。すなわち法華經8卷、1巻、1品、1偈でも持つ人、また題目を唱える人は、如来の使である。また最初から最後まで、生涯、妙法を捨てず、大難を受けても受持し通すが、如来の使である。

弘安元年（1278年）9月、鎌倉の中心的な信徒・四条金吾に宛てられたお手紙です。鎌倉幕府の実権を握る北条家の一族・江間家に仕える武士であった四条金吾は、文永11年（1274年）9月、主君を折伏して以来、主君の不興をかい、同僚の讒言などもあって、大変苦しい状況に置かれました。建治3年（1277年）6月には法華経の信心をとるか、江間家の家臣の立場をとるか、という選択を迫られる窮地に立たされたほどでした。

しかし、金吾は大聖人の指導通り、信心根本に戦いぬき、見事に勝利することができました。本抄は、主君から新しい所領を賜ったことを、大聖人に御報告したことに對する御返事です。

ここで日蓮大聖人は、末法の法華経の聖人について、法華経の經文を引いて分かりやすく説かれています。

法師品などでは、法華経を能く説き、能く受持する人は如来の使であると言われています。「八卷・一卷・一品・一偈の人乃至題目を唱うる人」とは、今日

においては御本尊を受持して、仏法の功德を一言でも語っていく人、ということになります。

また大聖人は、「始中終すてずして大難を・とをす人・如来の使なり」と仰せです。どのような大難に遭っても、最後まで信心を貫き通す人こそが、如来の使であると言われているのです。

この御教示を拝するならば、御本尊を受持して、人のため、法のため、日夜、広宣流布の実践に励んでいる学会員こそ、尊い仏の使いにほかなりません。

人の尊きは、立場や財産などではなく、その人がどのような「法」を持ち、どのような振舞いをしているかによって決まります。妙法を受持し、広布の第一線で懸命に活動している人こそ最高に尊い人といえましょう。

したがって、同志を尊敬し、大切にしていけることが肝要です。同志を守り、大切にしていけることが、自分自身の境涯を高め、福運を増していくことになるからです。同志を互いに尊ぶ心をもって、一段と力強く、前進していきましよう。

經に云く「能説此經・能持此經の人・則如来の使なり」
 「能く此の經を説く」の文は、法華経法師品第10（法華経369頁）、見宝塔品第11（同391頁）にある。「能く此の經を持つ」の文は、分別功德品第17（同513頁）にある。「如来の使」については、法師品第10に「我が滅度の後、能く竊かに一人の爲めにも、法華経の乃至一句を説かば、当に知るべし、是の人は則ち如来の使にして」（同357頁）とある。



シャガ

1 日蓮大聖人の御生涯

(日蓮大聖人の年齢は、すべて「数え年」で記します。)

(一) 御誕生・出家・遊学

日蓮大聖人は、貞応元年(1222年)2月16日、安房国長狭郡東条郷の片海(現在の千葉県安房郡天津小湊町)の漁村で誕生されました。漁業で生計を立てる庶民階層の出身でした。

12歳で安房国の清澄寺に入って、いわば初等教育を受けられました。

大聖人は12歳の時から「日本第一の智者となし給へ」(888番)との願いを立てられました。民衆と社会を救う智者になりたいというのが、幼少の大聖人の願いだっただけです。そこで大聖人は、仏法を究めるために出家を決意します。16歳の時、清澄寺の道善房を師匠として得度し、是聖房蓮長と名乗りました。

このころ、「明星の如くなる智慧の宝珠」(同バー)と御書に述べられている智慧を得られました。これは、全仏法の根底

と言うべき「妙法」の智慧といえます。

大聖人は、鎌倉・京都・奈良等の各地の諸大寺を巡る遊学を開始し、一切経を精読するとともに、各宗派の教義の本質を検証していかれました。その結果として、法華経こそが仏教のすべての経典のなかで最も勝れた経典であり、自身が悟った妙法は法華経の肝要の法である南無妙法蓮華経であることを確認されました。

そしてこの南無妙法蓮華経を末法の人々を救う法として弘める使命を自覚されました(「末法」とは、釈尊の仏法が救済の力を失う時代のことで、釈尊が入滅してから2000年以後とされま

す)。

(二) 立宗宣言

遊学によって妙法弘通の使命と方途を確認された大聖人は、大難が起ること覚悟のうえで、妙法弘通の実践に踏み出すことを決意されました。

そして、建長5年(1253年)4月28日の「午の時」(正午ごろ)、清澄寺の持仏堂で、念仏などを破折するとともに、南無妙法蓮華経の題目を高らかに唱えて末法の民衆を救済する唯一の正法を宣言されました。これが「立宗宣言」です。御年32歳でした。

そして、その時、これまでの蓮長の名を改め、みずから「日蓮」と名乗られました。



トキソウ

した。

立宗宣言の際に念仏を厳しく批判した大聖人に対し、地頭・東条景信は念仏の強信者であったために激しく憤りました。そして、大聖人の身に危害を加えようとしたが、大聖人は無事、その難を免れ、鎌倉に出られました。

鎌倉では名越の松葉ヶ谷に草庵を構えて、弘教を開始されました。当時、鎌倉に広まっていた念仏と禅宗に対する破折を中心としながら、南無妙法蓮華経の題目を唱え、弘められました。



ハナイカダ

その弘教により、富木常忍・四条金吾・池上宗仲らが入信しました。

立正安国論の提出と法難

大聖人が鎌倉での弘教を開始された当時、毎年のように、異常気象や大地震等の天変地異が相次ぎ、大飢饉・火災・疫病などが続発していました。

特に、正嘉元年（1257年）8月に鎌倉地方を襲った大地震は、鎌倉中の主な建物をことごとく倒壊させる大被害をもたらしました。

大聖人は、この地震を機に、世の不幸の根本原因を明らかにし、それを根絶する道を世に示すため、駿河国（現在の静岡県中央部）にある岩本実相寺で一切経を閲読されました。その時、日興上人が大聖人の弟子となつていきます。

そして大聖人は立正安国論を著し、文応元年（1260年）7月16日、時の実質的な最高権力者であった北条時頼に提出されました。これが大聖人による

最初の国主諫暁です。

立正安国論では、まず天変地異が続いている原因は国中の人々が正法に背いて邪法を信じていることにあり、その元凶は法然が説き始めた念仏にあると指摘しています。

そして、悪法への帰依を止めて正法を信受するならば平和楽土が現れ出すが、悪法への帰依を続けるならば経文に説かれていた三災七難等の種々の災難のうち、まだ起こっていない自界叛逆難（内乱）と他国侵逼難（他国からの侵略）の二つの災難が起こるであろうと警告し、速やかに正法に帰依するよう諫められました（三災七難とは、穀貴・飢饉のことでV・兵革・戦争のことでV・疫病・伝染病がはやることでVの三種の災いと、星宿変怪難・星の運行が乱れること・V・非時風雨難・季節はずれの風雨の災害が起こることVなどの七種の難をいいます）。

しかし、幕府要人は、大聖人の至誠の諫暁を無視しました。それだけでなく、念

仏者たちは幕府要人の内々の承認のもとに大聖人への迫害を図ってきたのです。

文応元年（1260年）8月27日の夜、念仏者たちが、大聖人を亡き者にしようとして松葉ヶ谷の草庵を襲いました（松葉ヶ谷の法難）。

幸い、この時は大聖人は難を逃れ、一時、鎌倉を離れることになりました。

翌・弘長元年（1261年）5月12日、幕府は鎌倉に戻られた大聖人を捕らえて、伊豆の伊東へ流罪に処しました（伊豆流罪）。

弘長3年（1263年）2月、伊豆流

罪を赦免（罪を許されること）されて鎌倉に帰られた大聖人は、翌年、郷里の安房方面に赴かれます。

文永元年（1264年）11月11日、大聖人の一行は、天津の工藤吉隆邸へ向かう途中、小松原において地頭・東条景信の軍勢に襲撃されました。この時の戦闘によって、門下の鏡忍房と工藤吉隆が死亡しただけでなく、大聖人も額に傷を負い、左の手を折られました（小松原の法難）。

（四）竜の口の法難と発迹顕本

文永5年（1268年）、蒙古からの国書が鎌倉に到着しました。そこには、蒙古の求めに応じなければ、兵を用いるとの意が示されていました。立正安国論で予言した他国侵逼難が現実のものとなってきたのです。

そこで、大聖人は時の執権・北条時宗をはじめとする幕府要人や鎌倉諸大寺の僧たち、あわせて11カ所に対して書

状（十一通御書）を送り、重ねて諫暁されました。

しかし、幕府も諸宗も、大聖人の働きかけを黙殺しました。それどころか、幕府は大聖人の教団を危険視し、その弾圧を検討していたのです。

文永8年（1271年）に大早魃が起った時、真言律宗の僧で、幕府と結びついて大きな影響力を持っていた極楽寺良観が、祈雨（雨乞い）の法を修することになりました。そのことを聞かれた大聖人は、次のように良観に申し入れられました。

それは、もし良観が7日のうちに雨を降らしたならば、大聖人が良観の弟子となり、もし雨が降らなければ、良観が法華経に帰伏せよ、というものでした。

その結果は、良観の祈雨の法が行われた最初の7日間、雨は一滴も降らず、良観はさらに7日の日延べを申し入れて祈りましたが、それでも雨は降らないばかりか、暴風が吹くというありさまで、良観の大敗北となりました。



サルスベリ

しかし、良観はみずからの敗北を素直に認めず、大聖人に対する怨みをさらにつものらせ、配下の念仏僧の名で大聖人を訴えたり、幕府要人やその夫人たちに働きかけて、権力による弾圧を企てました。

良観は、当時の人々から仏法を究めた高僧として崇められていました。しかし、実際には権力と結託して、私欲を貪っていたのです。

9月10日、大聖人は幕府から呼び出されて、侍所の所司(侍所は軍事・警察を担当する役所、所司は次官のこと、長官は執権(兼任)である平左衛門尉頼綱の尋問を受けました。

この時、大聖人は平左衛門尉に対して仏法の法理のうえから、国を安んじていく一國の指導者のあるべき姿を説いて諫められました。

2日後の文永8年(1271年)9月12日の夕刻、平左衛門尉が武装した兵士を率いて松葉ヶ谷の草庵を襲い、大聖人は謀叛人のような扱いを受けて捕らえら

れました。この時、大聖人は、平左衛門尉に向かつて「日本の柱」である大聖人を迫害するならば、必ず自界叛逆・他國侵逼の二難が起ると述べて、強く諫められました。

幕府に連行された大聖人は、何も取り調べがないまま、夜半に鎌倉のはずれにある竜の口の刑場に連行されました。平左衛門尉らが、内々で大聖人を斬首刑に処することを謀っていたのです。しかし、まさに刑が執行されようとしたそのとき、突然、江ノ島の方から、まりのような大きな光りものが夜空を北西の方向へと走ったのです。兵士たちはこれに怖おそれて、刑の執行は不可能となりました(竜の口の法難)。

この法難は、大聖人御自身の一代の弘教のうえで、極めて重要な意義をもつ出来事でした。すなわち、大聖人は竜の口の法難の時に、凡夫の迹(仮の姿)を開いて、凡夫の身のままで久遠元初自用報身如来という本地(本来の境地)を顕されたのです。これを「発迹顕本」(迹

を發いて本を顯す)といえます。

この発迹顕本以後、大聖人は末法の御本仏としての御振舞いを示されていきます。そして、万人が根本として尊敬し、帰依していくべき曼荼羅御本尊を御図顕されていきました。

(五) 佐渡流罪

幕府では竜の口での処刑に失敗してから大聖人への処置が定まらず、約1カ月間、大聖人を相模国の依智(現在の神奈川県厚木市北部)にある本間六郎左衛門(佐渡国の守護代)の館に留め置きました。

結局、佐渡流罪に処することが決まり、大聖人は、文永8年(1271年)10月10日に依智を出発し、11月1日に佐渡の塚原という墓地にある荒れ果てた三昧堂(葬儀用の堂)に入りました。そこでは、厳寒の氣候に加えて、衣類や食料も乏しく、佐渡の念仏者から命を狙われるという状態でした。

翌文永9年（1272年）1月16日には、佐渡だけでなく北陸・信越等から諸宗の僧など数百人が集まり、大聖人に法論を挑んできましたが、大聖人は各宗の邪義をことごとく論破された（塚原問答）。

2月には北条一門内部の同士打ちが起こり、鎌倉と京都で戦闘が行われました（二月騒動）。大聖人が竜の口の法難の際に予言された自界叛逆難が、わずか150日後に現実になったのです。

同年初夏、大聖人の配所は、塚原から一谷に移されましたが、念仏者たちに命を狙われるという危険な状況に変わりはありませんでした。

この佐渡流罪の間を通して、日興上人は、大聖人に常随給仕して苦難をともにされました。また、佐渡の地でも、大聖人に帰依する人々が現れてきました。

大聖人は、この佐渡の地で多くの重要な御書を著されていますが、とりわけ重要な著作が開目抄と観心本尊抄です。

文永9年2月に著された開目抄は、日

蓮大聖人こそが末法の衆生に対して主師親の三徳を具えられた末法の御本仏であることを明かされているところから、「人本尊開頭の書」といわれます。

また文永10年（1273年）4月に著された観心本尊抄は、末法の衆生が成仏のために受持すべき南無妙法蓮華経の本尊について説き明かしており、「法本尊開頭の書」といわれます。

文永11年（1274年）2月、大聖人は赦免され、3月に佐渡を免つて鎌倉へ帰られました。4月に平左衛門尉と対面した大聖人は、蒙古調伏の祈禱を刑法によつて行っている幕府を強く諫めるとともに、平左衛門尉の質問に答えて、蒙古の襲来は必ず年内に起こると予言されました。

この予言の通り、同年10月に蒙古の大軍が九州を襲つたのです（文永の役）。これで、立正安国論で示された自界叛逆難・他国侵逼難の二難の予言が二つとも的中したことになります。



（六）身延入山

佐渡流罪後の諫曉も幕府が用いなかつたため、日蓮大聖人は甲斐国（現在の山梨県）波木井郷の身延山に入ることを決意されました。身延の地は、日興上人の教化によつて大聖人の門下となった波木井六郎実長が地頭として治めていました。大聖人は、文永11年（1274年）5月に身延に入りました。しかし、大聖人の身延入山は、決して、いわゆる隠棲ではありませんでした。

身延において大聖人は数多くの御書を執筆されて、大聖人の仏法の重要な法門

を説き示されただけではなく、法華經の講義などを通して未来の広布を担う人材の育成に全力を注がれたのです。また、多くの御消息文（お手紙）を書かれ、在家信徒一人ひとりの信心を激励し、各人が人生の勝利と成仏の境涯が得られるよう指導を続けられました。

(七) 熱原の法難と大御本尊御建立

日蓮大聖人の身延入山後に、駿河国（現在の静岡県中央部）の富士方面では、日興上人が中心となって折伏・弘教が進められ、天台宗などの僧侶や信徒が、それまでの信仰を捨てて大聖人に帰依するようになりました。

そのために、天台宗寺院による迫害が始まり、大聖人に帰依した人々を脅迫する事件が起りました。

弘安2年（1279年）9月21日、熱原の農民信徒20人が無実の罪を着せられて逮捕され、鎌倉に連行されました。農民信徒は平左衛門尉の私邸で拷問に等し

い取り調べを受け、法華經の信心を捨てるよう脅されましたが、全員がそれに屈せず、信仰を貫き通しました。

そして、神四郎・弥五郎・弥六郎の3人の兄弟が処刑され、残りの17人は居住する地域から追放されました（10月15日、一説には翌年4月8日）。この弾圧を中心とする一連の法難を「熱原の法難」といいます。

農民信徒たちの不惜身命の姿に、大聖人は、民衆が大難に耐える強き信心を確立したことを感じられて、10月1日に著された聖人御難事で「出世の本懐」を遂げる時がきたことを宣言されました。「出世の本懐」とは、仏がこの世に出現した目的という意味です。

そして、弘安2年（1279年）10月12日に一閻浮提總与（全世界の人々に授けようとするの意）の大御本尊を建立されたのです。

熱原の法難における、民衆の強き信心に呼応して御凶顕された弘安2年の大御本尊は、全民衆救済という日蓮大聖人

の大願を込めて、広宣流布のために顕されたのです。

(八) 日興上人への付嘱と御入滅

弘安4年（1281年）11月、身延に大坊が完成し、久遠寺と名づけられました。弘安5年（1282年）9月、大聖人は御一代に説き弘められた法門のすべてを日興上人に付嘱し、広宣流布の使命と責任を託されました。身延において行われたこの付嘱を「身延相承」といいます（その相承書を「身延相承書」あるいは「日蓮二期弘法付嘱書」といいます）。

9月8日、大聖人は、弟子たちの勧めで常陸国（現在の茨城県北部と福島県南東部）へ湯治に行くため、9年間住まわされた身延山を発ちました。そして、武蔵国池上（現在の東京都大田区）にある池上宗仲の屋敷に滞在し、後事について明確に定められたのです。

9月25日には、病を押して、門下に對し立正安国論を講義されました。

弘安5年(1282年)10月13日、大

聖人は御入滅に先立って再び日興上人へ付囑され、日興上人を身延山久遠寺の別当(住職)と定められました。これが池上相承です(その相承書を「池上相承書」あるいは「身延山付囑書」といいます)。

先の身延相承とこの池上相承を総称して「二箇相承」といいます。

同日、日蓮大聖人は、池上宗仲邸で61歳の尊い生涯を終えられたのです。



ネジキ

日蓮大聖人略年譜

元号(西暦) 聖寿 月日 出来事

貞応元年(1222年)	1歳	2月16日	安房国長狭郡東条郷片海に御誕生
建長5年(1253年)	32歳	4月28日	清澄寺で立宗宣言
文応元年(1260年)	39歳	7月16日	立正安国論を北条時頼に提出し、諫暁する
弘長元年(1261年)	40歳	5月12日	伊豆に流罪される
文永元年(1264年)	43歳	11月11日	小松原の法難
文永5年(1268年)	47歳	10月11日	十一通御書をしたため、各所に送る
文永8年(1271年)	50歳	9月12日	竜の口の法難 発迹顕本
文永9年(1272年)	51歳	10月10日	流罪地・佐渡に向かう
文永10年(1273年)	52歳	1月16日	塚原問答
文永11年(1274年)	53歳	2月	開目抄を著す
弘安2年(1279年)	58歳	5月17日	観心本尊抄を著す
弘安5年(1282年)	61歳	10月13日	佐渡から帰還され、鎌倉に着く 平左衛門尉と会見、年内の蒙古襲来を予言 身延に入る 熱原の農民信徒20人が捕らえられる 一閭浮提総与の大御本尊を御建立 武蔵国の池上宗仲邸で御入滅

2 十界と一生成仏

十界

「十界」とは、生命の境涯を十種に分類したもので、仏法の生命観の基本となるものです。十界の法理を学ぶことによつて、生命の境涯を的確にとらえ、各人がそれぞれの境涯を变革していく指針を得ることができます。

「十界」それぞれの名を挙げれば、地獄界・餓鬼界・畜生界・修羅界・人界・天界・声聞界・縁覚界・菩薩界・仏界です。このうち地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天をまとめて「六道」、声聞・縁覚・菩薩・仏をまとめて「四聖」といいます。

「六道」は、インド古来の世界観を仏教が用いたもので、もともとは生命が流転する世界を六つに大別したものです。

また「四聖」は仏道修行によつて得られる境涯です。

法華経以外の経典では、地の下の地獄や遠く離れた浄土（清らかな国土）など、十界は全く別々に存在する世界としてとらえられていました。

しかし法華経では、その考え方を根本的に破り、十界は固定的な別々の世界としてあるのではなく、一個の生命に具わる十種の境涯であることを示したのです。したがって、十界のどの界の生命にも十界がすべて具わっていることが明らかにになりました。これを十界互具といいます。

日蓮大聖人は、「浄土と云うも地獄と云うも外には候はず・ただ我等がむねの間にあり、これをさとるを仏といふ・これにまよふを凡夫と云う」（1504

げ、通解——仏の淨らかな国土といつても地獄といつても外の所にあるのではありませぬ。ただ我々の胸の間にあるのです。このことを悟るのを仏といい、このことに迷うのを凡夫といふのです」と述べられています。

生命に十界がすべて具わっているということは、たとえ今の自分が地獄の苦しみ生命であつても、仏界の大歡喜の生命へと变革していくことができるということです。このように法華経に基づく十界論は、自身の生命を变革できることを示す原理となります。

◇
それでは、十界のそれぞれの境涯について述べます。まず、私たちの生命に具わる六道について、大聖人は観心本尊抄で次のように述べられています。

「数は他面を見るに或時は喜び或時は瞋り或時は平に或時は貪り現じ或時は癡現じ或時は諂曲なり、瞋るは地獄・

十字御書
法華初心成仏抄
四家金堂殿
御返書
日蓮大聖人の
御生涯
十界と一生成仏
立止安国と
広置流布
信行学
難を乗り越える
觀心
創価学会の歴史
日輪宗破折

貪るは餓鬼・癡は畜生・詭曲なるは修羅・喜ぶは天・平かなるは人なり」(241ページ)

この御文に基づき、六道の一つ一つについて述べていきます。

①地獄界

じごくかい

地獄は、もともとは「地下の牢獄」という意味で、経典には八熱地獄、八寒地獄など数多くの地獄が説かれています。地獄界は、苦しみに縛られた最低の境界です。「地」は最底を意味し、「獄」は拘束され、縛られた不自由さを表します。

「地獄おそろべし炎を以て家とす」(1439ページ)といわれるように、地獄界とは、自身を取り巻く世界全体を自身に苦しみを与える世界と感じる境涯といえます。

②餓鬼界

がまかい

餓鬼界とは、欲望が満たされずに苦しむ境涯です。

餓鬼のもともとの意味は「死者」のことです。死者が常に飢えて食物を欲していることとされていたことから、とどまると

また、大聖人は、観心本尊抄で「瞋るは地獄」と仰せです。「瞋り」とは、思い通りにいかない自分自身や、苦しみを感ぜさせる周りの世界に対して抱く、やり場のない恨みの心です。苦の世界に囚われ、どうすることもできない生命のうめき声が囁ります。いわば「生きていくこと自体が苦しい」、「何を見ても不幸に感じる」境涯が地獄界です。

また破壊衝動に駆られて、自分と他者を壊していくことも地獄界の生命といえるでしょう。人間の苦しみの極致である戦争は、まさに地獄界の生命の表れにほかなりません。

ころを知らぬ激しい欲望の火に身も心も焼かれていく生命状態を餓鬼界と表現します。

大聖人は「餓鬼悲むべし飢渴にうへて子を食ふ」(1439ページ)、「貪るは餓鬼」と仰せです。貪り、すなわち際限のない欲望にふりまわされ、そのために心が自由にならず、苦しみを生じる境涯のことです。

もちろん、欲望そのものには善悪の両面があります。人間は、食欲などの欲望がないと生きていけないことも事実です。また、欲望が人間を進歩、向上させるエネルギーとなる場合もあります。しかし、欲望を創造の方向に使えず、欲望の奴隷となつて苦しむのが餓鬼界です。



コオニユリ

③畜生界

ちくしやうかい

畜生という言葉はもともとは獣や鳥などの動物を指します。畜生界の特質は、目先の利害にとらわれ、理性が働かない「愚かさ」です。大聖人は「癡は畜生」と説かれています。正邪・善悪の判断がつかず、本能のままに行動してしまう境涯です。

また「畜生の心は弱きをおとし強きをおおる」(957頁)、「畜生は残害として互に殺しあふ」(1439頁)といわれるように、畜生界の生命は、理性や良心を忘れ、自分が生きるためには他者をも害していく弱肉強食の生存競争に終始していく境涯です。また、自分が生きることだけを考え、他を顧みることができない状態とも言えます。

いずれにせよ、目先のことしか見えず、未来を思考できない愚かさの故に、結局は、自己を破壊させ、苦しむのです。

(畜生との表現は古代インドの表現を踏襲したものです。動物であっても例えば盲導犬のように人を助けることを使命として生きる例もあります。また逆に人間であっても、戦争のように他の動物よりも残酷な行爲をする場合もあります) 地獄界・餓鬼界・畜生界の三つは、いずれも苦悩の境涯なので「三惡道」といいます。

④修羅界

しゆらかい

修羅とは、もともとは阿修羅といい、争いを好むインドの神の名です。自分と他者を比較し、常に他者に勝ろうとする「勝他の念」を強くもっているのが修羅界の特徴です。

他人と自分を比べて、自分が優れて他人が劣っていると思う場合は、慢心を起こして他を軽んじます。そして、他者の方が優れていると思う場合でも、他者を尊

敬する心を起こすことができませぬ。また、本当に自分よりも強いものと出会ったときには、卑屈になって諂うのです。自分をいかにも優れたものに見せようと虚像をつくるために、表面上は人格者や善人をよそおい、謙虚なそぶりすら見せることもあります。内面では自分より優れたものに対する妬みと悔しさに満ちています。このように内面と外面が異なり、心に裏表があるのも修羅界の特徴です。

故に、大聖人は「詭曲なるは修羅」と説かれています。「詭曲」とは「詭い」「曲がった」心のことで、「詭」も「曲」も「心が曲がっている」ことです。「詭い」とは、具体的には「自分の本心を見せないで従順をよそおう」ことです。

この修羅界は、貪瞋癡の煩惱にふりまわされる地獄・餓鬼・畜生の三惡道と異なり、自我意識が強い分だけ三惡道を超えているといえます。しかし、根本は苦しみを伴う不幸な境涯なので、三惡道に修羅界を加えて「四惡趣」ともいいます。

⑤ 人界

じんがい

人界は、穏やかで平穏な生命状態にあり、人間らしさを保っている境涯をいいます。大聖人は「平かなるは人」と仰せです。

この人界の特質は、物事の善悪を判断する理性の力が明確に働いていることです。

す。大聖人は「賢きを人と云いはかなきを畜といふ」(1174頁)と言われています。善悪を判別する力を持ち、自己をコントロールできる境涯です。

この人間らしい境涯も、決して努力なしに持続できるものではありません。

実際に、悪縁が多い世間において、人間が「人間らしく生きる」ことは難しい

ものです。それは、絶え間なく向上しようとする自分の努力がなければ不可能です。いわば人界は「自分に勝つ」境涯の第一歩といえます。

また人界の生命は「聖道正器」といわれるように、仏道(聖道)を成ずることが出来る器であるときれています。

人界は悪縁にふれて悪道に墮ちる危険性もある半面、修行に励むことにより四聖への道を進むことができる可能性をもっているからです。

⑥ 天界

てんがい

天界の天とは、インドにおけるもともとの意味は、地上の人間を超えた力を持つ神々のこと、また、それらが住む世界という意味です。インドでは、今世で善い行いをした者は来世に天に生まれると考えられていました。

仏法では、天界を生命の境涯の一つとして、欲望を満たした時に感じる喜びの境涯として位置づけています。大聖人は「喜ぶは天」と仰せです。

欲望といってもさまざまです。睡眠欲

や食欲などの本能的欲望、新しい車や家が欲しいというような物質的欲望、社会で地位や名誉を得たいという社会的欲望、未知の世界を知ったり、新たな芸術を創造したいというような精神的欲望などがあります。それらさまざまな欲望が満たされ、喜びに浸っている境涯が天界です。

しかし、その喜びは永続的なものではありません。時の経過とともに薄らぎ、消えてしまいます。ですから天界は目指すべき真実の幸福境涯とはいえないのです。

六道から四聖へ

以上の地獄界から天界までの六道は、結局、自身の外の条件に左右されています。たまたま欲望が満たされた時は天界の喜びを味わったり、環境が平穏である場合は人界の安らぎを享受できますが、ひとたびそれらの条件が失われた場合には、たちまち地獄界や餓鬼界の苦しみの境涯に転落してしまいます。

⑦ 声聞界

⑧ 縁覚界

声聞界と縁覚界の二つは、仏教のなかでも小乗教の修行で得られる境涯で、この声聞界と縁覚界とをまとめて「二乗」と呼びます。

声聞界とは、本来、仏の教えを聞いて部分的な悟りを獲得した境涯をいいます。これに対して、縁覚界は、さまざまな事象を縁として、自らの力で仏法の部分的な悟りを得た境涯です。

大聖人は「世間の無常は眼前に有り豈人界に二乗界無からんや」(241頁)と仰せです。

無常とは万物が時間の推移とともに変化・生滅することをいいます。自分と世界を客観視し、世間すなわち現実世界にあるものがすべて時とともに変化・生滅するという真理を自覚し、無常のものに執着する心を乗り越えていくのが二乗の境涯です。

私たちも、自分自身を含めて万物が無

常の存在であることを強く感ずることがあります。これを大聖人は人界に具わる二乗界と示されたのです。

この二乗の境涯は、仏教のなかでも小乗教が理想としたもので、二乗の境涯を得た小乗教の聖者は、無常のものに執着する煩惱に苦しみの原因があるとして、煩惱を滅しようとした。しかし、そのために自分自身の心身のすべてを消滅させようという誤った道に入ってしまった。

二乗が得た悟りは、仏の悟りから見れば、あくまでも部分的なものであり、完全なものではありません。しかし、二乗はその低い悟りに安住し、仏の悟りを求めようとしません。師匠である仏の境涯の偉大さは認めていても、自分たちはそこまで到達できると考えず、自らの低い悟りにとどまってしまうのです。また、二乗は自らの悟りのみにとらわ

環境に左右されているという意味で、六道の境涯は本当に自由で主体的な境涯とはいえないのです。

これに対して、その六道の境涯を超え、環境に支配されない主体的な幸福境涯を築いていこうとするのが仏道修行です。

そして仏道修行によって得られる境涯が声聞 縁覚 菩薩 仏の四聖の境涯です。



れ、他に利益を与えようとしないエゴイズムに陥ってしまいます。このように、仏法の部分的な悟りは得たものの、まだ「自分中心」の心が残っているところに二乗の限界があります。

⑨ 菩薩界

菩薩とは、仏の悟りを得ようとして不断の努力をする衆生という意味です。二乗が仏を師匠としていても、自分たちは仏の境涯には至れないとされていたのに対し、菩薩は「師弟不二」の精神で、師匠である仏の境涯に到達しようとする目指していきまます。

また、仏の教えを人々に伝え弘めて人々を救済しようとするのです。

すなわち、菩薩の境涯の特徴は、仏界という最高の境涯を求めていく「求道」とともに、自ら仏道修行の途上で得た利益を、他者に対しても分かち与えていく「利他」の実践があることです。

現実の世間のなかで、人々の苦しみと悲しみに同苦し、抜苦与樂の実践をして、自他どもの幸福を願うのが菩薩の心です。

二乗が「自分中心」の心にとらわれていたのに対して、菩薩界は「人のため」

「法のため」という使命感をもち、行動していく境涯です。

この菩薩界の境涯の根本は「慈悲」です。大聖人は、観心本尊抄で「無願の悪人も猶妻子を慈愛す菩薩界の一分なり」(241頁)と仰せです。他人を顧みることのない悪人ですら自分の妻子を慈愛するように、生命には本来、慈悲が具わっています。その慈悲を現し、生き方の根本にすえるのが菩薩界です。

⑩ 仏界

仏界は、仏が体現した尊極の境涯です。

仏(仏陀)とは覺者の意で、宇宙と生命を貫く根源の法である妙法を覺つた人のことです。具体的にはインドで生まれた釈尊などです。また、さまざまな經典にも種々の仏が説かれています。

日蓮大聖人は、末法の一切衆生を救うために、一個の人間として御自身の生命に仏界の境涯を顕し、一切衆生の成仏の

道を確立された末法の御本仏です。

仏界とは、自身の生命の根源が妙法であると悟ることによって開かれる、広大で福德豊かな境涯です。この境涯を開いた仏は、無上の慈悲と智慧を体現し、その力で一切衆生に自分と等しい仏界の境涯を得させるために戦い続けます。

仏界は、私たちの生命の中にも本来、具わっています。ただ、それを現実の生命に現すことが難しいので、大聖人は人々が仏界の生命を現していくための方途として御本尊を御願願されました。

「日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ……日蓮が・たましひは南無妙法蓮華經に・すぎたるはなし」(1124頁)と仰せのように、御本尊に末法の御本仏・日蓮大聖人の仏界の御生命が顕されているのです。私たちは御本尊を信じて自行化他にわたる唱題に励むときに、胸中の仏界を現すことができます。



オヤマリンドウ

一生成仏

いつしやうじやうぶつ

信心の根本的な目的は、私たちが自身が仏の境涯を得ることです。

御本尊を信受して純真に自行化他の実践に励むならば、どのような人でも必ず一生のうちに成仏の境涯を得ることができるのです。これを「一生成仏」といいます。

日蓮大聖人は「法華経の行者は如説修行せば必ず一生の中に一人も残らず成仏す可し、譬えば春夏田を作るに早晩あれども一年の中には必ず之を納む」(416頁)、通解——法華経の行者は、仏の説いた通りに修行するならば、必ず一生のうちに一人も残らず成仏することができると。譬えば、春、夏に田を作る

仏界の生命と信心との深い関係について大聖人は、観心本尊抄で「末代の凡夫出生して法華経を信ずるは人界に仏界を具足する故なり」(241頁)といわれています。法華経は万人が成仏できることを説く教えですが、その法華経を信ずることができるのは、人間としての自分の生命の中に本来、仏界が具わっているからです。

また、この大聖人の仰せを受けて日寛上人は「法華経を信ずる心強きを名づけて仏界と為す」と述べています。この法華経とは末法の法華経である御

本尊のことで、御本尊を信じて生き抜く「強い信心」そのものが仏界にほかならないということです。

この仏界の境涯を現代的に言うならば、何ものにも侵されることのない「絶対的な幸福境涯」といえましょう。戸田第2代会長は、仏界の境涯について「生きていくこと自体が幸福であるという境涯」と述べています。

また仏界の境涯は、しばしば師子王に譬えられます。どのような状況下でも師子王のように恐れることのない、真の安心立命の境涯であるといえます。

のに、早く実る品種と遅く実る品種の違いがあっても、どちらも一年のうちには必ず収穫できるようなものである」と述べられています。

成仏とは、現在の自分と全く異なった特別な人間になるとか、現実世界を離れた浄土に往生するなどということではありません。大聖人は「成は開く義なり」(753頁)と仰せです。成仏とは、自

身の内に仏の生命を開くことにほかなりません。

また成仏とは、他の世界に行くことではなく、あくまでもこの現実世界においても、なにもものにも崩されない絶対的な幸福境涯を築くことをいうのです。

御書に、「桜梅桃李の己己の当体を改めずして無作三身と開見す」(784頁)、通解——桜、梅、桃、すももなどの、そ

れぞれがその特質を改めることなく、そのままの姿で無作三身の仏として見るのである」と仰せのように、成仏とは、自分自身が本来持っている特質を生かしながら、自身をもっとも充実させていく生き方をする事です（「無作三身」とは真実の仏のことです）。

成仏の境涯とは、生命の全体が浄化され、本来もっている働きを十分に発揮して、さまざまな困難に直面しても動揺しない、力強い境涯になることをいいます。また、成仏とはゴールに到達するということではありません。妙法を受持して、悪を滅し善を生ずる戦いを続けていくその境涯が成仏の境涯なのです。間断なく広宣流布に戦い続ける人こそが仏なのです。



ヘソカズラ

相対的幸福と絶対的幸福

戸田第2代会長は、幸福には「相対的幸福」と「絶対的幸福」があると述べています。

相対的幸福とは、物質的に充足したり、欲望が満ち足りた状態をいいます。しかし、欲望には際限がないし、たとえ、一時は満ち足りたようでも永続性はありません。外の条件が整った場合に成立する幸福なので、条件が崩れた場合には、その幸福も消えてしまいます。

これに対して、絶対的幸福とは、どこにいても、また、何があっても、生きていくこと自体が幸福であるという境涯をいいます。それは外の条件に左右されることのない幸福ですから、絶対的幸福といえます。成仏とは、この絶対的幸福境涯をいいます。

現実世界に住んでいる以上、人生にさまざまな苦難はつきものです。しかし、山登りに譬えていえば、「頑健な体の持ち

主であれば、少々重い荷物を背負っても悠々と坂道を登ることができるよう、自身の生命に絶対的幸福境涯を確立した人は、さまざまな困難が起ったとしても、その困難をバネとして、強い生命力を湧き上がらせ、逆境を悠々と乗り越えていくことができます。

そして頑健な人は、むしろ、山道が険しければ険しいほど、それを克服していく喜びを味わいます。それと同じように、あらゆる困難を乗り越えていく生命力と智慧を身につけた人にとっては、困難が渦巻く現実世界そのものが価値創造の場となるのです。

また、環境に依存する相対的幸福が「死」によって途絶えるのに対し、絶対的幸福である仏の境涯は、「自身法性の大地を生生死死と転ぐり行くなり」（724頁、通解——わが身が、妙法の大地を生生死死とめぐり行くのである）と仰せのように、死をも超えて存続していくのです。

3 立正安国と広宣流布

立正安国

日蓮大聖人の仏法は、各人の生命境涯を革新し、今世のうちに絶対的幸福境涯を開くことを可能にする教えです。

それとともに、各人の生命境涯の革新を通して社会全体の平和を達成することを目指しています。大聖人は、平和実現のための原理を立正安国論のなかで示されました。

「立正安国」とは「正を立て国を安んずる」と読みます。

「立正」とは正法を人々が人生のよりどころとして信受することであり、また、社会的には仏法の生命尊厳の理念が社会に確立されることです。「安国」とは社会の平和・繁栄と人々の生活の安穩を実現することです。

立正安国論における「国」とは一つの主権国家に限らず世界全体に通じ、また、人間が形成している社会体制だけでなく自然環境の国土も含まれます。

大聖人は国について、権力を中心にした統治機構という面とともに、より一歩深く、民衆の生活の基盤としてとらえられています。大聖人が民衆を中心に国をとらえられていたことは立正安国論の御真筆において、国を意味する漢字を書かれる多くの場合に「國構えに民（國）の字を用いられていることにもうかがうことができます。

大聖人は「王は民を親とし」（1554頁）と述べられ、権力者も民衆を根本とすべきであるとされています。また、國王となりながら「民衆の歎き」を知らない者は悪道に墮ちるといわれています。

(36ページ)

立正安国論は、直接的には当時の日本の安国の実現のために著された書ですが、その根底となっている精神は、未来永遠にわたる全世界の平和と人々の幸せを実現することにあります。

また、大聖人が当時の人々の苦悩を解決するため、立正安国論を著し、権力者を諫められたこと自体、仏法を行ずる者はただ自身の成仏を祈って信仰していればよいのではなく、仏法の理念・精神を根本にして、積極的に社会の課題に関わっていくべきことを身をもって示されたものと拝察できます。

社会の問題に目を背けて、宗教・信仰の世界だけに閉じこもる利己的な姿勢は、むしろ大乘仏教において厳しく戒められています。

創価学会が、今日、仏法の理念を根本に、平和・文化・教育・人権などの分野で、地球的課題の解決に取り組んでいるのも「立正安国」の法理に基づく実践にほかなりません。

広宣流布

こうせんるふ

仏の悟りである正法を人々に流布し、万人を仏の境涯に導くことこそが仏法の目標です。それ故に法華経でも「我が滅度の後、後の五百歳の中、閻浮提に広宣流布して、断絶して悪魔・魔民・諸天・竜・夜叉・鳩槃荼等に其の便を得しむること無かれ」(法華経601頁、通解——私へ釈尊が)が入滅した後、末法において、全世界に正法を広宣流布して断絶させず、決して悪魔・魔民・諸天・竜・夜叉・鳩槃荼などの魔物につけ入らせてはならない」と説かれています。

この経文は、「後の五百歳」すなわち末法に妙法を全世界(一閻浮提)に広宣流布していくべきことを述べたものです。

また、法華経では、広宣流布を担う使命を持つ菩薩として「地涌の菩薩」が説かれます(地涌の菩薩とは、釈尊の久遠からの弟子で、大地の底から涌现してきたと説かれる無数の大菩薩です)。

広宣流布こそ大聖人の根本精神

こんほんせいしん

大聖人は、この法華経の経文通り、命に及ぶ幾多の大難を忍ばれて南無妙法蓮華経の大法を弘通されました。

広宣流布について大聖人は次のように仰せられています。

「大願とは法華弘通なり」(736頁)

「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし、日本国の一切衆生の盲目をひらける功德あり、無間地獄の道をふさぎぬ」(329頁)

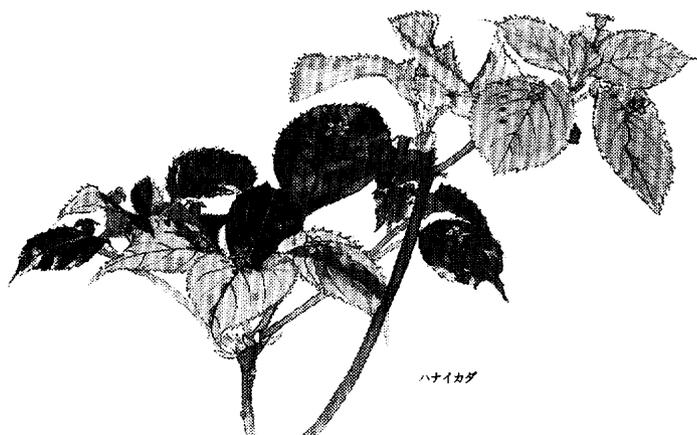
まさに広宣流布こそ日蓮大聖人の根本精神です。

仏の未来記を実現した創価学会

この大聖人の御精神を受け継いで、世界に妙法を弘通し、広宣流布を進めてきた和合僧(仏法実践者の集い)が創価学会です。

「日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか」(1360頁)と仰せのように、大

聖人の御心のままに妙法を弘めてきた創価学会こそ、広宣流布の使命を担う地涌の菩薩の団体にほかなりません。創価学会が日蓮大聖人の御精神を正しく継承する和合僧であるからこそ、世界中に妙法を弘めることができたのです。



4 信 行 学

自身の生命の变革を目指す日蓮大聖人の仏法における修行の基本は、「信・行・学」の三つです。

この三つのうち、「信」は、末法の正法である大聖人の仏法、なかならずその究極である御本尊を信することです。

この「信」こそ、仏道修行の出発点であり、帰着点です。「行」は生命を变革し、開拓していく具体的実践です。「学」は教えを学び求める研さんであり、正しい信心と実践への指針を与え、「行」を助け、「信」をより深いものにさせる力となります。

この三つのどれが欠けても、正しい仏道修行にはなりません。

大聖人は、諸法実相抄で次のように「信・行・学」の在り方を示されています。

「一閻浮提第一の御本尊を信じさせ給へ、あひかまへて・あひかまへて・信心つよく候て三仏の守護をかうむらせ給うべし、行学の二道をはげみ候べし、行学たへなば仏法はあるべからず、我もいたし人をも教化候へ、行学は信心よりをこるべく候、力あらば一文一句なりともかたらせ給うべし」(1361ジベ、通解——世界第一の御本尊を信じなさい。よくよく心して、信心を強く持つて、釈迦仏・多宝仏・十方の諸仏の守護を得ていきなさい。行学の両面の修行を励んでいきなさい。行学が絶えたところに仏法はありません。自分も実践し、人にも教え、導いていきなさい。行学は信心から起るのです。力があるならば、一文一句でも語っていきなさい)

信

「信」は信受ともいいます。仏の教えを信じて受け入れることです。仏の境涯に入るための唯一の道が信なのです。

法華経には、釈尊の弟子のなかで智慧第一といわれた舍利弗も、ただ信受することによってのみ、法華経に説かれた法理を体得できたと言われています。すなわち譬喩品には「汝舍利弗すら 尚お此の経に於いては 信を以て入ることを得たり」(法華経197ジベ)とあります。これを「以信得入」といいます。

生命の実相・宇宙の実相を覚知した仏の偉大な智慧・境涯を自身のものとしていく道は、ただこの「信」による以外にありません。仏の教えを信じて受け入れていった時に、はじめて仏法で説く生命の法理の正しさを理解していくことができます。

末法の御本仏・日蓮大聖人は、御自身

が悟られた宇宙根源の法である南無妙法蓮華経を、御本尊として御図顕されました。すなわち大聖人は、御自身の仏の生命を、そのまま御本尊として御図顕されたのです。

この御本尊こそが、私たちが成仏の境涯を開くための唯一の対境であると、深く信ずることが大聖人の仏法の修行の根本となります。御本尊を信受して唱題に励むとき、御本尊の功力により、成仏の境涯を開いていくことができるのです。

行

「行」とは、御本尊を信じたうえで具体的な実践のことです。

仏法では、私たち自身の生命の内に、仏と等しい命の働きが、本来、厳然と具わっていることを説きます。

そして仏道修行の目的は、まさしくこの自分自身の生命の内に秘められた仏と等しい命の働きを顕現して、絶対的幸福

境涯を得ていくことにあります。

しかし、私たち自身の生命の内に具わった力も、それを現実の人生にあって顕し働かせていくためには、具体的な変革・開拓の作業が必要です。

仏の境涯を自身の生命に顕現するためには、道理に適った実践の持続が必要であり、これが「行」なのです。

この「行」には「自行」「化他」の両面があります。車の両輪のように、どちらが欠けても修行は完成しません。

「自行」とは自分が法の功德を得るために修行することです。「化他」とは他人に功德を受けさせるために仏法を教える実践をいいます。

日蓮大聖人は「末法に入て今日蓮が唱る所の題目は前代に異り自行化他に亘りて南無妙法蓮華経なり」(1022頁)と仰せです。

すなわち、自分が御本尊を信じて題目を唱えるとともに、人にも御本尊の功德を教え、信心を勧め、自行化他にわたる実践が、大聖人の仏法における正

しい仏道修行になるのです。

具体的には、自行とは勤行(読経・唱題)であり、化他とは弘教です。また広宣流布のためのさまざまな実践活動も、化他の修行となります。

学

「学」とは、日蓮大聖人が教え遺された「御書」を拝読することを根本にして、正しい仏法の法理を学ぶことです。

正しい仏法の法理を学ぶことによって、より深く完全な信に立つことができ、また正しい行を行うことができるのです。

正しい法理を学ぶという、この学術の研究がないと、ともすれば、自分勝手な理解に陥ってしまう危険性があり、また誤った教えを説く者にだまされてしまう恐れがあります。

日蓮大聖人は、「返す返す此の書をつねによませて御聴聞あるべし」(1444頁)等と、大聖人が認められた法門を

繰り返して学んでいくよう呼びかけられています。また、大聖人に仏法の法理についてお尋ねした門下に対しては、その求道心を称えられています。

日興上人も、日興遺誠置文で「御書を

生命変革の実践 勤行と弘教

「勤行」とは、御本尊に向かって読経・唱題することをいいます。これが生命変革の具体的な実践の一つです。

日興上人はこの勤行の功德について、「我等この本尊を信受し、南無妙法蓮華経と唱え奉れば、我が身即ち一念三千の本尊、蓮祖聖人なり」と述べています。すなわち、勤行の実践によって、私たちが自身の生命に一念三千の御本尊が顕現し、末法の御本仏・日蓮大聖人と同じ智慧と力が顕れるのです。

大聖人は、勤行を曇った鏡を磨くことに譬えて次のように仰せています。

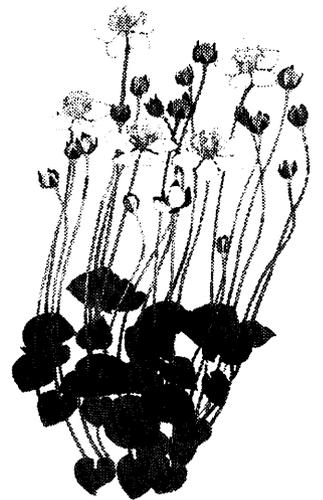
心肝に染め(1618頁)と述べられ、また「学問未練にして名聞名利の大衆は予が末流に叶う可からざる事」(同頁)と、強く教学の研さんを勧められています。

「譬えば闇鏡も磨きぬれば玉と見ゆるが如し、只今も一念無明の迷心は磨かざる鏡なり是を磨かば必ず法性真如の明鏡と成るべし、深く信心を発して日夜朝暮に又懈らず磨くべし何様にしてお磨くべき只南無妙法蓮華経と唱へたてまつる是をみがくとは云うなり」(384頁、通解——たとえば曇つて、ものを映さない鏡も、磨けば玉のように見えるようなものである。今の私たちが凡夫のV無明という根本の迷いに覆われた命は、磨かない鏡のようなものである。これを磨くならば、必ず法性という生命本来の清らかな働きが現れた、輝く鏡のような命になるのである。深く信心を奮い起こして日夜、朝夕に、またおこたることなく自

身の命を磨くべきである。では、どのようにして磨いたらよいのであろうか。ただ南無妙法蓮華経と唱えること、これが磨くということなのである)

この譬えで示されているように、鏡自体は磨く前も磨いた後も同じ鏡であり、別のものに変わるわけではありませんが、働きは全く違ってきます。同じように、私たちが自身も、勤行することによって決して別の人間になるわけではありませんが、生命が浄化され、その働きが大きく違ってくるのです。

また、「弘教」について、大聖人は、諸法実相抄で「我もいたし人をも教化候へ……力あらば一文一句なりともかたらせ給うべし」(1361頁)と仰せ



コウメザツウ

5 難を乗り越える信心

一生成仏を目指す私たちは、生涯にわたって信心を貫いていくことが大事です。しかし、信心を持続するなかには、必ずさまざまな障魔が現れてくるので、このことを知って、いかなる障魔に

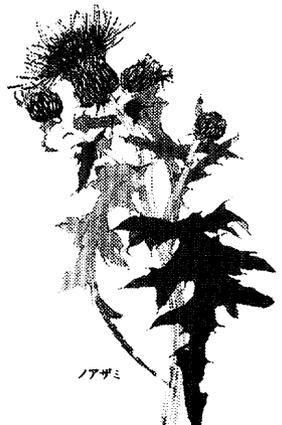
も崩されない自身の信心を確立していくことが肝要です。では、正法を持った人はなぜ難にあうのでしょうか。まず、正法を信じ行じて成仏の境涯を

目指すということは、自身の生命を大変革させていく戦いです。どんな変革にあつてもそうですが、仏道修行においても、その変革を起こさせまいとする働きが、自身の生命自体や、あるいは周囲の人間関係の中に生ずるのです。ちょうど、船が進むときに波の抵抗が起こるようなものです。成仏を目指す仏道修行の途上に起こる、このような障害に「三障四魔」があ

られています。また寂日房御書では「かかる者の弟子檀那とならん人人は宿縁ふかしと申うて日蓮と同じく法華経を弘むべきなり」(903頁)と言われています。自分自身が御本尊を信じて勤行するだけではなく、一文一句でも仏法のことを語っていくことによって、自身の命に地涌の菩薩の境涯を呼び起こし、大聖人の真の弟子となっていくことができます。

勤行とともに、この弘教の実践が、自身の生命変革への大きな力となっていくのです。また、法華経には「能く竊かに一人の爲めにも、法華経の乃至一句を説かば、当に知るべし、是の人は則ち如来の使にして、如来に遣わされて、如来の事を言はず」(法華経357頁)とあります。この文を踏まえて、大聖人は「法華経を一字一句も唱え又人にも語り申さんもの

は教主釈尊の御使なり」(1121頁)と仰せです。すなわち、私たちの化他行は、仏の使(如来の使)として、仏の振る舞い(如来の事)を実践する行為なのです。



ります。

また、法華經には、末法濁悪の世に法華經を弘める法華經の行者には「三類の強敵」が出現することが説かれていま

す。これは釈尊入滅後の悪世において、一切衆生の成仏を願って法華經を广泛宣传しようとする実践のある所に起こってくる迫害です。したがって、この三類の強敵の出現は、真実の法華經の行者であることの証拠となるのです。

信心の途上でこうした難を受ける意味について、個人の宿業という観点からとらえれば、難は「宿命転換」への絶好の機会となります。

正法を行ずる功德によって、自身の生命に刻まれた悪い業をすべて現世であらわし、消していくことができるのです。

三障四魔

さんしょうしよま

兄弟抄には次のように述べられています。

「第五の巻に云く、『行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る乃至随う

べからず畏る可らず之に随えば將に人をして悪道に向わしむ之を畏れば正法を修することを妨ぐ』等云云、此の釈は日蓮が

身に当るのみならず門家の明鏡なり謹んで習い伝えて未来の資糧とせよ」(1087p、通解——天台の摩訶止観の第5巻には次のように述べられている。「修

行が進み、仏法の理解が深まってくる」と、三障四魔が紛らわしく入り乱れて競い起こってくる。……これに随ってはない。恐れてもならない。これに随つ

たならば三障四魔は人を悪道に向かわせる。これを恐れたならば仏道修行を妨げられる」。この釈の文は日蓮の身に当て

はまるだけではなく、わが門流の明鏡である。謹んで習い伝え、未来にわたって信心の糧とすべきである」)

このように、正法を信じ行ずるときに、これを阻もうとして起こる働きに「三障四魔」、すなわち、三つの障りと四つの魔があります。

三障四魔の内容について、日蓮大聖人は次のように説かれています。

「三障と申すは煩惱障・業障・報障なり、煩惱障と申すは貪瞋癡等によりて障礙出来すべし、業障と申すは妻子等によりて障礙出来すべし、報障と申すは国主父母等によりて障礙出来すべし、又四魔の中に天子魔と申すも是くの如し」(1088p)と。

三障

さんしょう

まず、三障の「障」とは、障り、妨げというところで、信心修行の実践を、その途上に立ちただかつて妨げる働きをいいます。

これに、煩惱障、業障、報障、の三つがあり、煩惱障とは、貪り、瞋り、癡などの自身の煩惱が信心修行の妨げとなることをいいます。

業障とは、悪業(悪い行い。仏法では五逆罪や十悪業などが挙げられる)が信仰や仏道修行を妨げるものです。この御文では具体的に妻子等の身近な存在によ

つて起こるとされています。
報障とは、悪の報いとして受けた悪い境涯が仏道修行の障りとなることをいいます。この御文では国主・父母等、自分が従わなければならない存在によって起こるとされています。

四魔

次に四魔の「魔」とは、能奪命者、殺者、破壊などと訳されるように、信心修行者の生命の内側から、妙法の当体としての生命の輝きを奪う働きをいいます。
四魔とは、陰魔、煩惱魔、死魔、天子魔の四つをいいます。
陰魔とは、信心修行者の五陰（肉体や

賢者はよるこび愚者は退く

以上のように、私たちの仏道修行の途上においては、さまざまの障害や苦難が競い起こってきます。ここで注意しなければならぬことは、貪瞋癡などの煩惱や、妻や夫、子、父母、五陰、死についても、それら自体は初めから障魔であるというのではなく、これに引きずられる信心修行者の弱い生命にとって三障四魔とあらわれる、ということなのです。
積尊も、さまざまに起こる心の迷いを魔の働きであると見抜いて悟りました。

魔を打ち破るものは、何事にも紛動されない強い信心です。

大聖人は「しをのひると・みつと月の出づると・いと・夏と秋と冬と春とのさかひには必ず相違する事あり凡夫の仏になる又かくのごとし、必ず三障四魔と申す障いできたれば賢者はよるこび愚者は退くこれなり」（1091頁）と仰せられています。

三障四魔が出現した時こそ、成仏への大きな前進の時と確信して、むしろこれを喜ぶ賢者の信心で、乗り越えていくことが大切なのです。

心の働き）の活動の不調和が信心修行の妨げとなることであり、煩惱魔とは貪、瞋、癡などの煩惱が起こって信心を破壊することです。

死魔とは、修行者の生命を断つことによつて修行を妨げようとする魔です。また、他の修行者等の死によつて信心に疑いを生ずることも死魔に負けた姿と



エンピセンノウ

いえませす。

最後に天子魔とは、他化自在天子魔の略で、他化自在天王（第六天の魔王）による働きであり、最も本源的な魔です。
大聖人は「元品の無明は第六天の魔王と頭われたり」（997頁）と仰せです。
すなわち、この魔は、生命の根本的な迷いから起こるものであり、権力者等の

身に入るなど、あらゆる力をもつて修行者に迫害を加えてきます。

三類の強敵

三類の強敵

法華經勸持品第13の二十行の偈(詩)の形(経文)のなかには、末法に法華經を弘通する者に三種類の強い迫害者、すなわち三類の強敵が出現することが示されています。

その強敵のそれぞれを妙樂大師(8世紀の人。中国天台宗の中興の祖)は、第1に俗衆増上慢、第2に道門増上慢、第3に僭聖増上慢(僭聖増上慢と書く)、と名づけています。増上慢とは、いまだ悟っていないのに悟りを得た等の種々の慢心を起こし、他の人よりも勝れていると思う人をいいます。

第1の俗衆増上慢は、法華經の行者を迫害する、仏法に無智な衆生をいいます。法華經の行者に対して、悪口罵詈雑言を浴びせ、刀杖で危害を加えることもあると説かれています。

第2の道門増上慢は、法華經の行者を迫害する比丘(僧侶)を指します。邪智で心が曲がっているために、真実の仏法を究めていないのに、自分の考えに執着し、自身が偉いと思い、正法を持つた人を迫害してくるのです。

第3の僭聖増上慢は、人々から聖者のように仰がれている高僧で、ふだんは世間から離れたところに住み、自分の利益のみを貪り、悪心を抱いて、法華經の行者を陥れようとします。

その手口は、国王や大臣等に向かつて、法華經の行者を邪見の者であるなどと譏言し、権力者を動かして弾圧を加えるように仕向けるのです。

悪鬼が身に入ったこれらの迫害者たちによって、末法に法華經を持つ人は、何回も所を追われたりすると説かれています。

妙樂大師は、このうち、第1と第2は堪え忍ぶことができても、第3の僭聖増上慢は最も悪質であると説いています。なぜなら、僭聖増上慢の正体はな

なか見破り難いからです。この三類の強敵は、末法に法華經を弘通する時、必ず現れてくるものです。

日蓮大聖人は、現実にこの三類の強敵を引き起こしたことをもって御自身が末法の法華經の行者であることの証明とされたのです。

宿命転換・転運軽受

人生のなかで出あう悩みや苦難はさまざまです。そのなかには今世の自分自身の行動や判断が原因になって現れるものもあります。なかには、今世に原因を見いだすことができないものもあります。

人生には、自分は何も悪いことをしていないのに、なぜこのような苦しみを受けなければならぬのか、と思うような苦悩があります。

仏法では、このような苦悩は、過去世において自分が行った行爲(宿業)の結果が今世に現れたものであるととらえます。

仏法では、生命は今世だけのものではなく、過去世・現在世・未来世の三世にわたるものであり、過去の行為が因となって現在の結果として現れ、現在の行為が因となって未来の果をもたらすと見るのです。

日蓮大聖人は、このような三世を貫く因果について、佐渡御書で次のように述べられています。

「高い山に登った者が必ず下りてくるように、自分が人を軽んずればかえって自分が人から軽んじられる。容姿の優れた人を誘えば醜い姿となる報いを得、人の衣服や食べ物等を奪えば必ず餓鬼になる。……これらは常の因果の定まった法である」(通解、960頁)

この御文に説かれているのは、悪因があれば悪果(悪い結果)がある、善因があれば善果があると、仏教一般で言われる因果です。これに対して大聖人は、御自身が人から軽んじられる等の報いを受けているのは、この「常の因果」によるものではなく、過去において法華

経を誹謗した故であると述べられています。

これは、妙法に対する違背・不信が根本的な罪業であるということとを教えられているのです。したがって、妙法を受持し、行じていくならば、その信心・実践の力で、妙法への不信、違背の心を打ち破ることができ、それに伴ってあらゆる宿業も今世において打ち消していけることになります。

これが「宿命転換」「罪障消滅」の法理です。

仏法では、単に宿業を耐えなければならぬとするものではありません。過去の宿業は現世の苦悩として現れますが、現世に妙法を行じて各自の生命に仏界の境涯を顕すことにより、苦しみの因となった罪業を滅することができる、と説くのです。

大聖人は普賢經の文を引いて、自身の生命に降り積もった罪障も、南無妙法蓮華經の題目の慧日にあえば、霜や露のようにならぬうちに消し去ることができ

きると言われています(786頁)。御本尊を信受して自行化他にわたる唱題に励み、自身の胸中に太陽のような仏界の命が昇れば、さまざまな罪業も霜露のように消えていくのです。

また、過去から積み重ねてきた宿業の報いを今世に軽く受けて滅することを「転重軽受(重きを転じて軽く受く)」といいます。本来、重い罪業は、今世だけでなく未来にわたってその報いを受けなければなりません。が、現世に正法を信じ、修行に励むことによって、その功德の力により、その重い報いを現世に軽く受け、すべて消滅させていくことができます。

この転重軽受の法理について、日蓮大聖人は「涅槃經に転重軽受と申す法門あり、先業の重き今生につきずして未来に地獄の苦を受くべきが今生にかかる重きに値い候へば地獄の苦みばつときへて死に候へば人天・三乘・一乗の益をうる事の候」(1000頁)と仰せられています。

1 創価学会の歴史

広宣流布こそ日蓮大聖人の大願であり、根本精神です。そして、その大聖人の御精神を継承して、広宣流布の使命を担って出現した教団が創価学会です。創価学会の実践によって、今日、世界186カ国・地域に大聖人の仏法が広まりました。まさに、創価学会こそ日蓮大聖人の御遺命である世界広宣流布を実現している仏意仏勅の教団なのです。

万人が平等に成仏の境地を得ていくことが法華経の根本教義であり、日蓮大聖人の仏法の真髄です。その哲学は、あらゆる人が仏性を具えていることを明らかにした、生命尊厳の哲学、人間主義の思想といえます。創価学会は、法華経、また日蓮大聖人

が示された人間主義の思想を現代に実践し、世界平和の実現と人類文化の向上を目的として、さまざまな活動を展開しています。

ここでは創価学会の歴史を、三代会長の事跡を中心に概説します。

牧口常三郎 初代会長

初代会長牧口常三郎先生は明治4年（1871年）6月6日、現在の新潟県柏崎市荒浜で生まれました。少年期に、単身で北海道にわたり、働きながら独学で学問に励み、18歳で北海道尋常師範学校（現在の北海道教育大学）に入学。師範学校卒業後は、附属小学校の訓導（教諭）に迎えられました。



ウズノキ

師範学校在学中から地理学に関心をもち、著手した『地理学書の執筆に着手し、明治34年、その出版を目指して上京しました。そして同36年（1903年）、最初の著書である『人生地理学』を發刊しました。その後、初等教育の現場に戻り、東京各地の小学校の校長を歴任しました。牧口先生は教育の実践を重ね、思索を

十字御書

法華初心成仏抄

四乘金輪殿
御返事

日蓮大聖人の
御生涯

十戒と
一生成仏

立正安楽土と
広宣流布

信行学

難を乗り越える
信心

創価学会の歴史

日顕宗破折

深めていくなかで、人生の根本となる真実の宗教を求めていました。そのなかで、昭和3年（1928年）、日蓮大聖人の仏法と出あい、大聖人の仏法を正しく継承した日興上人の流れをくむ日蓮正宗に入信しました。また、牧口先生と師弟の絆を結んでいた戸田先生もこの年、牧口先生に従って日蓮大聖人の仏法に帰依しました。

牧口先生は教育学についての思索を重ね、昭和5年（1930年）11月18日、その成果を『創価教育学体系』第1巻として発刊しました。その奥付には、著者である牧口先生、発行兼印刷者である戸田先生の名前とともに、発行所として創価学会の前身となる「創価教育学会」の名が記されています。そこで、同書が発行された昭和5年（1930年）11月18日が創価学会の創立記念日とされています。

「創価」とは「価値創造」の意味です。なお『創価教育学体系』の第2巻には、牧口先生の「利・善・美」の価値体系を示した「価値論」が収められています。

牧口先生、戸田先生の師弟から始まった創価教育学会は当初、創価教育學説に共鳴する教育者の団体として始まりましたが、やがて教育者以外の人々も加わるようになり、日蓮大聖人の仏法を実践する在家の宗教団体となっていきました。創価教育学会は、日蓮正宗の在家信徒団体でしたが、従来の講（僧侶の指導のもと末寺に所属する信徒団体）とは別の在り方をとってきました。会の運営も會員の信心指導も、僧侶に依存することなく学会独自で行っていました。学会は当初から、従来の宗門の枠を超えた独自の在家団体だったのです。地方折伏や座談会も活発に行われ、創価教育学会は順調に発展していききました。全国の會員は約3000人に達したといわれます。しかし、軍国主義に傾斜し、戦争への道をひた走る政府は、国内の思想統制を強化し、学会の座談会なども思想犯の摘発を任務とする特高（特別高等警察）の監視下で行われるようになりました。

昭和18年6月、学会は権力の迫害を恐れた宗門から「神札を受けるように」と申し渡されました。しかし、学会は日蓮大聖人が示された謗法嚴戒の教えを貫き、神札の受け取りを拒否しました。同年7月6日、牧口先生は地方折伏で訪れていた伊豆・下田で逮捕されました。同日、東京でも戸田先生（当時、理事長）が逮捕され、最終的に幹部の逮捕者は21人に上りました。不敬罪と治安維持法違反容疑を理由としたものでした。厳しい取り調べのなかで、最後まで信心



ヤマボウシ

を貫き通したのには牧口先生と戸田先生だ
けでした。

牧口先生は取り調べに当たった検事や
判事にも日蓮大聖人の仏法の教義を説き
ました。そして、昭和19年(1944
年)11月18日、老衰と栄養失調のため、
東京拘留所内で逝去しました。牧口先生
の死は、権力の弾圧に屈せず最後まで仏
法の正義を貫いた尊い殉教でした。

戸田城聖 第2代会長

第2代会長戸田城聖先生は、明治33年
(1900年)2月11日、現在の石川県
加賀市塩屋町で生まれました。明治35年
ごろ、一家で北海道厚田郡厚田村に移住
しました。尋常小学校高等科を卒業後、
働きながら独学で小学校准教員資格を
取得、大正7年(1918年)6月、夕
張の小学校准訓導として教育者の道を歩
み始めました。

それから1年半ほどしたころ、人生の
師を求めていた戸田先生は、東京で牧口

先生と出会います。そして師弟の絆を結
び、大正9年(1920年)春、牧口先
生が校長を務める小学校の教員となりま
す。戸田先生は後に教職を辞し、牧口
先生の教育理念を自由に実践するため
に、私塾・時習学館を開設しました。

昭和3年(1928年)には戸田先生
は、牧口先生に続いて日蓮大聖人の仏法
の実践に踏み切りました。また、出版な
どの事業も行い、牧口先生の『創価教
育学体系』の出版を支え、師と二人して
創価教育学会を創立しました。

軍部政府が宗教団体への統制を強め
ていくなか、昭和18年7月6日、逮捕さ
れましたが、牧口先生とともに最後まで
信心を貫き通したのです。

戸田先生は獄中で唱題に励むとともに
法華経を読み、思索していききました。そ
のなかで「仏とは生命である」との悟達
を得ました。さらに唱題と思索を重ねて
いったとき、戸田先生は自身がまさに地
涌の菩薩として法華経に説かれる虚空会
の儀式に参加しているという体験をし、

「われ地涌の菩薩なり」との確信を得た
のです。昭和19年11月のことです。戸田
先生のこれらの獄中の悟達が戦後の創価
学会発展の原点となりました。

昭和20年(1945年)7月3日、2
年の獄中生活を耐え抜いて出獄した戸田
先生は、直ちに学会の再建に着手しまし
ました。昭和21年初頭から法華経講義を開
始。会の名称を「創価学会」に改め、座
談会や地方折伏も再開しました。まもな
く学会の勢力は戦前の状態まで回復し、
昭和24年7月には新たな機関誌として
「大白蓮華」が誕生しました。その創刊
号に戸田先生は論文「生命論」を執筆し
ました。

昭和24年後半から、戸田先生の事業が
苦境に陥り、翌25年秋、先生は学会の理
事長を辞任します。この窮地にあつて、
戸田先生を支えたのが第3代会長となる
池田先生です。

そして昭和26年(1951年)には戸
田先生を会長に推戴しようとする動きが
盛り上がり、昭和26年5月3日に戸田先

十字御書
法華初心成仏抄
御返事
日蓮大聖人の
一生成仏
立正安穏と
広宣流布
信行学
難を乗り越える
創価学会の歴史
日蓮宗破折
信心

生は第2代会長に就任。75万世帯の折伏を達成することを宣言しました。そのときから目覚ましい勢いで折伏・弘教が進められていったのです。

会長就任直前の4月20日には機関紙「聖教新聞」が創刊され、戸田先生はその創刊号から、小説『人間革命』を執筆しました。

「人間革命」とは、日蓮大聖人の仏法の実践によって、各自が自身の生命境涯を変革していくことを意味しています。戸田先生は、生命論を基盤とする人間革命の理念を掲げ、日蓮大聖人の仏法を現代に蘇生させたのです。

また、戸田先生は会長就任後、直ちに婦人部、男子部、女子部などを相次いで結成し、広布拡大の布陣を整えていきま

した。次に戸田先生は御書全集の発刊に取り組みました。他宗派から出されていたそれまでの御書は不完全だったからです。戸田先生は、宗門の碩学・日亨上人に編纂を依頼し、昭和27年（1952年）4

月の立宗700年の節目に『日蓮大聖人御書全集』を発刊しました。これによって、御書根本の精神が学会全体に確立されていきました。

同年8月、創価学会は宗教法人としての認証を受けました。また、翌年には寺院の建立・寄進を開始するなど、宗門の外護に努めます。

学会は日蓮大聖人の「立正安国」の精神を踏まえて、腐敗した政治を浄化し、民衆の手に政治を取り戻すために、昭和30年4月の統一地方選挙で初めて独自に推薦する候補を立てました。翌31年7月の参議院議員選挙でも3人の議員が誕生しました。このことから創価学会は社会的に影響力を持つ団体として注目されるようになり、戸田先生は昭和32年（1957年）9月、創価学会の平和運動の基調となる「原水爆禁止宣言」を発表しました。

昭和32年12月には75万世帯を達成、翌33年3月には学会が大石寺に建立寄進した大講堂が完成しました。3月16日には

全国から参集した青年部員60000人に対して広宣流布の一切を託す儀式が行われました。そして昭和33年（1958年）4月2日、戸田先生は一切の願業を成就して逝去しました。享年58歳でした。戸田先生は獄中の悟達を原点として学会を再建し、広宣流布の揺るがぬ基盤を築いたのでした。

池田大作 第3代会長

第3代会長（現・名誉会長）池田大作先生は、昭和3年（1928年）1月2日、現在の東京都大田区大森北で生まれました。

空襲の被害を受けたことや、長兄が戦死するなどの体験から戦争の悲惨さを痛感。戦争がアジアの民衆を苦しめているとの長兄の言葉や、長兄を失った母の悲しみを通して戦争の悪を実感したので、戦後は文学や哲学の書を学びながら、確かな人生観を模索していました。昭和22年8月14日、初めて創価学会の

座談会に出席し、そこで生涯の師となる戸田先生と出会いました。戸田先生的人格に感銘を受け、昭和22年8月24日、創価学会に入会しました。その後、大世学院（東京富士大学短期大学の前身）夜間部に学びながら戸田先生による法華経講義の受講生となり、仏法の研さんを深めました。昭和24年1月、戸田先生が経営する出版社に入社。少年雑誌の編集に携わりました。戸田先生の事業が苦境に陥った時も池田先生は戸田先生を公私ともに全力で支えました。

戸田先生が昭和26年に会長に就任すると、池田先生は翌27年1月には蒲田支部の支部幹事となり、2月には支部で201世帯の弘教を達成。当時の弘教の壁を破ったのです。これが契機となって、学会全体の弘教が加速度的に進んでいくようになりました。

昭和28年1月には男子第一部隊長に、4月には兼任で文京支部長代理に就任。さらに29年3月には青年部の室長に就任し、学会全体の活動を企画・推進する

重責を担いました。

昭和31年、池田先生は関西で折伏を積極的に進進し、5月には大阪支部が11111世帯の弘教を達成しました。また、池田先生が支援活動の責任者となつた同年7月の参議院議員選挙では大阪地方区で奇跡的な勝利を勝ち取りました。

当時、巻き起こっていた学会への不当な圧迫にも池田先生は、学会員を守るために果敢に戦いました。昭和32年6月に北海道の夕張炭労が信教の自由をふみにじり、学会員を圧迫する動きをみせていることに対しても、直ちに現地へ赴き、炭労に断固抗議する姿勢を明確に示し、事件の解決に奮闘しました（夕張炭労事件）。

その直後の7月3日、大阪府警に不当逮捕されました（大阪事件）。これは同年4月に行われた参議院の補欠選挙で選挙違反者が出たことに関連して、池田先生に事件の首謀者としての罪を着せようとしたものでした。この容疑については

昭和37年1月、判決が下り、無罪が確定しました。

昭和33年の戸田先生の逝去後は、学会の広報推進の実質的な中心者となり、昭和35年（1960年）5月3日に第3代会長に就任しました。

同年10月2日には南北アメリカへ出発。世界広布の第一歩を踏み出しました。翌36年1月には香港、インドなどア



ヤマモモ

シアを初訪問。

また、仏法を基調とした平和・文化・

教育の運動を大きく展開していきまし

た。池田先生の提案で教育部、学術部、

芸術部が結成され、東洋学術研究所

(現・東洋哲学研究所)や民主音楽協会

(民音)が誕生し、多彩な教育・文化運

動が展開されていきました。昭和39年

には公明党が結成され、学会は同党の支持

団体として支援していくことになりました。

750万世帯を達成した昭和45年

には学会と党との機構的分離を明確にし

ました。

それと前後して池田先生は、昭和40

年から聖教新聞に小説『人間革命』を執

筆。創価学会の歴史と精神を書き留めま

した。その執筆活動は現在の小説『新・

人間革命』に続いています。

また、牧口先生、戸田先生の教育理念

の実現に取り組み、東京・小平市に創価

中学・高校(昭和43年開校)、東京・八

王子市に創価大学(昭和46年開学)、大

阪・交野市に創価女子中学・高校(昭和

48年開校。現在は関西創価中学・高校)を

創立するなど、幼稚園、小学校から大学院

までの「創価教育」の学舎を作りました。

昭和47年、池田先生はイギリスの世界

的歴史家アーノルド・トインビー博士と

対談。このころから世界の識者との対話

による「平和・文化・教育の交流」が本

格的に始まっています。

そして昭和50年(1975年)1月26

日には世界51カ国・地域の代表がグアム

島に集まって創価学会インタナショナル

(SGI)が結成され、池田先生がSGI

I会長に就任しました。国内においては

昭和54年4月、池田先生は創価学会の会

長を退き、名誉会長に就任しました。

昭和58年から、1月26日の「SGIの

日」を記念して池田先生は、毎年「平和

提言」を発表。その提言は世界から注

目されています。

学会が日本及び海外で推進してきた各

種展示などの文化・平和運動も広く定

着し、世界で高い評価を受けるようにな

池田先生と海外の識者との対談も広が

り、これまで30数冊に及ぶ対談集が発刊

されています。世界の大学や学術機関で

の講演も30回以上になります。

平成7年(1995年)にはSGIの

人間主義の理念を明確にした「SGI

憲章」が制定され、平成8年(1999

年)には戸田記念国際平和研究所が発

足しました。さらに平成13年(2001

年)にはアメリカ創価大学オレンジ郡キ

ャンパスが開学しました。

現在、このように、仏法を基調にした



ユウスゲ

平和・文化・教育の運動が世界的に広がりつつあります。こうしたSGIの運動に対して、世界からは、牧口先生、戸田先生、池田先生の名前が冠された、公園や通りなどが各地で誕生し、池田先生に140を超える名誉博士、名誉教授の称号が授与されるなど、称賛と顕彰が相次いでいます。

その間、平成3年(1991年)には日蓮正宗宗門が創価学会を「破門」するという暴挙がありました。学会はその暴挙を物ともせず乗り越え、日本のみならず世界各国においてもますます弘教が進んでいます。今日、世界では186カ国・地域で学会員が喜々として日蓮大聖人の仏法を実践しています。各国のSGIでは仏法の人間主義の精神を基調に地道な社会貢献に取り組んでおり、各種展示など地域社会に根ざした活動を通して、大きな信頼と称賛を受けています。

創価学会の実践によって、日蓮大聖人の仏法は、いまや人類全体を照らす希望の光となっています。

2 日顕宗破折

① 宗門問題の経過

創価学会は創立以来、日蓮正宗宗門の外護に努めてきました。戦後、宗門が経済的に疲弊していた時から宗門を守り、350以上の寺院を建立して宗門に寄進してきたのです。広布の大願に生きる創価学会と、僧侶

の権威を保とうとする宗門との間には時に摩擦が生ずることもありましたが、学会は僧俗和合を願って事態の收拾に努力し、乗り越えてきました。

しかし、平成2年(1990年)、法主日顕は信徒蔑視の体質をあらわにし、学会を切り捨てて会員信徒を宗門に隷属させるために、「創価学会分離作戦」(C

作戦)という陰謀を企て、実行に移したのです。すなわち、同年12月、宗門は宗規を一方的に変更し、池田名誉会長をはじめ学会幹部に対し、それまで信徒の指導を託して任命してきた法華講総講師・大講師の役職の罷免を通告してきました。学会は話し合いによる解決を求めましたが、宗門は話し合いを拒否。学会員に対して御本尊の授与を停止し、平成3年(1991年)11月には一方的に学会を「破門」とするという暴挙に出たので

十字御書

法華初心成仏抄

四采金盃殿
御返事

日蓮大聖人の
御生涯

十界と
一生成仏

立正安國と
広宣流布

信心学

難を乗り越える
信心

創価学会の歴史

日顕宗破折



クマヤナギ

す。

学会は、平成5年に日寛上人書写の御本尊を御形木御本尊として全世界の会員に授与していくことを決定。日蓮大聖人直結の広宣流布の教団として前進していくことになりました。

それ以来、創価学会が年々、全世界で隆昌しているのに対し、宗門は衰退の一途をたどっており、その正邪は事実の上でますます明らかになっています。

② 日顕宗の大罪と邪義

① 広布破壊の策謀

平成3年11月、宗門は学会に「破門通告書」を送ってきました。そこには御書の引用もなく、学会を破門する教義上の根拠も全く示されていませんでした。単に「学会が宗門に服従しないから」という権威的・感情的な主張が繰り返されてきたに過ぎません。

「大願とは法華弘通なり」（736頁）、

「広宣流布の大願」（1337頁）と仰せ

のように、広宣流布は日蓮大聖人の御遺命です。だからこそ、創価学会は、創立以来、広宣流布を目指して折伏・弘教の実践に努め、日本のみならず全世界に大聖人の仏法を弘通してきたのです。

その創価学会の破壊を企てるといふことは広宣流布破壊の大謗法であり、一切衆生の救済を旨とされた日蓮大聖人の御心に背く大罪です。

② 法主信仰の邪義

日顕宗（現在の日蓮正宗）が終始、主張しているのは「法主は絶対であるから、ともかく法主に従え」という「法主絶対論」「法主信仰」です。

法主が絶対であるなどという教義は、大聖人の御書にも日興上人の御教示にも一切なく、完全に大聖人の教えから逸脱した「邪義」です。

日興上人は日興遺誠置文で「時の眞首為りと雖も仏法に相違して己義を構えば

之を用うべからざる事」(1618頁)と、仏法に背いた法主を用いてはならないと戒められています。この戒め自体が法主絶対論を否定しています。

③ 誤った血脈観

日顕宗では前の法主から相承を受けるだけで仏の内証の悟り、法体が、次の法主に伝えられるという神秘的な血脈観を主張しています。

しかし、このような血脈観も日蓮大聖人や日興上人とは全く関係のない「邪義」に過ぎません。

大聖人が生死一大事血脈抄で「日本国の一切衆生に法華経を信ぜしめて仏に成る血脈を継がしめん」(1337頁)と仰せのように、本来、血脈とは万人に開かれたものであり、一部の人だけが独占するものではありません。

同抄で「信心の血脈なくば法華経を持つとも無益なり」(1338頁)と仰せのように、血脈の本質は信心であり、

血脈とは正しい信心の異名にほかなりません。

日顕宗のように大聖人に違背しているものは信心の血脈をなくしたものであり、たとえ御本尊を拜しても功德が現れることはないのです。

④ 化儀の悪用

日顕宗の大罪の一つとして、葬儀、法要、戒名、塔婆などの化儀を悪用し、佛法を金儲けの道具にしてきたことが挙げられます。

現在、宗門が行っているような僧侶による葬儀、法要、戒名などの化儀は、大聖人御自身が定められたものではなく、後の時代に作られたものに過ぎません。宗門は僧侶による葬儀が成仏のために不可欠であるなどと主張していますが、そのようなことを大聖人は一切言われていません。

むしろ、「過去の慈父尊靈は存生に南無妙法蓮華経と唱へしかば即身成仏の人

なり」(1423頁)等と仰せのように、各人の成仏は生前の信心・実践によることを強調されています。大聖人の御教示を無視して、僧侶による葬儀が成仏のために不可欠である、などと言うこと自体、大聖人の仏法を歪める大罪となるのです。

⑤ 僧俗差別

日顕宗は、「僧侶が上で在家は下」僧侶が師で在家は弟子」などと主張し、僧侶と在家を露骨に差別しています。

しかし、日蓮大聖人、日興上人は「僧侶だから師匠、在家だから弟子」などという固定的な関係を言われたことはありません。

むしろ、「此の世の中の男女僧尼は嫌うべからず法華経を持たせ給う人は一切衆生のしうとこそ仏は御らん候らめ」(1134頁)と僧俗平等こそ本来の僧俗関係であることを示されています。

日顕宗が僧俗を差別していることは、



⑤ ゲンペイツツリフネソウ

一切衆生を平等に救済することを目指した仏教の本質を見失ったものといえます。

⑥ 腐敗墮落

大聖人は僧侶の在り方について「但正直にして少欲知足たらん僧こそ真実の僧なるべけれ」(1056頁)と、質素な振舞いであるべきことを教示されています。

しかし、日頭はじめ日頭宗の悪僧の事態は腐敗墮落を極め、大聖人の御教示とは全く逆のものになっています。

日頭が高級温泉旅館での豪遊を繰り返していたことは有名ですが、末寺住職なども同様です。まさに日頭宗は仏法を「食いもの」にする存在になっているのです。

大聖人は、こうした仏法利用の悪僧について「法師の皮を著たる畜生」(1386頁)、「食法がき」(1111頁)と厳しく破折されています。

仏法を破壊しようとする者と戦い、呵責していくことは仏法者としての最大の責務です。仏法破壊の悪を放置していることは、結果として、その悪行に手を貸す大罪となるからです。また、悪を打ち破っていく戦い自体が、個人の成仏の境涯を開く実践となるのです。

私たちは、日頭宗の悪を断固、打ち破り、更に世界広布の大きな流れを開いていきましよう。



ウスハサイシン

広布の記念日と行事		今月の歴史	暦
1金			
2土			
3日		横浜戸田平和記念館が開館(1979年 昭和54年)	
4月			
5火			
6水		池田名誉会長、小説「新・人間革命」の執筆を始める(1993年 平成5年)	
7木			
8金		池田SGI会長が「国連平和賞」受賞(1983年 昭和58年)	立秋
9土			
10日			
11月			
12火	教育原点の日		
13水			
14木	伸一会の日	若き日の池田名誉会長、初めて大阪を訪問=19日まで(1952年 昭和27年)	
15金	世界平和祈念戦没者追善勤行法要 諸精霊追善勤行法要 (方面・地域によって 変わる場合があります)		
16土		「札幌・夏の陣」(地方夏季折伏)始まる=25日まで(1955年 昭和30年)	
17日			
18月			
19火			
20水			
21木			
22金			
23土			処暑
24日	第3代会長入信記念日 壮年部の日	アメリカ創価大学(オレンジ郡キャンパス)が第1回入学式 (2001年 平成13年)	
25月			
26火			
27水			
28木		池田室長、東京・葛飾総ブロック長に就任(1957年 昭和32年)	
29金	国際部の日		
30土			
31日	学生部の日		

夏季友好期間 (7/26から8/17まで)
(方面・地域によって変わる場合があります)

座談会の週
(方面・地域によって変わる場合があります)

未来部躍進月間 (7/20から8/31まで)
(方面・地域によって変わる場合があります)

「一兵卒」となって大闘争を開始

池田名誉会長が、初めて大阪の地を踏み、大闘争を開始したのが昭和27年8月14日——名誉会長が乗った特急「つばめ号」が、淀川の鉄橋を渡り、大阪駅に着いたのは、すでに夕暮れ。「ここ大阪に、東京と並ぶ、否、それ以上の“広宣布流の大城”を築くために、師の戦いを一人、陰で支え抜く」と名誉会長。大阪に着くと、直ちに堺市の座談会へ。

翌日、戸田会長を迎えての「仏教大講演会」。名誉会長は、開会前のわずかな時間を見つけて街頭へ。

大阪の同志とともに参加を呼びかけるピラを配布した。まさしく一兵卒となって、道行く人にピラを渡し、声をかけた。たちまちシャツは汗でびしょり濡れたという。

この夏から4年後、「大阪の戦い」で1万1千111世帯という折伏の「不滅の金字塔」が打ち立てられた。名誉会長は語っている。「師弟の道は、どこか遠いところにあるのではない。人びとの幸福のために戦う、現実の闘争のなかにある」と。

昭和39年10月16日 October 16, 1964

ノルウェー オスロ Norway Oslo



オスロ湾

一人から始めよう

1964年(昭和39年)10月16日、池田SGI会長は、ノルウェーのオスロに降り立った。

この10月16日は、いくつもの重大ニュースが世界を飛び交った日だった。

田ツ連では、フルシチョフ首相が辞任。後任にはコスイギン首相が就任したと発表された。中国は初の核実験を行ったことを発表。イギリスでは総選挙の結果、政権が交代した。

世界が激動するなか、SGI会長が行ったのは、一人ひとりへの励みだった。ノルウェーで健気に戦う夫妻への激励であり、その年に入会した現地の一青年への激励だった。遠回りに見えて、ここに平和と繁栄への道がある。

SGI会長は語っている。「たった一人でも、本気で立ち上がり、『一心に』信心する人間が現れたら(中略)一家、一族、会社、地域、団体、全部、救っていける」と。

